
哀川くんの桜才戦記

駄猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀川くんの桜才戦記

【Nコード】

N9340S

【作者名】

駄猫

【あらすじ】

生徒会役員共にこんなキャラが、いたらどうなるのかという妄想小説です。初めての作品なので駄文かと思いますが暖かい目で見守ってください。

6・15題名変更しました

プログラグ + 主人公設定 (前書き)

初めまして『駄猫』です。

初めてなので、読みにくいかもしれませんがよろしくおねがいします。

m () m

プロローグ＋主人公設定

私立桜才学園

元は伝統ある女子校だったのだが

近年の少子化の影響で今年から共学化

その数、女子524人 男子28人

この小説の主人公は、学校に家が近い為ここを選んだ

この小説は、桜才学園生徒会にもう一人の男子が入った

IFのストーリーである・・・

主人公設定

名前 哀川 拓也

身長 168cm

体重 53kg

好きなモノ ラノベ・ゲームなどの娯楽

嫌いなモノ いじめ 差別

容姿 とあるの一方 行さん

口調 とあるのー 通行さんそのまま

性格 気にいったモノにはとても優しいが、

気にいらぬモノには少し沸点が下がる

プロローグ + 主人公設定（後書き）

初めまして『駄猫』です。

初めてなので、読みにくいかもしれませんがよろしくおねがいします。

m () m

第1話 はじめまして生徒会

主人公 s i d e

今、俺は走っている。

近いから余裕だアなんて思っていた、俺が憎いぞorz

「遅刻しちまアアアうウウウ」

キーンコーンカーンコーン・・・

「はア、遅刻だなこんちくしょオ」

「おい、その男子生徒」

「ンだア、遅刻した俺になンかようですかア」

「君もこの生徒と一緒に生徒会に入らないか？」

「は・・・？なんで俺なンですかア」

「遅刻したことをチャラにしてやるぞ」

「俺にしか利益がねエぞ、何をたくらんでやがる？」

「君にも興味があるんだ・・・保健体育の授業だけではたりなくてな（ボソッ）」

「聞こえたぞオテメエ・・・ま、チャラになるならはいつてやる

ところでテメエらの名前はなンだア？」

「そうだな、私は会『何かってに決めてるんですか!』長・・・」

「このガキは誰だア?」

「きつきさまー!ー!いつてはならないことを!」

「俺の時と同じ反応じゃ・・・」

「うるさ〜い!私は萩村スズ16歳だ!しかもIQ180の帰国子
女!」

「すまねエが、俺200なんだがア・・・ククッ」

そう主人公は一方通　さんがイメージなので頭がいいのだ!!

「な、なんだって!?!」

「まア、そういつこつたア」

「これで反対の奴はいなくなったな。」

「では、改めて私は2年会長の天草シノだ。」

「同じく2年書記の七条アリアよ。」

「えと、何故か副会長になった1年の津田タカトシ。よろしくな」

「・・・あんと同じ1年会計のは『萩村スズだろオ』・・・そう

「オ」

「俺は何をしたらいんだア？」

「津田と同じく副会長をしてもらう」

「さよか、ンじゃ1年副会長長哀川拓也だア

よろしく頼むぜ」

第1話 はじめまして生徒会（後書き）

一話完成！駄猫です。

次回「はじめでの生徒会（仮）」です。

よろしくおねがいますね。

第2話 はじめての生徒会

少子化の影響で女子校から共学となった桜才学園

そこに近いという理由だけで、入学し交換条件で生徒会に入った

1年副会長哀川拓也

「なア、津田ア……」

「どうした？」

「あの二人の暴走止められるかア？」

「無理だな……てか『プールの水を共有』て……」

「あの会長、ああいう所さえなけりゃ面倒見のいい人なんだがなア」

「たしかにな」

「議會をそろそろ始めるぞ、二人共」

『はいノリよくかい』

「最近いじめが社会問題となっている……」

「という訳で我が校でも緊急アンケートを行う」

「いじめはいけないこと？」

「ツチ、そりゃそオだろつよオ」

「なに舌打ちしてんだ？哀川」

「いや、いじめってのは俺個人がゆるせねエンだよ・・・」

「そうか・・・」

「でも、私の父は毎晩イジメられてよろこんでるけど・・・」

「仲むつまじいじゃないか」

(天然だノだぞオ)

昼休み・・・

「ふあ～・・・」

「ねみイ・・・」

「午後ってねむくなりますよね」

「分かるわア・・・」

「お昼のあとだもんね」

「ぐ～～～～」

「ちなみにスズちゃんは本当にお昼寝しないと体がもたないの」

(やっぱりこどもだノガキじゃねエかよオ)

放課後・・・

「 イイ学園を作る為には生徒の声を聞くことが大切だ」

「 そこで目安箱を設置しようと思う」

「 目安箱って以前にも実施しましたケドあんまり投書なかったんですよね」

「 おいおい、意味あンのかア？」

「 だから今回は入れたくなるように一工夫してみた」

「 これ・・・不信任ものだろ」

「 アワビはねエよ」

数日後・・・

「 今回はいつぱいきてるよ〜」

「 まじかよ・・・」

カサ

『 会長に手を出したら穴ぶちぬきます』

「シノちゃんのファンクラブ（主に女子）からね」

「怖いなあ」

「これ哀川君宛よ」

カサ

「なになに」

『あなたのファンです。がんばってください！』

「えエ」

「いや、脅迫文よりはいいだろ」

「これは・・・津田君宛ね」

「俺にも・・・」

カサ

『会長の半径30m以内にいるな』

「うっはア、よかったなア・・・ククッ」

「は」

第2話 はじめての生徒会（後書き）

次回「遅刻ウウウ」（仮）

よろしくおねがいます。

第3話 遅刻ウウウ

「すみません遅れました!!」

「すまねエ・・・遅れた」

「遅い!!今日は大事な会議といたただろうが!!」

「いや・・・」

「道に迷っちゃったんだア・・・」

「そうか二人共は入学して日が浅いか・・・よし」

「今日はこの桜才学園を案内してやろう!!」

『あれ?大事な会議は・・・?』

少年・少女移動中・・・

「ここが保健室だ」

「ほオ、中学と違って綺麗じゃねエかア・・・」

「だな」

「次行くぞ。」

移動中・・・

「ここが女子更衣室だ」

「なアなア、ここ関係エねエよなア・・・」

「何か意図があるんじゃないか？」

「何こそこそしている？次いくぞ」

再び移動中・・・

「ここが普段使われていない無人の教室だ」

『・・・』

さらに移動中・・・

「ふむ、男子が聞くとドキツとする場所を優先的に紹介しているんだが・・・」

「不満か？」

『うん／あア』

「どつりでギャルゲで見るような場所ばかりだと思ったぜエ・・・」

「お前がしてることに驚きだよ」

「そうかア？俺も男なンだぜエ」

「一回生徒会室にもどるぞ」

テクテク

「七条先輩じゃないですか」

「あ、津田君に哀川君」

「なにしてんだア？」

「忘れ物をとりに着たのよ」

「ということとは・・・」

「ここが私とシノちゃんが在籍している教室よ」

「そうなんですか」

「何か困ったことがあったら気軽に訪ねてきてね」

『はい／あア』

「でもこうして見ると少子化が悪いつてコトもないね」

「へ？」

「3年生になってP組まであったら大変」

『クラスのイメージカラーはピンクだな！！／だろっとなア』

「哀川く……遂にお前まで」

「なんか悟っちゃったぜエ……」

テクテクテク

「ここは女子専用トイレだ。男子は教職員のトイレを利用するよう
に」

「尚、ここでは用を足す他にナプキンを装着したりする」

「そこまで……(汗)」

「ちょっとシノちゃん!!」

「私はタン　ン派よ」

「すまない自分を基準に語ってしまった」

「毎日続くの?この感じ……」

「私はなれた」

「慣れちまうのはなア」

「あ、会長お疲れ様ですー」

「挨拶されるなんて流石ですね」

「まあ、慕われなければ人の上に立てないからな」

「そつだなア」

「君達も副会長として尊敬されるようにがんばれ」

「いやあ俺はそーゆーの苦手で」

「俺もだなア・・・」

「蔑まれた方がいいのか？・・・Mなんだな？」

「俺はSだぜエ・・・ククッ」

「発想が極端すぎ・・・て、ええ今言うことなのか」

テクテクテクテク

「ここが屋上よ」

「私、高いところが好き」

「へえ」

「人を見下ろせるから・・・笑えばいいじゃない」

「いや・・・」

「おい、会長そこでナニしてやがる・・・ここねエのかア」

「いや、私はいい」

「ひょっとして高い所苦手なのかア？（ニヤニヤ）」

「なっ！？そ、そんなわけないだろう」

「でも足が震えてんだがア」

「こっ、これはっ・・・楽しくて膝が笑ってるのさ！」

「それほど上手いこと言えてねエしよ・・・くくく」

第3話 遅刻ウウウウ（後書き）

次回「スピーチでなんか恥ずかしくない？」
よろしくお願いします。

第4話 スピーチでなんか恥ずかしくない？

どうも俺、ゾンボン副会長です。

後、魔装少じげふンアクセラ口調っす・・・

まあ、現実逃避もこれぐらいにしといて、何故俺が舞台上でスピーチしてンだろオナア・・・

<回想>

「今日は全校集会でスピーチを行う。

そこで君たち二人にも一緒に壇上にあがってもらっぞぞ

「えっ」「げっ・・・」

「大勢の人の前に出るのはキンチョーするな・・・

哀川はどう？」

「べ、別に緊張なんてしねエかな」

() (何故ツンデレ?) ()

「因みに私は大勢の人に見られると非常に興奮するぞ!!」

『それはそれで駄目だろっ』

「なア、会長……」

「なんだ？」

「普段さア、全校集会で何すんだア」

「中学校の時とそんなに変わらないと思うが……」

「いやア、会長が怪我したり休んだりしたら副会長の俺らが

やんなきゃだめだろ」

「なるほど……」

では、今日のスピーチは台本があるから、どちらかに読んでもらおう」

(あ、地雷ふんじまったア……)

「え……ならジャンケンで勝った方にしようぜ。哀川」

「あ、あア……」

『最初はグー……ジャンケンほい!!』

哀川……パー 津田……グー

「よっしやー!!」

「ちっくしょオオオ!!」

「なら、次回は津田にやってもらおう」

今回はよろしく頼むぞ哀川」

「チツ・・・負けちまったんだア。しゃアねエ」

<回想end>

津田に後で八つ当たりしにいく・・・

・・・全校集会終了・・・

・・・生徒会室・・・

「なア、結局副会長て何すんだア」

「それは俺も思った。

何やるんですかね？七条先輩」

「そうね、会長の補佐なんだからシノちゃんがこまった時に

てを貸してあげたら？」

「・・・でもシノちゃんて勉強も出来るし、運動もできるし

礼儀や作法、家事も完璧・・・」

「完璧超人じゃねエかよ・・・」

「そうね〜・・・特にないわね」

「え〜〜〜」

「おーい、戻ったぞ〜」

「おかえりなさい」

「ん？その手に持つてる財布はなんだア？」

「ああ、これか。」

「ここにくる途中で拾った」

「心ぐるしいが持ち主を特定出来るモノがないか調べさせてもらおう」

「いいの？」

「うーん・・・なにもないか・・・」

「だが持ち主は女だな」

「なんでわかったア？」

「ゴムがはいつてない」

『それじゃ俺も女になっちゃうよ／なっちまっぜ』

カリカリ

「津田爪噛むのクセなのか？」

「いい加減うぜエぞオ・・・」

「くせは一度つくとかっかいだから気をつけた方がいいよー

私もお尻いじるのくせになりそうだケド、なんとか踏みとどまってるわ」

「褒めるべきですか」

「いらねエだろオ・・・」

・・・自動販売機前・・・

スズ屈伸中

「萩村何やってんの？」

「見てわからない？ストレッチよ」

「それはわかんだけだよオ、何故」

「うん・・・足つらないように」

『「」苦勞様です』

・・・再び生徒会室・・・

「では、これより会議をはじめま・・・

て萩村がいないぞ？」

「まだ来てないみたいです」

「こんな身体でもきてるわ!!!」

「なんか理不尽に怒鳴られてる気が・・・」

「てか、理不尽だろオ」

・・・キンク(ry)・・・

「校内恋愛禁止、髪染め禁止、買い食い禁止、廊下走るの禁止

下校禁止・・・」

「「」この校則厳しいなア・・・」

「当然だ。学校とは勉学に励む場であり、

学生として逸脱した行為は一切認めない」

「しかし、なんでも駄目と決めつけると生徒の積極性に

支障をきたす可能性があります」

「む、そうか」

・・・でわ、恋愛は駄目だがオナ禁は解禁しよう」

「すごい緩和宣言・・・そんな校則ねエけどな」

第4話 スピーチでなんか恥ずかしくない？（後書き）

駄猫です。

次回「軽いジョーク？うるせエニ下アア」

よろしくお願いします。

第5話 軽いジョーク？うるせエ三下アア

「お前ら生徒会に入ったんだって？」

「ああ、半ば強引にな」

「俺は交換条件で・・・だがな」

「でも、美人揃いじゃないか・・・一人を除いて
変わって欲しいぐらいだぞ」

『えっ／＼あ』

「じゃア変わるかア？・・・てか代わりやがれエ」

「いや、俺と変わってくれ」

「え？いや・・・」

「なんだよ・・・やる気がねエンなら最初からやるとかいつ／＼じゃ
ねエぞオ・・・」

三下アアア・・・」

「畜生・・・この鬼畜めっ！！」

「す・・・すみません」

「なんでんなこといいやがった？（ニツコリ）」

「い、いや・・・軽いジョークです」

『軽いジョークで俺らをいじんじゃねえええ！！』

・・・生徒会室・・・

生徒会長天草シノはよく悩める生徒から相談をつける

「流石会長人望がありますね」

「まあ、生徒会長として当然の責務だ。

私はいちもかたいしな・・・

因みに下の口もかたいぞ！！ガードが」

「テメエいつも一言多いんだよ！」

・・・数分後・・・

「ちよつと津田！！」

この報告書3カ所も誤字があつたわよ」

「え・・・ほんとう？」

「ん・・・マジみてエだな」

「アンタたるんでるんじゃないの!!」

「ちょっとそこに座りなさい!!」

スタスタ・・・トサ

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「ククッ」

「そこにひざまずけ!!」(泣)

・・・更に数分後・・・

「新聞部から取材のオファー？」

「ハイ」

「するとインタビューされる訳か・・・

練習しておく必要があるな」

「津田君、哀川君」

「ん?」「はい?」

「インタビューの指導してあげたら?」

『へ？なんでおねらっ？』

「AVによくあるじゃないインタビューのシーン」

「よろしく頼む」

「え・・・ちよ・・・」

「なんでそういう方向に行ってるんだよ」

・・・取材当日・・・

「新聞部の畑です。よろしくお願いします。」

「う、うむ・・・」「こちらこそ」

「あんまり緊張なさらず、楽しんでいいですよ」

「ん・・・そ、そうか」

スタスタ・・・トサ

「なんで寝ころんでんだよ・・・」

「いや、今日はおおい日だな。」

立っても座っててもキツイ」

「じゃあ仕方ないですね」

((なれる・・・なれる俺!!))

・・・数分後・・・

「では次は・・・写真撮影を行います」

「えー！？恥ずかしいなあ・・・

ポーズとったほうがいい？」

「ノリノリですね」

「いえ紹介記事として使うので、

生徒会室をバックに皆さんは普通に立っていてください」

「なるほど・・・ギャルゲー式画面取りという奴だな」

「そんなン聞いたことねエよ！」

「初めて聞きましたよ」

カシャッ

・・・数分後・・・

「では男子代表とした新副会長の哀川君、津田君から今後の抱負を・
・

では、哀川君から」

(無難に言った方がいいよなア・・・)

「そつだなア・・・」

まア、一生懸命にやるわア。悔いのねエようになア・・・」

「そつですか・・・ツチつまらん(ぼそ)」

「聞こえてンぞ・・・テムエエエエ！」

「では、次は津田君から」

「無視すンなや・・・」

「そつですね・・・」

男女共隔たりのない関係を築いていきたいな・・・と思ってます」

「つまり更衣室やシャワー室の壁をとっぱらう気が」

「エロスね」

「性欲の塊」

「津田ア・・・遂にテムエまでエ・・・」

「副会長はエロい・・・と」

「えーアンタもそつち側ー？」

「残念だったなあ……変態仲間がいなくて……ククク」

「だから違あああああうー!!」(泣)

第5話 軽いジョーク？うるせエ三下アマ（後書き）

次回「柔道部作るのかーそーなのかー」
次回もよろしくお願いします。

第6話 柔道部作るのかーそーなのかー

今回の話にルーミアさんは関係ありません・・・

っは、ンだア？今の・・・

「なア、会長・・・

あつてほしい奴がインだがよオ」

テクテク

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「結婚するのか？」

「？」

「テメエは俺のなんなんだア・・・」

「私、拓也君とタカトシ君と同じクラスの三葉ムツミです

実は新しい部を作りたいと思ひまして」

「なんだ？」

「それで何の部を？」

「柔道部です！！」

「ああ知ってる寝技が48個ある奴ね」

『全然しつてませんね／しつてねエよな』

「ホントはムエタイ部にしたいんだケド・・・

メジャーなトコで柔道を・・・部員獲得しやすいしね」

「三葉つて格闘好き？」

「うん！！己の技を磨いた身体と身体のぶつかり合い・・・

あついじゃん！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん確かに熱い」

『会長ノテメエ違うこと考えてるだろ』

「新しい部を発足させるには、部員が5人以上必要よ

それに満たなきゃ愛好会というコトになるわね」

「なんでこんな所に子どもが？」

「あ……」

「ぶふ……クハハハ……ああ腹痛てエ」

「津田！！」

「ハ……？」

「型貸しなさい！！」

「エ？」

「いい！？

よく聞きなさい！！

私は萩村スズ！！あなたと同じ16歳！！」

「そうは見えねエけどな……ククッ」

「うるさい！！」

さらにIQ180の帰国子女！！

英語ペラペラ10桁の暗算なんて朝飯前！！

どづー！？これでも私のこと子供扱いする！？」

(1000000000 + 1000000000)

「へーーーーーすごいねーーーーー」

「もっと複雑な計算にしるーーーーーっ!!」

「やべエWWW腹筋壊れるWWW」

「とりあえず部員5人のとこ4人にまかりません?」

「却下にきまつてるだろう」

「ちゃんと理由があるんです

ストレッチする時二人一組になるじゃないですか

でも5人だと1人余っちゃって仲間外れみたいな感じでヤでしょ?」

「一理あるな・・・じゃあ今後は必要定員6人にしよう

がんばって探してこい」

「あれーーーーハードルあがっちゃったーーーー!?」

「まア、がんばれWWW」

「笑いすぎだろ」

「二人は以前部活やってた?」

「ええ」

「いや、やってねエ」

「津田君なにやってたの？」

「小学生の時は野球、中学ではサッカーを」

「ほー」

「男の子ね」

「津田は球遊びが好きなんだな」

「男の子だもの」

「なんかひっかるな〜・・・」

「哀川は何もやってなかったんだ」

「あア、親いねエから金稼がなくちゃいけなかったからなア」

「親御さんは仕事？」

「ンにゃ、俺アルビノだからなア（笑）」

『・・・・・・・・・・』

「ま、気にすんなやW今や億万長者だからな」

「……それはどうしたんだ？」

「株だぜエ」

「そついやIQ200って設定だったな」

「設定いうんじゃないわ」

「んじゃ、三葉てつだつてくるわア」

『……』

「色々あるんだな……」

「そつね……」

「哀川に変わりはないんだし今まで通りで良いんじゃないですか？」

『そつね／そつだな』

「でわ、私達も解散しましょうか」

「おい、三下そっちはどうだア？」

「こっちか？良い感じだが、そっちは？」

「今まで、出来なかったことをやってるぜエ

また今度の長期休みにそっちにかえるわ・・・またな幻想殺し」

「ああ、またな一方通行・・・」

第6話 柔道部作るのかーそーなのかー（後書き）

二連続更新！！

駄猫です。

ネタバレですが、生徒会の一存と混ぜたりしてます

特に企業（笑）

次回「そろそろ中間じゃねエかア」

よろしく願います。

第7話 そろそろ中間じゃねエかア

「さて、来週から中間考査なわけなのだが・・・
知つての通り我が校は試験結果がはりだされる。

そして生徒会役員は学年20位以内に入るコトがノルマとなつて
いる」

「大丈夫よ」

「問題ありません」

「あいよ」

「各自しっかり勉強しておくように」

「えっ!？」

「なんだ津田自信がないのか？」

「恥ずかしながら平凡レベルで」

「よくそんなんで生徒会に入る気になつたな」

『俺の記憶ではあんだのせいですノテメエの所為だろうがよオ』

「なア、テスト休みつてあンのかア？」

「一応一週間ほどな」

「なら、その休みの時生徒会やすませてもらおう」

「なぜだ？」

「……聞かぬでくれ……」

「ふむ……」

「よし、いいぞ」

「すまん」

「ともかく、せっかくだから私が津田の勉強を見てやる」

「因みに私はビビシいくからな……」

「は……はい」

「時に君はSかMか？」

「は？」

「Mならビビシいかな……悦ばすだけだから……」

「じゃあMでいいです」

「……数分後……」

「津田は電子辞書をもっているのか」

「ええ。結構便利ですよー」

「私はあまりこーゆうのは好かないな」

「アナログ派ですか？」

「いや、人に貸しにくいじゃないか」

「確かに高価なモノですからね」

「いや、調べたモノが履歴にのこるから」

「分かりやすい思春期ですね」

・・・教室にて・・・

「なあ、哀川此処おしえてくれない？」

「面倒だなア・・・仕方ねエ、どこが分からないんだア？」

「此処の複二次式」

「此処はこうやって・・・そうそう・・・」

出来んじゃないかア」

「有り難う哀川・・・ところで萩村しらない？」

「さつき廊下にいたぞ」

「おう……じゃあなあ」

「おう」

……廊下にて……

「IQ180の萩村、英語教えてください」

「いいわよ、ただ……」

やるなら二人きりになれる場所で……」

「え……」

「人に見られると、私が教えられてるように見えるのよ」

「どんくさいわね……こんな問題30秒でやりなさいよ」

「すみません……」

数学でわからない問題があった。

でも会長や萩村は怖いし、哀川は見つからなかったため

優しい七条先輩に教えてもらうことにした

「此処、わからないんですが」

「よし……お姉さんが教えてあげる」

「……」

「どうしたんだ津田ア？」

(あれ……俺って本当にM?)

ガーーーーン

「しゃアねエ……」

七条先輩先いっついてくんねエ？」

「う、うん」

……津田復活……

「ハッ」

「お、戻ったか」

「俺はいつたい……」

「そろそろ生徒会いくぞ」

「あ、ああ」

・・・中間テスト当日・・・

簡単だなア・・・はやくおわんねエかなア・・・

お？なんか津田が焦ってやがるw

・・・生徒会室にて・・・

「回答欄いつこずつずらしてて焦りましたよ」

「だから焦ってたのか」

「ああ」

「そそっかしい奴だ。」

「ずらすのはスク水の秘所だけにしておけ」

「旧スク水ってもうないわよ」

「そうか、すまなかったな」

「なぜ謝ってんだよ・・・」

・・・テスト成績公開日・・・

「・・・」

「ふーん」

「まあ、こんなものか」

「あーまたシノちゃんにトップとられちゃった

うーん・・・こっちのトップはシノちゃんより上なんだけどな

ー」

「ハハハ相変わらずアリアは面白いことをいうな

・・・なあ?」

() (答えねエエエエ!!) ()

第7話 そろそろ中間じゃねエかア（後書き）

次回「ひさしぶりだな」

よろしくお願ひします！！

第8話 ひたしぶり（前書き）

今回からちょっと生徒会役員共からはなれます

第8話 ひさしぶり

学校から帰った後、哀川はすぐ「幻想殺し」に電話をかけた・・・

ブルルルルル・・・ブルルルルル・・・ガチャ

「よオ、早め・・・てか明日から一週間そっちにいくわア」

『え？なんでだ？』

「テスト休みつつうもんがあってなア

つー訳だ明日迎えにきてくれ」

『お、おう。どこでだ？』

「 駅でよろしく」

『わかった。じゃあまた明日』

「おう」

プープー

久しぶりだなあいつと会っの・・・

明日は早起きなんだ。早く寝よう・・・

・・・午前7時 駅にて・・・

あ、そういや時間いっの忘れも、「おーい!」

あれー?

「お、おう。時間いってなかったんだがどうして分かったんだア？」

「感だけど？」

「そ、そうか」

そう、彼女こそが「幻想殺し」こと上条優奈である。

「ンで、残響死滅は？」

「まだ、見つかってない・・・

すまん・・・」

「いやいいンだぜエ

取り敢えずひさしぶりだなア優奈」

「こっちこそひさしぶり拓也」

やっぱりあいつらといっても楽しいが、こっちなにかいいなア・・・

「どっか行くか？お前あんまり息抜きしてねエンだろ？」

「あ、ああ／＼／＼ありがとう」

なんで紅くなってやがんだ？

「どこいく？」

「買い物いいかな・・・？」

「いいぜエ・・・ドンときやがれ」

「／＼（格好良くなったな／＼／＼）」

・・・ジャ コ・・・

「フーン・・・碧陽学園ねエ・・・そこが・・・」

「ああ、流行の発信地になろうとしている・・・」

「俺らはその企業とやらを止めればいいんだな？」

「ええ、今のところは・・・な？」

「残響死滅も関係あるっばいなア・・・」

「あ、じゃがいも安い」

「カレーにでもすすつかア？」

「いいな、それ・・・」

よしカレーにしよう」

ドカン！！

「どうしやがったア・・・？」

「何かが発発したみたいだな・・・」

「久々に能力ONにすつかア・・・」

(残響死滅に日常を壊されるのはいやだし、今のうちに感覚をもどしておくかア)

クカカカカカ・・・久々だぜエ」

「よし、いくぞ一方通行！」

「いわれなくてもやってヤンよオオ！！」

・・・爆発現場・・・

「なにも感じねエなア・・・」

「そつだな」

「取り敢えず『反射』にしておくか・・・」

何もかんじねエってのもおかしいよなア・・・

「応レベル6にしておくか・・・」

「なにかいたぞ!」

「気づかれたか・・・」

俺は垣根帝督だ! まあ、すぐ逝くだろうから関係ないがな」

「なんかメルヘンがいるんですが・・・」

「幻想殺しさん」

「ぷふw・・・目の前に居るのにw・・・いっんじゃねえw」

「ブチッッッ」

「来い!! 未原物質!!」

「やっぱりメルヘンじゃねえかw」

「自分でも気にしてることをオオオオオ!!」

「下がってる・・・ホソ優奈」

「来やがれクソメルヘン野郎!!」

「行け!!」

「ズザザザザザ」

「きくかよオ！俺から行かしてもらっぜエ・・・」

ドン！！

「毒死か爆死どっちがいいんだア？・・・ククッ」

「やられるかあああ！！」

「ギアンねエンでしたアアア！！」

ブシャ！！

「な、俺の未原物質の羽がア！！クソヤロオオ！！」

「知るかよ、三下以下の雑魚がア」

「おらあああああ！！」

「きかねエつつてんだろ」

ブシャ！！・・・ポタポタ

「興がそがれた」

トン・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・ズシャツツツツ！！

「帰るぞ、優奈」

「あ、ああ」

「早く帰ってお前のカレーがくいてエンだよ・・・」

ポン・・・クシヤクシヤ

「ああ／＼、でも其れ告白みたいだな／＼」

「あ、（ヤベエハズイぞオこれは／＼）」

と、取り敢えず帰ろうぜエ」

「う、うん」

テクテク・・・

・・・その後・・・

「やはり未原物質程度では駄目か・・・」

ククツ・・・やはり面白いな・・・

一方通行のなり損ないかと思っていたんだがな・・・

先ずは幻想殺しを『覚醒』させるか・・・」

・・・拓也side・・・

「カレーは未だかア？」

「もう少しまで！・・・ん・・・良い感じだな
並べるから手伝ってくれ」

「おう！・・・！」

『いただきます！・・・！』

『じつはそのままでした』

「まっそろそろ寝るかア・・・！」

「こっちききて?」

「おっ」

テクテク

「此処で寝て?」

「表札優奈の名前なんだが・・・」

「ひさしぶりに一緒に／＼／」

「ヤベエ・・・ヤベエぞ・・・」

理性がマツハですりきれるウウウウウウ

「あ、あア」

「男は度胸じゃアアアア!」

「ありがと／＼／・・・おやすみ／＼／」

「あア・・・(理性よ持ちやがねエ・・・)」

第8話 ひさしぶり（後書き）

ていとくんファンの方マジすいません!!（土下座）

次回「二日目・・・デート」

よろしくお願いします!!

第9話 二日目 デート

「……………」

「ん……………」

「お……………」

「んあ……………」

「お〜き〜る」

「後……………5年……………」

ブチッ

「オルアアアア！」

「そげぶっ！！！」

コロコロ……………」

「……………何しやがんだてめエ！」

「起きなかったお前がわるい！！！」

「今日なんかあったか？」

「遊びに行くって行ったじゃない！！！」

<回想>

カレー作り中

「今日休めなかったし、明日どっかいくかア？」

「え、いいのか？」

「後、最長で3日しかいれねェからな」

「そ、そうなのか・・・」

「つーわけだから・・・どこいく？」

「遊園地は？」

「ここらにあつたかア？」

「じゃ、じゃあ水族館は？」

「・・・ここらにあつたなア・・・よし其所にすつかア」

「うん（よし、がんばるじー）」

<回想終了>

「・・・」

「おもいだした？」

「そうだったなァ・・・スマン!!」

「いいんだけど、早くいじつぜ」

「あ、あァ」

・・・水族館前・・・

「取り敢えず、回るかァ」

「おう!!」

・・・ペンギン前・・・

「カワエエエ!!」

「やべえよかぁいいよぉ!!」

「おいキャラ崩れすげエぞ」

「関係ねえよ!可愛いモンは可愛いんだ!!」

「・・・そうかよ・・・」

「ああ、かわええ!!」

ズルズル

「あゝ!ペンギイン!!」

「すみません、すみません・・・」

・・・魚前・・・

「凄いよこれ!!」

魚がこんなに沢山いるよ!拓也!!」

「そうだなア・・・」

「こんなに魚って居るんだな!」

「今日の飯は魚にすつかア・・・」

「おい!!魚目の前にして其れはねえだろ」

「すまねエなア・・・でも飯は魚だろ!

「ここ北海道だし」

駄猫：ここは実は北海道だったのです!

え?碧陽って言ってたから知ってる?

それは済みませんでした・・・orz

「んあ?今のは何だア?」

「・・・大丈夫か?」

「そんな目でみんじゃねエエエ!!」

「……だって……なあ？」

「俺も何でこんなコトいったのか分かんねエよ……」

……水族館前……

「そついやさア、お前学校行ってんのか？」

「ああ、碧陽にな……」

「そつか、企業かア……」

「ああ、そつだ」

「企業つたつてなア、……まアいいかア

学校は楽しいか？」

「結構な……面倒なのも居るがな……お前は？」

「おもしれエぞオ……一応生徒会役員だからなア……」

「そろそろ帰るかア。魚買ってからなア」

「やっぱり魚食つのかよ!!」

「有言実行だかなア……」

・・・ジャス にて・・・

「お、安いぜエ・・・この鮭」

「テメエもキャラ崩れハンパネエぞおい！」

「まあな・・・面白かったかア？」

「ああ・・・そ、その拓也はどうだった？」

「楽しかったぞオク々にはしゃいだぜエ」

駄猫：はしゃいでたシーンは、キャラ崩れすぎてキモイから飛ばさせていただきました

「（無視無視・・・）よし帰るぞオ」

「おっ」

・・・上条さん宅にて・・・

「そついえば拓也は、飯つくれんの？」

「あたりめエだろ・・・俺一人暮らししてんだろつがよオ」

「さようか・・・」

哀川さん何分かクツキング

タラタタタタ タラタタタタ タララララララタタタタ

今日のレシピは

甘塩鮭（切り身） 2切れ

まいたけ 50g

しめじ 50g

玉ねぎ 1/2個

バター 10g

キッコーマン特選丸大豆しょうゆ 大さじ1

チーズ（溶けるタイプ） 40g

パセリ（みじん切り） 少々

作り方は、

1. まいたけ、しめじは根元を切り落とし、ほぐす。
2. 玉ねぎは薄切りにする。
3. フライパンにバター半量を中火で溶かし、鮭を軽く焼き色が
つくまで両面焼き、取り

出す。

4．残りのバターで（1）と（2）をしんなりするまで炒める。
しょうゆを回し入れ、全

体に混ぜたら広げて（3）をのせる。

5．チーズをかけてふたをし、チーズが溶けたら火を止め、器に盛ってパセリをふる。

です。

『いただきます!』

「ウメエ!」

「だろ？」

・・・数分後・・・

『し馳走様!』

「明日はどうするんだア？」

「どございようか・・・」

「散策でもすつかア？」

「そございようか」

「明日は昼からなア」

「そっするか……なら寝るかあ……」

「……お」

Z
Z
Z
Z
Z

第9話 二日目 デート（後書き）

次回「助けたいと思うからたすけんだよオ」

因みにレシピはキッチンマンのホームクッキングからの「コピペ」です
よろしくお願いします。

第10話 助けたいと思うからたすけんだよオ！（前書き）

今回は自分の妄想（本能）に従って書かせていただきます。――（

<

でわ、どござー！

第10話 助けたいと思うからたすけンだよオ!

二日目の夜 01:30・・・

コッコッコッコ

「いたぞ・・・」

「コイツがこの世界の幻想殺しか・・・」

「なり損ないとも言つがなW」

「取り敢えず、つれていくぞ」

「おっ」

「よいしょ・・・軽いな・・・」

「そつだな」

「一方通行に見つかったら洒落にならない・・・」

早くいくぞ!」

「おっ」

二日目の夜・・・02:00

「ツチ、嫌な感じがしゃがる・・・」

なんなんだア、この胸騒ぎはア……」

トタトタトタ

「おい、優奈……おい！……」

ツチ、そういうことかよオオ！！」

ドタドタ……ドタン……ガシヤ

「……よくも……あいつに……優奈に、手をだしやがったな
アアア！！」

タッタッタッタ……ドン！！

二日目の夜 02:30……

「よし！！ここで引き渡しだったな……」

「確か03:00だったか」

ドン！！……

「クヒヤヒヤヒヤ……見いつけたアアアア！」

「うち……ならコイツがどうなってもいいのか？」

「テメエらみたいなのが触っていいやつじゃアねエンだよオ！！」

ズシャツ・・・ドタ・・・グチャ・・・ブチ・・・

「お、おいは払っただろう!!」

払った分は仕事しやがれ!!」

「砂煙めんでエなア・・・」

ヒヨオオオオオ

「おい!?!お前ら!?!」

「ククク・・・まだ生きてるぜえ?」

「だ、だったら・・・」

「だが、片方は四肢潰したし・・・もう片方は四肢を切り取ったからなア」

「お、俺は死にたくない!死にたくないんだああ!!」

「知るかよ・・・」

トン・・・グチャア・・・

「おい、残響死滅見てやがんだろオ!

次俺の光にふれてでもしてみる!ぶっ殺すからなア!!」

side 残響死滅

「フム・・・幻想殺しを『覚醒』させるのは難しそうだな・・・」

残響死滅は昔レベル5・・・つまり超能力者のアクセラレータと戦い相打ちであった、

今は、強くなつたとはいえ、彼「哀川拓也」こと一方通行はレベル6・・・絶対能力者

であるため、力の差は歴然。しかも残響死滅は音使い・・・ユージング・サウンドとい

うことで相性も悪い・・・このような状態で戦うとしたら、唯の馬鹿か、戦闘狂ぐらい

である。

この男「残響死滅」は馬鹿でも戦闘狂でもない為そんな無謀な戦いはしたくない。

ということ、で、「幻想殺し覚醒」を諦めたのである。

しかし、まだコイツの企みは終わっていないようだ・・・。

三日目 04:00・・・

「う、うん・・・」

「ZZZZZ・・・」

「うわっ!?!?」

「ZZZZ・・・ん?」

「なんでここにいやがんだ!! / / /」

「あ・・・す、すまん!!」

「ま、まあいいんだが・・・ / / /」

「あ、それと桜才にこねエかア?」

「無理じゃねえのか?」

「俺に任せる。おど・・・ンン説得してやつから」

「な、ならそうさせてもらっつ」

「ついでに生徒会に入れるようにしとくわア」

「あ、ありがとう」

(お前には、誰も手をださせねエ)

『ええ！？』

「優奈ちゃん転校するんですか？」

「ど、どうしてなんだ？」

「いや、ちょっとあつてな・・・」

「まあ、また来てやつからな。」

「杉崎先輩がいけなかつたんですか！？」

「だつたら・・・」

「ちがうぞ？ちよつと正義の味方にさそわれてな」

「・・・おおおい！！優奈アア！！」

「きたみたいだ・・・また連絡するからな」

「そろそろ飛行機場に行くぞオオオ！！」

「わかったあああ!」

「優奈先輩・・・」

「・・・またな」

「はい、またです。」

「おう、連絡はしていいよ!」

「じゃ、いつてくる」

『いつてらしゃい』

次回からまた桜才学園に移動します・・・

残響死滅は（かませ犬として）でますw

第10話 助けたいと思うからたすけんだよオ！（後書き）

次回「連絡は一日に三回まで」
よろしく願います！

第11話 連絡は一日に三回まで

飛行機なう

「おい、優奈……」

「ん？何だ？」

「何ずっとメールしてんだ？……」

そう上条優奈さんは第11話の二人「椎名深夏」とその妹「椎名真冬」とずっと

メールをしている……

因みに、ケータイの代金は哀川こと俺が払っている。

……畜生、不幸だアア！

「ケータイの代金を払ってんのは、俺なんだから……」

あんま使ってくれるな……」

「あいよ」

「それで何回めのメールだっけか？」

「53回」

・・・どうだろう気持ちは分かってくれるかア？

パケ放題なら良かったんだがなア・・・(遠い目)

「取り敢えず飛行機内ではやめれ」

「じゃあねえなあ・・・」

「じゃあねえのはコツチだアアア!!」

「金、お前に払って貰おうかな・・・」

「・・・すまなかった」

「・・・」

「あの・・・」

「・・・」

「すみませんデシタアア!!」

「もうこういっつのは止めてくれよ・・・頼むから・・・」

「あ、ああ・・・(こんな真っ白になるなんて・・・)」

空港なう

「あ、桜才学園は恋愛禁止なんだってよオ

・・・まア俺にはカンケーねエけどな・・・」

この哀川君、自分はモヤシと思っているので女子共（上条優奈を含まず）

にモテていることを知らない。ついでに言つと、自分についても鈍感であり、

好意（自分のも相手のも）に気付かないのである。

「・・・そ、そうか（やばいぞ・・・）、告白しようと思ったのに・・・」

「そろそろ行くかア・・・」

午前10:00 桜才学園なう

「桜才よ、私はかえってきたアア!!」

「ど、どうしたんだ?」

「・・・電波?」

「今日は早く帰ってねようか・・・」

「そんな暖かい目でみんじゃねエエエエ!!--」

そんなこんなで午前11:00なう

「そろそろはいくかア・・・」

因みに10:00〜11:00迄外の案内をしていました。

さらに、メール（パケ放題）で校長をおど・・・説得しておくを出
されました。

「生徒会室にいくぞオ」

「わかった」

生徒会入りもオツケーされました

11:30ぐらい(?)なう

「やってきました生徒会室」

「ど、どうしたんだ?」

「・・・(デジャブじゃねエかよオ)」

「まあいいか」

「・・・(あぶねエエエエエ!!)」

「ンじゃ、来るまで待つとくかア」

「おっ……」

12:30 ふう

「お、哀川じゃん……そちらの方は？」

「あー、えとコイツは上条優奈。」

「よろしく頼むな？」

「んでコイツは津田タカトシ。」

「よ、よろしく」

「会長は？」

「後で来るって」

少年少女会話中……

「お、哀川きてるじゃないか」

「ども会長に七条先輩に萩村」

「そちらに居るのは？」

「上条優奈っつんだ」

「よろしく頼むぜ」

「ああ、「こちらこそ」

「えと三人は・・・右から会長の天草シノ」

「よろしく頼む」

「次に書記の七条アリア」

「よろしくね」

「最後に会計の萩村スズ・・・一応高校生らしい」

「いらん事いうな!!!・・・よろしく頼むわね」

「ンで、優奈は校長をおど・・・ンン！説得して転入かつ生徒会入りをした」

『脅したんだろ!!!言い直してもわかるわ!!!』

「おお!?3人共ツツコンできやがった」

「哀川さあ、キャラ変わったよな・・・」

「重しがどっかいったかなア・・・」

「旅行の時のか？」

「ああ・・・」

「プロコンコン

「あ、メール……」

「ここ桜才はケータイ禁止だからきをつけるよオ」

「おう……」

「後、連絡は三回までな？超えたら料金はらわせるぞ……くくっ」

「ん。」

取り敢えず会議なう

午後5:00なう

「今日は解散だ。お疲れだった」

「ンじゃ帰るぞ優奈」

『ちよつとまてえええい!!』

「ン?」

「お前ら一緒にすんでんの?」

「まア「幼馴染」だしな」

「お前らがいいんならいいんだが・・・」

「今度こそ帰るな？」

「お、おう」

「今日は冷シャブにすつかア」

「よし！食つぞー！」

「夫婦みたいだな・・・」

設定集「上条・残響・哀川編」(前書き)

前回言っていた通り、設定集をします。

設定集「上条・残響・哀川編」

<設定>

「氏名」上条 優奈

「性別 身長」女性 162cm

「属性」秩序・善

「能力」筋力：D 耐久：C

敏捷：D 魔力：x

幸運：F 宝具：A++

「スキル」言霊：A 前兆の感知：A 直感：A カリスマ：B

「宝具」幻想殺し：S（EX）

「性格」基本は面倒臭がりかつ無気力で憂々とした性格であり、面倒だと思つた事からは全身全霊を以て逃げようとする。その一方で心根は熱く、困つてる人を見れば老若男女・親交の有無・自危 険一切不問で助けに行く性格で、たとえ敵でも動機を察すれば説得すら試みる程。エイワスコ れを3種類のヒーローの1つ「誰に教えられなくても、自身の内から湧く感情に従つて真つ直に 進もうとする者」とし、そこに善悪の判断は無いとしている。ただし、その優しさゆえ、非になりきれない面があるため、土御門やステイルから窘められることもある。記憶を失う以は、自らを「偽善使い（フォックスワード）」と称して自嘲し、自分の無力さを卑下するなど比的 消極的

な面も多かった。また、かなりの自虐ネタ好きでもある。・・・W
ikiより

「容姿」けんぷファアの瀬能 ナツル（女）の少し大人版

「氏名」哀川 拓也

「性別 身長」男性 168cm

「属性」善・悪・狂

「能力」筋力：C 耐久：C

敏捷：C 魔力：x

幸運：A 宝具：EX（?）

「スキル」言霊：A 前兆の感知：A 直感：A カリスマ：A
反射：EX

「宝具」一方通行：EX

レベル6な為、どんな能力や魔術でもベクトル変換
できる。

「性格」戦闘中に感情が昂ると凶暴な言動や残虐な戦い方をしたり、
敵を痛めつける際に快楽を感じる ような危うい面も見せる。

表情も淡々とした無愛想な物やかめっ面が多い。元はごく普通の

少年だったが、10歳の頃に自分の能力が際限無く周囲を
傷つけた件で自らの危険性を自覚した 事を機に、他者へ感

情を向ける事に非常に消極的になり、常に周りを拒絶する無関心で

傍若無　　人な性格となるが、上条優奈めと出会ってからは、彼女を守るために行動しながら、徐々に他　　人への思いやりを示すようになっていく。今はツッコミ役など明るくなっている。

「容姿」一方通行

「氏名」残響死滅

「性別」身長」男性　176cm

「属性」混沌・悪

「能力」筋力：D（A）　耐久：D（A）

敏捷：D（A）　魔力：S

幸運：S　宝具：A

「スキル」直感：A　カリスマ：A　精神汚染：A　黄金率：A

「宝具」音使い：A

レベル5の為ランクはA止まりである。

「性格」残虐で自分の為なら、「犠牲？何それオイシイの？」状態である。精神汚染は音によるモノの　　為、哀川には一切効かない。上条の場合は、頭に触れば元に戻る。

上条優奈の（ ）は覚醒した場合である。
残響死滅の（ ）はとある条件下の場合である。
能力は宝具とする。

この世界はとあるの幻想殺しと一方通行が生まれたが、学園都市が無い^がため色々違うストーリーになった。とある「夢」で自分が違う世界の学園都市にいたコトを知る。

設定集「上条・残響・哀川編」(後書き)

次話「やってやるぞオ(何かを)」
よろしくお願いします。

第12話 「やっぺやろぞオ」何かを「」(前書き)

前回の設定は見てくくなってしまう申し訳ありません
ではどうぞ(^^)(

第12話 「やってやるぞオ（何かを）」

（一年A組津田タカトシ君、哀川拓也君、上条優奈さん。至急生徒会室まで来てください）

「タカトシ君に拓也君に優奈ちゃんよばれてるよ〜」

「あ、うん」「うい」「あんがとよ」

「いや、いいよ〜」

・・・生徒会室・・・

「会長、呼び出しに放送使うのやめてくださいよ・・・」

「恥ずかしい」

「恥ずかしくはねエが、俺も同意する」

「ああ。私も」

「仕方ないだろう・・・わざわざ教室に行けといつのか・・・」

「あ、なら俺のケータイ番号教えときますよ」

あ、タカトシやっちまったなア・・・

「おお、そうか。なら没収だな」

「ククツ・・・」

「笑ってるけど、拓也はもってきてないのか？」

「校則みてるからなア・・・キチンと」

優奈はしらんがな・・・

「なら上条は？」

「も、もってきてねーし」

おい、それ持ってきてるといってンのと同じじゃねエかよ・・・

「だってきア・・・タカトシ以外持って来てねエゼエ・・・」

「ちょっと会長、ケータイ貸して貰っていいですか？」

ヤ、ヤベエ・・・Let's超能力time

ピポパ・・・

「ほらな？」

「そつみただいな」

「ククツ・・・）やりイww」

・・・会議中・・・

「来週は高総体か・・・行事があると忙しくなるから気が滅入るな・・・」

「おれは好きですけどね、祭り事・・・授業無いから

会長は学園のイベントですきなモノないんですか？」

「ふむ・・・

学校遅刻しまいと走っていると曲がり角で運命の人とごっつんこ」

「パンをくわえてがぬけてるわ」

「ギャルゲーのイベントじゃねえよ!」

「フラグって奴だな」

「ナンデユウナサンガシツテオラレルノデ？」

「拓也の部屋を掃除してる時にな・・・フフフフフ」

『コエエエエエー!』

・・・グラウンドにて・・・

「小中学校の頃は学校で動物飼ってましたけど、さすがに高校じゃないですね」

「そうだな、口だけの安い女になりたくないからな・・・ん

・・・でもお高くとまっても鼻について嫌な感じだな・・・」

「どっちなんだア？」

「とゆーわけで手軽な女をめざしている」

「結局安くなってんじゃん」

「俺の弁当なんて夕べの残り物ばかりですよ」

「学校にもってくるお弁当なんてそんなモンでしょ」

「そうねえ・・・私んお弁当も残り物よ」

『・・・』

(おい、タカトシシツ「コミヤがね」)

(無理！)

(((((.....))))))

.....廊下.....

「会長つて物事を何でも完璧にこなしちゃいそうですね」

「そつだなア」

男組は荷物持ちをしている・・・

「私にだって失敗談はあるぞ？・・・あれは中学の英語の時だった」

<回想>

（「次の英語を日本語に訳しなさい」「鉛筆」はPENNC・・・）

（あれ見てしまった・・・）

<回想終了>

「カンニングしてしまった戒めとして空欄で出した」

「メンドクセエ生き方だな・・・」

・・・帰宅中・・・

今日は、優奈は先に帰っている・・・

午後6時なう

なんかおもしれエことねエかなア・・・

ツチ！車に轢かれそうな奴がいやがんじゃないかよ！

ならやることは一つ・・・

「オラァァァァァ！」

・・・ブウウン

「おい、大丈夫かア？」

「う、うん」

「あの車なんか可笑しかったような・・・」

「あ、ありがと・・・／＼あの、名前教えてもらえる？」

「ナンバーは・・・ン？」

「名前を・・・」

「あ、すまねエ・・・俺は哀川拓也・・・」

えと、お前は？」

「初音ミクです。」

「その制服「桜才」だよな」

「うん・・・って副会長の哀川くん!？」

「ま、いいじゃねエか・・・そこらわ」

「なら又明日だな・・・」

「うん。又明日・・・」

第12話 「やってやるぞオ（何かを）」（後書き）

やっちゃった初音さん出しちゃいました・・・

朝ハメルトヾ聞いてたらつい・・・

次回「溶かされた恋心」初音さんsideがんばります。
よろしく願います。

第13話 「溶かされた恋心」(前書き)

。昨日投稿するつもりでしたが、頭痛などで投稿できませんでした。
。こんな駄文・短い二つが揃っていますがよろしくお願ひします。

第13話 「溶かされた恋心」

ピピピピ・・・

「う、うん・・・」

ポチ

「ふあ〜」

そういえば、昨日・・・

『オラアアアアア！』

・・・ブウウン

『おい、大丈夫かア？』

『う、うん』

車に轆かれかけたんだ・・・

あのとき助けてくれた哀川くん格好良かったなー・・・

「よし！顔を洗って、朝ご飯を作ろう」

少女移動中・・・

洗面場・・・

少し前髪長くなっただかな・・・

（目より少し下ですby駄猫）

よし切るう・・・

カチャカチャ・・・パサ

ん・・・これでいいかな

「後は・・・朝ご飯かな」

キッチン・・・

ジュー・・・トントン・・・

上手に出来ましたー！！

「っは・・・なんかモン　ンのあれみたいなの流れた・・・」

メイコ姉さんとカイト兄さん、リン・レンを・・・あ、起きてる

「リン、レン二人を起こしてきて・・・」

天気予報は今日一日晴れる模様です

・・・色々あって登校時間・・・

「いってきまゝす」

「「「「「いつてらしゃい」「」「」

少女移動中……

やせいの あいかわにであった

「お、昨日の……初音だっけか？」

「あ、哀川くん……」

「お、髪切ったのか……似合ってるぜエ其れ……

といつても、俺みたいな奴な言われても困るよなア……」

「そ、そんなこと無いって……

ありがとう／＼／

「お、おう……（俺の知り合いでそういつ反応すんのすくねエか
ら……色々キツイ）」

やった！反応してくれた……

「じゃ、じゃア行くかア……」

やっぱり好きになっちゃったんだな……

自覚すると目があわせらんないよ……

「ところで、昨日大丈夫だったかア？」

「擦り傷一つ無かったよ・・・ありがとう／＼／」

「あ、ああア・・・（調子狂うぜエマジで・・・）」

時間が飛びました（特にナニもなかったの）（

ザアアアアアア

天気予報が嘘をついたみたい

土砂降りの雨が降ってるし・・・

鞆に入れたままの折りたたみ傘じゃなあ・・・

「雨・・・止まないかな・・・」

「おう、またあつたなア・・・」

「あ、哀川くん・・・生徒会は？」

「今日はねエぞオ・・・優奈もかえっちまったし・・・(ぼそ)」

「この雨ひどいね・・・」

「天気予報も当たり外れあるしなア・・・」

「一応傘あるから入ってくかア？」

「傘がなくて、しょ、しょうがないはいってやるわ」

「ククツ・・・そうかよオ。なら入ってくれやア」

「一目惚れしてたけど・・・」

「もう引き返せないや・・・」

「ああ、息が詰まりそう・・・こんなに近くに居られるなんて思ってた
なかつた・・・」

「君に触れてる私の右手が震えちゃう・・・ 胸の鼓動がうるさい・・・」

はんぶんこの傘……手を伸ばせば届く距離どつしどつ……！

『想いよ届け……君に!!』

「えと、初音ン家でここらだっけかア？」

「う、うん」

お願い時間をとめて……泣きそうなの……

でも一緒に居れて嬉しくて……死んでしまっわ……

「俺ン家と近いンだなア……」

家についちゃう……

もう会えない……近くて遠いよ……

だから……手をつないで歩きたい……

もうバイバイしなくちゃいけないの？

今すぐわたしを……抱きしめて！

……なんてね……この思いが届けばいいな……

バサ……ギユウ

「そんな、泣きそうな顔してンじゃねェよ……」

「そ、そんな顔してたかな・・・？」

() (因みに抱きしめたの、とある人に教えられたからです・・・ま
る) ()

「何を考えてンのかしんねエけどよオ・・・」

「うん・・・」

「いつでもあいにごいやア・・・」

ケータイのアドレスほれ」

「ありがとう／＼／・・・」

「じゃあ、『また』な・・・」

「うん『また』ね」

君のことが・・・好きなのだから『想いよ届け 君に』

第13話 「溶かされた恋心」(後書き)

次回「テメエだれだア・・・」

初音さんファミリーの二人とじつは一方通行として繋がっています

(味方)

初音さんは作者こと駄猫が好きなため、サブメインキャラとしてちよちよこ

出させていただきます。(メイコさんも)

では又今度も

よろしくお願いします!!

第14話 「テメエだれだア・・・」

「うい」

「え？」 「ン？」

「誰？ここは関係者以外立ち入り禁止よ」

（テメエは何様なンだよ・・・）

「あの、そちらこそどちら様？」

「私は生徒会の担当顧問よ」

「ん・・・」

「やあ、天草」

「？ここは関係者以外立ち入り禁止ですが」

「あれー！？」

「・・・」

「では改めて私が生徒会担当顧問・・・横島ナルコよ」

「そーいえば横島先生はうちの顧問ってことに成ってるぜ・・・」

「全然、来ないからすっぱり忘れてたわ・・・」

「すっかりじゃねエのかア・・・？」

「・・・」

「で、あんた達が新しい生徒会役員？」

「はい」「おう」「ん・・・」

「じくじ

「私に質問あったら何でも聞いていいわよ

親睦ふかめよーぜ・・・」

「ンじゃア・・・センサーはいくつなんだア？」

「「それ聞こつと思つた！・・・」」

「おいおいいきなりそれかあ？」

「いや何でもきけつて」

「女性にいきなり歳を聞くのは失礼だろお」

『大丈夫ですよ先生／だぜエ先生』

「ん・・・」

『そーゆー時は精神年齢を答えればかわせます／かわせるぜエ』

「ほほう私の精神年齢は25に達していないと」

「10歳ぐらいじゃねエかア?・・・ククッ」

「先生は何で(そんなんで)教師になつたんだ?」

「まあドラマの影響かな・・・」

問題児が集まるクラスに赴任し、そんな生徒達を更生させていく
ストーリー

でもだめだわー・・・

「ここの生徒優秀すぎるんだもん問題なんておこりゃしない」

「そりゃあ・・・良いことじゃね?」

「共学化によって私が問題起こしそうだし・・・じゅるり」

() (やべーよこの人まじやべエ・・・) ()

後日

「七条先輩の家のご飯って豪華そうだよな」

「うーん・・・でも私高級料理よりも庶民染みたモノのほうが好き
なんだけどね」

納豆とかお味噌汁とか・・・」

「ほオ・・・」

「特にアワビは苦手ねー」

「へえ」

「共食いしてるような気分になるから」

『今日も先輩のジョークは重いぜ！』

「俺の通ってた小学校なんですけど・・・」

今度、廃校になるらしいんです」

「私の所も入学した生徒が2クラスしかないらしいわ

改めて少子化を実感するわねー」

「この少子化問題！我々生徒会も出来るだけのことをしよう」

「例えばなんだア？」

「将来、性行為する際は常に 出しだ」

「よく臆面もなくいえるな」

「あ、そついや・・・」

俺の妹も来年この学校受験するんですよ

「ほーーーーー」

.....

「一応確認しておくが脳内設定の妹じゃないよな」

「現実にいるって」

.....

「てことがあってさア・・・」

優奈は今セール？に走っているぜエ・・・

「へえ・・・家の妹と弟も来年ここ受けるよ」

ミクとはあれ以来色々あって仲良くなった・・・

「そうなのかア・・・」

「あ、そろそろ晩ご飯だからきるねー」

「あいよオ・・・」

明日は頭痛が無いといいんだがなア・・・

（季節によるモノです）

第14話 「テメエだれだア……」 (後書き)

一巻が終わったらか何かあいだに入れようかな……

次回「会長が居なくなると静かになっちまうな……」

「まアいいんじゃない？たまにわよオ」

第15話 「会長が居なくなると静かになっちまうな・・・」

「七条先輩、良かったら俺がもちましようか？」

「やっぱり男手があるとたすかるわー」

「力仕事は男二人いんだから任せやがれエ」

「ならばその力試させて貰おう・・・」

今日の私は重い日だからな!!」

今抱えてるのは哀川クン

「あれから一月経ったからそろそろ来ると思ってたけど・・・あのオ、

上条優奈さん？そんな人を殺せそうな目で見ないでくださいませ
ンかア・・・」

「ニランデナイヨ？哀川クン・・・？」

「ぶ〜最近ドライアイに悩まされて困っている」

なんだア？それってきいたほうがいいのかア？

「ナンですかそれ？」

今はネタなんだろうオか……

ネタじゃ無ければちょっと心配だぜエ……

「ん？津田は知らんのか……」

では最近、知育モノが流行っているから問題を交えて説明してやるろ……」

キュキュ……キュ

(ま　こが濡れにくい)

「ん~~~~~」(これは陰りです)

「ブツ……(今はネタなのか？ネタなんだな!?)」

「萩村フランス語のベンキョーしてんのかア……」

「高校卒業したら留学しようと思ってね……」

他にも英語はもちろんイタリア語、スペイン語と5カ国語ほどはなせるわ」

「ほおスゲエなスズ！」

「そ、そうでしょう／＼／」

哀川さんは優奈が男だったら天然誑しに成るのではア？と心配しております。

もしくはどこそその超電磁砲のテレポーターみたく

「お姉様」とよばれるのでは？ともなア・・・

「それに比べて私なんて・・・」

「そんなことねエよ・・・」

「そ、そうか？」

「おう、お前はスゲエンだよ」

「あ、また空間が桃色に」

桃色ゆーなタカトシイ！！

「シノちゃん昨日のドラマみた？」

「うん。主人公の母親が実母ではなかったことは衝撃だった」

「まあ、ああいった驚きの出生の秘密はドラマに限るな

実際にあつたらさぞかし辛いコトだろう」

「あら、私は出生の秘密聞かされたわよ・・・

私が種付けされたときつて青カンだったんだって」

「アウトドア派なんだな・・・」

「「会長ツッコミがなってないよ」「「会長ツッコミがなってない
ぜエ・・・」

「私達二年生は明日から修学旅行だ・・・

その間、生徒会は君たちに任せる」

「「「「ハイ」「」」」

「生徒会長である私が学校を離れるのは不本意であるが、

行事への参加は生徒の義務だから仕方ない」

キュツキュツ

「仕方の無いことねエ……」

「うん」

「会長も子供っぽいところあるよねー」

「そっだよなー」

「ギャップだなア……」

「そうね大人っぽい人が子供っぽい一面を持つてると愛らしく見えるわよね……」

「なのに子供っぽい人が大人っぽい態度をとると何で小生意気に思われるのかしら……」

「ねえ？」

「別に思っただけよ……最近は」

「上条さんは可愛いと思うんだがなあ」

「ネギま!?!のエヴァが出てきたがア……」

「ククク・・・」

第15話 「会長が居なくなると静かになっちまうな・・・」 (後書き)

次回「人の家って緊張しないか?」って上条さんの疑問なんだが・・・

「

「しねエよ・・・」

よろしくお願いします。

第16話 「人の家って緊張しないか？って上条さんの疑問なんだが・・・」
連投してやったぜ。

「なにしてやがんだア？」

いや〜こんな駄文にpV20000こえたんだよ！

「おお、そりゃアよかつたなア（棒）」

おいー！？・・・

つれないぜ〜・・・

ま、いいや・・・では本文どうぞー！！

第16話 「人の家って緊張しないか?って上条さんの疑問なんだが・・・」

「何やってんの萩村?」

「はいらねエのか?」

「其れが七条先輩から預かった生徒会室の鍵なんだケド・・・

鍵穴があわないのよ・・・」

「じゃあ其れナンの鍵なんだ?」

「さぁ・・・?」

・・・京都にて・・・

「シノちゃん私の鍵知らない?」

「何のだ?」

「貞操帯」

・・・生徒会室前・・・

「っておいー!?貞操帯かよー!!」

「何してんだア優奈・・・?」

「あ・・・畜生、不幸だー!!」

「ああ、なるほど電波か・・・」

・・・萩村家にて・・・

とゆー訳で今日は萩村家で仕事することになった・・・

・・・今回の視点は私こと上条優奈だ

・・・出番すくな過ぎんだろ・・・駄猫お

「ただいまー」

「ひろいなー」

拓也ん家も広いから慣れちまった

津田・・・スマン

「おかえりなさ・・・あら？」

「「「おじゃまします」「「「

もしかして姉さんでなく母さんなのか？

「なあ、スズ・・・こちらの方は？（ボソ）「

「母さんよ（ボソ）「

まじかよ・・・

「娘がいつもお世話になってます」

「タメだよ!!」

「そんなムキに・・・」

まあそりゃな・・・

・・・スズ部屋にて・・・

「着替えてくるからちよつと待ってて」

「あいよオ」「ああ」「おっ」

「」「ン?」「」

まさか三人とも同じトコに目がいくとは・・・

あの柱の傷身長はかってんのかなー

・・・(目標)だと・・・泣けるぞ・・・

そんなの気にしなくても可愛いのに・・・

・・・5分後・・・

おい津田、スズを汚すなよ・・・そんなにジーと見て

ほらすズ気がついたぞ

「なに？さっきからジロジロと」

「いや・・・萩村の私服姿新鮮だなーって」

「そうだったのか・・・上条さん津田が性犯罪者になったかど・・・」

「割とマジで・・・」

「変な目で優奈を見ンじゃねエぞオ・・・」

「ノリいいなー拓也って」

「ま、まあそうね普段は学校でしか会わないからね・・・」

「因みに私の服は唯の服じゃ無いわよ」

「ブランドものなのか？」

「全てオーダーメイド！」

「え？」

「断じて子供服でわ無いわー！」

「これは、あのファイルいるなー」

「うーん・・・うーん・・・」

「・・・・・・・・」

「萩村」

「余計な手出しは無用——————っ」

「一旦降りやがれエ・・・」

あーゆー心使いで女を誑すんだな・・・フフフフフ

「（ゾクウ）俺が椅子の高さ合わせてやっからよオ・・・」

「！」

「代わりに取るなんて野暮な事アしねエよオ・・・」

でも少し位エ手伝ってくれエいいだろオ？」

「う、うん・・・あ・・・ありが・・・」

「あぶねええ！」

と

（せつかくだからみんなにもご飯食べてもらおう）

「みんな・・・何か食べたいもの・・・」

ガチャ

今の状況・・・

腰の上にスズ、腹の上に私だ・・・

嫌われたらどうしよう・・・不幸だああああ!!

「もう満腹かーーーーーっ」

「「「「もつとするべき反応があるだろ!!」「「「「

・・・晩飯食わせていただきました・・・

帰宅中・・・

「あ、あの・・・痛くなかったか？」

「おう・・・お前に怪我が無くてよかったぜエ・・・」

「嫌ってないよな・・・?」

「大丈夫だぜエ・・・優奈を嫌うときなんかこねエからよオ・・・」

「そ、そうか」

「「「「「「「「

イチャイチャして終わりですよ・・・今回は・・・

第16話 「人の家って緊張しないか？って上条さんの疑問なんだが・・・」

落ちってどうやん？駄猫です

「考えやがれエ・・・」

なんかさく他の作者さんのみてたらさく

「キャリアがちげエだろうよ・・・」

そんなこというなって・・・

「其れより来週中間だろオ？」

気にするな・・・俺は気にしない

「気にしろやア！！」

がんばってんだよコンチクショー！！

「そ、そうかア・・・すまねエ・・・」

まあこんな駄文ですが、よろしくお願いします。

感想募集中！

「調子に乗るなア三下ア！！」

次回「おみやげの感想って・・・これの！？」

第17話 「おみやげの感想って……これの!？」(前書き)

あゝ疲れたゝ……

「どうしたんだ?」

チャリで何回かこけてさゝ……トラウマに成って、

スピードが出しにくく成ったから、帰ってくるのがしんどい

「あゝ時間かかるもんなゝ」

そつだぜ45分近くチャリなんだぜ?

「まあ……ドンマイ?」

はゝ……不幸だあ……

では本編どうぞ!

第17話 「おみやげの感想って……これの!？」

「修学旅行のおみやげだ」

「どうも」「お、あんがとな!」

「それで二人の分なのだが、その、異性にモノを送るといのが初めてで君たち

の好みに合うかどうか……」

ああ……なんか嫌な予感がする……

「別に気を使わなくても、心が籠もっていれば何でもいいですよ」

「そうか……では、この「舞子のおしろいは白濁液」という小説を」

「悪意が籠もってんじゃねエかよ……」

「ところで私たちが居ない間何もなかった？」

……悟られんなよオ!! 萩村ア!!

「……………べ、別に何もなかったですノノノ」

おっおいイイイイ!!

チラッ……

「哀川君っ、私たちが居ない間、スズちゃんと優奈ちゃん何があったの!？」

「ん?まア……萩村ン家は言ったが？」

悟られるなア!俺エ!!

「な、ナニをしたの!？」

「ナニもしてねエエ!!」

弄くられないよなこれで……

コンコン

「記事用の写真が余ったんで献上しにきました」

「みせてみせて」

「俺にも」「私にも」

……めっっちゃ笑顔のひといるなア……

「会長はどこに居るんですか？」

俺も同じ気持ちだア……タカトシ……

「ここに居るじゃないか」

「どっ？」

みとめたくねエモノだな・・・会長の晴れやかな笑顔というモノを・

「JJJJ」

「ン？」

「会長が寝てるぞオ・・・」

「こらっ、人の寝姿勝手にみるな・・・／／／」

「またフラグどこかで建てたんだな・・・フフフフ」

「そうよ・・・其れは有料よ」

「テメエ人様を勝手に売り物にしてンじゃねエぞオ・・・おい」

「でも、やはり清水寺に行けなかったのは心残りだったな」

「シノちゃんは高い所苦手だからね」

「そんなに駄目なのか？」

「高い場所へ行ってしまうと、体の力が抜け、震えが止まらなくなってしまうんだ・・・」

其れはまるで・・・

常に絶頂状態!!」

「そんな例え方してンじゃねエ!!」

後日・・・

「萩村、お土産の生八つ橋どうだった？」

「美味しかったですよ」

横島ナルコの場合・・・

「お土産の木刀？よかったよプレイの幅が広がった」

後輩の場合・・・

「先輩から貰ったストラップいつも身につけてますよ」

ひよっとして俺らも感想求められるのか??

「二人とも〜シノちゃんに呼ばれてるよ〜」

来たかア・・・冷静にいくぞオ・・・

「ああ、二人ともちよつと聞きたいことがあるんだが・・・」

おさえろ・・・俺エ・・・

「会長から貰ったお土産よかったですよ・・・」

特にいきなり立った肉助が舞子にぶっかけるトコとか」

やりやがったアア！！・・・バカだろあいつ・・・

「なんだいきなり！？セクハラか！？」

「ちくしょうめ！！哀川は！？」

セエエフ・・・

「逃げやがったなああああ・・・」

危なかったア・・・アイツと同じ事するトコだったア・・・

第17話 「おみやげの感想って……これの!?!」(後書き)

次回「どいつもこいつも……」

よろしくお願いします。

「私の出番は？」

残念ながら……

「……不幸だあつああ!?!」

第18話 「どいつもこいつも・・・」(前書き)

は〜中間まで後すこしだ〜・・・

「そんなので大丈夫なのかア？」

大丈夫ではないが、問題ない

「エルシャ イかア？」

面白そうやねんけどなあ・・・

「テストか？」

いや、金がない(キツパリ)

「おいおい・・・」

もうすぐPV28000だぜ!

「・・・本編にはいるぞオ・・・」

なんでPVの話になったらそうなの・・・?

ま、いいか・・・良くないけど

では本編どうぞ!

第18話 「どいつもこいつも・・・」

七条アリア・・・優しくて綺麗な爆弾ボディ

ぼけ～～～～・・・

「先輩、なに惚けてるんですか」

「あ、そっか学校はエスカレーターじゃないんだよね・・・

うっかり」

「なんて家だよ・・・」

金持ち兼天然

テクテク

「あゝ5月なのになんて暑さだ・・・

温暖化・・・恐ろしい」

「こら津田だらしないぞ」

「会長は平気なんですか？」

「まあ暑いには暑いですが、私は校則に反する着崩しはしない

だから見えない所で着崩ししている・・・

ちよつとスースーする」

「暑すぎて思考おかしくなってますね・・・

拓也は大丈夫なのか？」

「まア、色々してるンでなア」

・・・穏やかな午後・・・

グ~~~~zzz

「萩村寝ちやってますね」

「ああ、ついでに哀川も寝てるぞ・・・

まあ休ませてやろう・・・萩村だけ」

そ〜そ〜・・・ひゅ〜バシ

「むっ」

「ん・・・？何してンだア？」

「起こしてやるつもりだと思ってな・・・起きてしまったが」

「まあいいかア」

「では会議にはいる」

・・・会議終了・・・

「・・・という具合で今日の会議は終了だ」

「では、部費の予算の割り当ては私がまとめておきます」

す、睡眠聴取ウ・・・!?

「おおっ!?!」

「流石天才!」

三葉さんに会いました・・・

「おう、三葉・・・」

柔道部の調子どうだア?」

「おかげさまで。部長ってポジション大変だけどね」

備品揃える為に部費のやり繰りとか」

「ン?道着の他に何かいんのかア?」

「ひもパン・・・下着のライン隠すのに必要って七条先輩が」

「（ - 0 - ）また奴かアアア!!」

「そういえば会長に相談があるんだけど・・・」

「おk。連れて行ってやる」

・・・生徒会室・・・

「今日は相談があつてやつて来ました

先日2年の人が入部したんですが・・・やっぱり部長の座を譲る

べきですかね・・・

先輩は気にするな！ってゆってるんですが・・・」

「無理に年功序列に縛られることもないんじゃないか？

何よりも君は経験者なんだろう？

未経験のチェリーが百戦錬磨のお姉さんをリードしても様にならんしな」

「おい・・・言って良いこととワリイことがあんど会長!」

・・・なんだかんだあつて・・・

「津田君だらしなな格好してると又シノちゃんに怒られるぞー」

「でも最近クールビズとかあるし、無理して熱中症になったら

元も子もないですよ？」

「そっかー・・・何かいかわしい感じになっちゃったよー・・・

うわーん」

「えー！？」

「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」
「・・・」

「会長・・・これは違つぞ・・・最初に言っておくぞ」

「・・・そつか・・・安心した・・・」

「はあ・・・どいつもどいつも・・・」

「「はあー・・・」」

「めんどくさいし不幸だあ・・・」

第18話 「どいつもこいつも・・・」(後書き)

次回「正直者は救われるっていうけど・・・これはなァ・・・」

よろしくお願いします！

第19話 「正直者は救われるっていつけど・・・これはなァ・・・」(前書き)

帰ってくるときにお茶がもれたぁ・・・

「ド、ドンマイ」

ちくせう・・・ま、幸いなのはノートだけだったことだな

「ふーん」

ズボンは濡れたけどなW

「不幸だなぁお前も・・・」

はぁ・・・

「そういえば、新しい小説始めたいつってなかったか？」

そうそう3dsの戦国無双あんじゃん？

「最近CM多い奴だな」

そそ・・・どうしよう？

「好きにすればいいんじゃないかね？」

他人事のように・・・

本編始めます・・・どうぞ！

第19話 「正直者は救われるっていつけど・・・これはなァ・・・」

ちゅー

「萩村は牛乳好きなんだな・・・」

牛乳は成長を促すモノだからいいことだ」

すー・・・ピタ

「会長は牛乳嫌いですか？」

「よくも目を下に向けてくれたな」

「おい、萩村ア・・・思ってもそう言うこと言っちゃならんだろ
オよオ」

「い、いや私は胸の事なんか気にしてないからな」

会長って正直モンだから・・・それは気にしてンと同じじゃね？

「さよか・・・」

「ん・・・」

ガサゴソ

「んーーーーー……………」

もみもみ

「（０００）」

「ないな……………」

「興味ないけど一応聞きますね……………なにが？」

「購買で買ったメロンパン……………」

「ここに置いていたんだがだれかしらんか？」

「さあ」

「知りません」

「ついさっきここに来た所だからな」

「優奈に同じ」

「当時この部屋には鍵が掛かっていた……………」

「つまり、内部の者による犯行……………それ即ち……………」

「横島先生、私のメロンパン食べたでしょ」

「一直線に来たー！ー！！」

（（人望ねエな））

あのセンサーには多分人望って言葉が一切あてはまらねエンだろうよオ・・・

「まあ、確かに食ったの私だけ・・・

ほらパン代」

「結局テメエかよ・・・」

「生徒のもの勝手に取るなんてなに考えているんですか」

「あのほら人間って辛いもの食べると甘いもの食べたくなくなるじゃない!?」

「何かからいもの食べたんですか?」

「いや・・・私の場合は苦い飲みものなんだけど」

「まあ此れからは気をつけてくださいね」

「あの先生、一息をつけないとおもっぜ?」

「それにしても会長よく一発で犯人わかったな」

カリモフ

「君たちが知らないと言うのなら其れは真実なのだろう・・・」

此処にいるものは嘘をつかない人間と私は信じている」

「会長・・・」

「さすがシノちゃん」

「お、いづじゃねエか」

「おおー」

チラチラ

「年齢なんて偽ってませんよ」

「さつき枝毛見つけちゃったの・・・」

シヨックだよー・・・」

「キューティクルが痛んでるな」

「人間の髪なんて10万本以上あるんだから

そんなに気にすることじゃないんじゃないですか？」

「もー津田君・・・女の子のプライベート話に割り込んだりだめだよ」

「そーゆーもんスか？」

「陰毛のはなししてるんだから」

「ホント割って入ってすみません」

桜才学園はそれなりの進学校・・・

レベルは高い

「うーん・・・」

「俺無事に卒業できるか心配になってきました」

「そうか・・・だが、あせってはいけないぞ

・
うちは女子が多いから出会いの場も多いが校則の問題もあるし・

最終的な関係はやはりお互いの気持ちだからな」

(相談相手を間違えた・・・)

という訳で・・・

「拓也、俺無事に卒業できるか心配になってきたんだが・・・」

「ふーん・・・でもよオ、焦っちゃったら終わりだぜエ？」

焦るよりか着実に勉強した方が・・・な？」

「ありがとう・・・！」

(最初からコイツに相談すればよかった・・・)

第19話 「正直者は救われるっていつけど……これはなァ……」(後書き)

なあ……

「ん？」

小説取り敢えず設定考えておくことにしとくわ

「そうか……こつちを疎かにしたら『そげぶ』るぞっ。」

あー男女平等パンチですね分かります

「次回はどうすんだ？」

二十話記念でもしよつかないと

「さよか」

じゃC i v e d i a m o !

第20話 「pv30000&20話達成記念!!」

さてさて本編では初めましてw

この話の登場人物としては「ねこ太」と名乗らせていただきます

まあ、キヨンみたいに本名は分からないと言っことので・・・

「なあなあ哀川〜」

「どうしたんだ？」

「お前ハーレムとかうらやましいぞこんちくしょー！おりゃ〜」

ばしー!!

「は？なんでなぐられたんだよ・・・」

「つかなんでなぐれた!？」

「そりゃあ寸止めだぜいw」

さてさて主人公を殴った所で話を進めたいと思いますw

「ね〜カイトさん・・・」

「アイス食うのを止めていただけませんか？」

「ソーダアイスを俺から取るのか!？」

「いや、今お昼の放送中でござえますよ?」

そう。俺は「放送部」なのです

「もういいです・・・」

「と言うわけで始まりました桜才放送」

「さてさて・・・今日のお便りはこちら

『好きな人が出来たんですが、どうしたらいいでしょうか?』

さてカイトさん・・・アイス食べ終わったでしょう?

というわけでどうぞ!」

「当たって砕ける!!以上!!」

「おい!リスナーの心を大切にしやがれ!!」

なんで俺ん時はいつもこの人となんだろう・・・

ちくせう不幸だあ・・・

はあ・・・次のお便りは・・・

『糖分がたんねエんだがどうしたらいいんだろうつか』

「・・・っしてるかー!ー!」

「糖分は大切だよな!!」

「……」

「なんだよその目……」

まるで仕事をしろよって言ってるみたいじゃねえか」

「いってますよ!!」

「……もういいや次は学園五七五!!」

「では一つ目……」

『哀川君 ああ哀川君 哀川君』

つてこええよ!!」

「ヤンデレってやつだな」

「は……次

『会いたくて 溶けてしまいそう どうしよっ』

これはまともだな……」

桜才は恋愛を校則で禁止されているが放送部はあなたを応援します」

「な〜な〜俺居る意味あんのか？」

「マスコットのな？」

「ひどくね？」

「因みにねこ太こと俺はリア充をきらいますw」

「俺はリア充じゃねえよ！」

「・・・」

「む・・・すまん」

「さてと・・・今日流す音楽は

「メルト」「曇天」「YOU」です・・・

「どうぞー！」

・・・流し中・・・

「お願いしますよ・・・ちゃんとしてください・・・

そつだ!？」

・・・

・・・

.....

「どうでしたでしょうか？」

カイトさんが使い物にならないので

哀川君、上条さんに来ていただきました」

「ん〜ん〜」

「気にしないで行きましょう！」

「いや気にしない方が無理だろ！！！」

「お〜ナイスツッコミ」

「おいおい、大丈夫かよオ・・・」

「ねこ太・・・さっきの俳句の差し出し人は？（黒笑）」

「い、いや都合上いえませぬですます（ガクガク）」

怖いお〜・・・ブルブル・・・

「ンで俺らは何したらいいんだア？」

「トークをしようと思います！」

「ンじゃア、俺からの純粋な疑問」

「なになな？」

「何で殴れたんだア？」

「寸止めだつてヴァ」

「お前殴つたのか？」

「いやゝだつて哀川属性ずるくね？」

「フラグメイカーだもんな・・・あいつ・・・」

「鈍感にも程があんだろうと思うのに、それでも気づかないし・・・」

「はあ・・・不幸だあ・・・」

「なんつーかドンマイだぜ！上やん・・・」

リア充は爆発しやがれー！！（泣）

「落ち込んでしまったかみやんをおいとして、俺からの質問いくぜい」

「なんだア？」

「テメエは何人から好意を持たれてるんだ？」

「しらねエよ！てかもてねエよ！..！」

「アアン！いま何だったデメエー！！」

「やんのか！！青髪と土御門がモデルのくせにイ！！」

「うつせえぞモヤシ！！あとアクセロリータ！！」

・・・しばらくお待ちください。・・・

上条さんinnしたお

「うわ！？ボロボロじゃねえか！？」

「ハアハア・・・」

ねこ太さんと哀川さんはログアウトしました

「え、二人ともいつちまったとか・・・不幸だあ・・・

しょうがねえ、音楽を聴いて貰います

「零からの逆襲」「Accelerator」tragedy

「どうだった？」

「けっこオ面白かったぞオ」

「私も」

「なら良かった」

「……すまんがカイトさんの時は来てくれよ？」

「「あ、ああ……」」

第20話 「pv30000&20話達成記念!!」(後書き)

なんかものつそいはしゃぎ回った駄猫です

「それに付き合わされた哀川だア」

ま、楽しかったww

「次回は？」

また生徒会役員共にもどるえ

「なぜ京都弁？」

ネギま！？で見たからw

「はア・・・」

まいいじゃん！

では次回「誕生日がちかいのか・・・」

よろしくお願いします。

ではC i v e d i a m o !

第21話 「誕生日がちかいのか・・・」

「寝過ごした~~~~っ」

「おはようございます」

「シャツは入れなさい」

・・・

「やく拓也君、生徒会は朝早くから精がでるね」

・・・・・・（鞆だ・・・）

「と言うわけでも無いみたいだね」

「彼来たのほんの5分前よ」

「アハハ」

・・・生徒会室にて・・・

「だから二二は・・・」

「そうじゃなくて・・・」

・・・

「うわ!?!」

「ん？どうしたんですか？」

「なんだ驚かすな」

「？」

「ぎゃーっ！？」

「……」

「ちゅうちゅっ……」

「おい、津田お拓せって……うわ！？」

「みんなナニを驚いてるの？」

「さあ？」

「何してんだア……？」

「えっ、俺？」

「だってさっきから頭の位置とか変じゃねェか」

「あ、そう言っことか！」

「はア……」

・・・会議なう・・・

眠い・・・一徹が響いてるよなア多分・・・

ピースウオーカーをやり過ぎた・・・

ラストは感動モンすぎだろ・・・

「・・・川・・・」

「ン？」

「おい哀川！」

「起きてまアす」

「はぁ・・・」

「これからケータイについて話をする・・・

だから目を覚ませ」

「ういいい・・・」

「校則で定められていた携帯電話の持ち込みだが、生徒の要望により

解禁されることになった」

因みに優奈の奴はパケ放題&メールし放題にした。

「そーですよ。」

今の時代何が起こるか分からないんだから」

「持っていて損はしねえだろ」

「安心は出来ますしね」

「だが学校の風紀が乱れてしまわないか不安だ・・・」

「例えば？」

「授業中のメールのやりとり・・・」

「あア・・・」

「ハメ取りの横行」

「「会長の頭程乱れる事は無いと思っぜ／よ」「

終わったし寝よう・・・」

.....

.....

.....

「津田君学校にDVD持って来ちゃ駄目だよ〜」

「す……すみません」

「あ、でも今話題になっている映画ね」

「ええ友達から借りたんです」

「どーだった？」

「よかったですよ」

ティツシュが離せませんでした」

「そ、そんなにいやらしかったの？」

ごくり

「おい、津田あ……其所はハンカチだろうが……」

「あ、すみません俺ハンカチ持たない主義なんで」

哀川君innしたお

ねみィ……

かえろつと・・・

テクテク・・・

「おオ萩村じゃん」

「あ、哀川・・・」

「どうしたんだア？」

「いやドラマが始まっちゃうから近道しようと思ったんだけど・・・

この体が便利って思っちゃったから・・・」

「あの〜萩村さん・・・

其所抜けたら早く帰れますよオ・・・」

「・・・ン？あれ誰だ？

「や、止めてください!!」

「イイじゃんか・・・ちよつとだk「チェストオオオ!!」ぐは

!？」

「大丈夫かアミク・・・」

「な、なんだよ!？」

「俺かア？俺は通りすがりの悪党ですがア・・・ククッ」

「テメエら出てこい!!」

今謝つたらゆるしてやんぜえ・・・まあ女はもらうが!!「チエリ
オ」・・・」

ボタン

「テ、テメエリーダーを・・・逝くぞ!!」

「字がちげエぞオ・・・」

ドスバキガスグチャ・・・

「おいおいな～んなアンですかア?

本気にさせてみやがれエエ!!三下アア!!」

「「「「「ひいつ!?!」「」「」「」

ドダドダ・・・

「大丈夫かア?」

「う、うん有り難う・・・」

「はア・・・あんな時代遅れまだいな・・・

気つけて帰れよオって言いたいところだが家までおくるわア」

・・・その夜・・・

「俺になんかよおかア？」

「お礼参りじゃアアア!!！」

「はア・・・こついう場合どついたらいいンだろオな・・・」

ドストドストドストドストドス

「もオくんじゃねエぞ・・・メンドクセエからよオ・・・」

第21話 「誕生日がちかいのか・・・」(後書き)

明日から中間テストだぜい

「そうか・・・」

どうしたんだ？

「いや・・・私の出番が少ないなって」

いや、もうすぐ覚醒編に入るつもりだぞ？

「巻終わったら

」と言うことは・・・上条さんの出番が!..!」

くるぜいwし・か・も

メインヒロインだぜい!

「おお!..!」

と言うわけで次回「ハッピーバースデー会長!..!」

よろしくお願いします。

ではC i i v e d i a m o !

第22話 「ハッピーバースデー会長!!」

「ではシノちゃんの誕生日を祝って・・・

かんぱーい!!」

チン

「おめでとーっシノちゃん」

チン

「おめでとーっいびります会長」

チン

「おめでとーっ会長」

チン

「おめでとオこれで17か?」エヴァっぽい気がすんの俺だけかア
「?」

「ぐおおおおお

私に合わせて貰わなくて結構です」

チン

.....

.....

.....

「じゃあ、プレゼントを」

「会長、最初に私を受け取ってください!!」

「俺のも俺のも」

「ガキかテメエらはよオ.....」

「まあイイじゃんか（気持ちは分かるぜ.....）」

「うふふシノちゃん大人気ね」

（（（お金持ち《この人ら》の後には出せない）））

「ところで君たちの誕生日は何時だ？」

「来月です」 津田

「再来月だぜエ」 哀川

「2月だ.....」 上条

「「「おめでとー」」」

「スズちゃんは何時？」

「4月に済みました」

「おめでたー」

「!？」

.....

.....

.....

サアアア

「ん？雨か？」

「今日は降らないっていったのにー」

「こまったねー」

「私、置き傘ありますよ」

「俺も」

「本当？」

「私もあるぞ」

「俺はいらねエから持ってきてきてねエ」

「」「」「」

「津田は助かったな持ち帰るの忘れたままの傘が役立って」

「流石会長俺の性格読んでるぜ!!」

・・・帰り道・・・

優奈さんはセールに走っています。

誰だ？あのツンツン頭・・・

「ん・・・？」

おいおいこっち向きやがったぜエ・・・

また面倒事じゃアって・・・あれは・・・

「アクセラレータ一方通行!？」

「上条当麻!??・・・」

あと、俺はアクセラレータ一方通行じゃねエ・・・」

「確かにアイツは俺の事を三下ってよぶしな・・・」

「なら何で俺のことを知ってるんだ？」

「俺は一方通行の平行ワールド版アクセラレータ

とでも思っていてくれエ・・・テメエの其れもいんぞオ」

「マジか・・・って事は此処は!？」

「想像どおりだと思っぜエ・・・」

「ふ、・・・」

「ふ？」

「不幸だあああああ!！」

「うるせエ・・・近所迷惑だろ・・・」

「ばきー!！」

「ぐは!？す、すみません・・・」

「ンで、何があつたんだア？」

「俺・・・確かフィアンマとやり合って居たような・・・」

「フィアンマ?そんな名前聞いたことねエぞ・・・」

•
•
•
T
O
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第22話 「ハッピーバースデー会長!」 (後書き)

何か分かんが予定より早く覚醒編に入りました

どんどんパフパフ

次回「テ、テメエは・・・」

次もよろしく願いします。

ではC i v e d i a m o !

第23話 「テ、テメエは……」

その頃の上条さん

「鯛と鮭と……」

「コーヒー……コーヒー……」

「え!?!」

「ンあ!?!」

「すみません、人違いです……」

「おいおい、頼むぜエ……此処がどこかただでさえ

わかんねエのによオ……」

「ちよつと待ってて!」

「もしもし」

少し前の哀川さん

「ンでテメエは、上条当麻であつてんだよな?」

「あ、ああ……一方通行に名前呼ばれるって意外と

アクセラレータ

……な?」

「おk・・・殺しやしねエが・・・ぶっ飛ばす!」

「ちょ、ちょ・・・うぎゃあああ!

不幸だあああ!」!

.....

.....

.....

「はあはあ・・・」

プルルル・・・

「ん? 哀川だが・・・」

『スマン・・・上条なんだが』

「おう優奈か・・・どうした?」

『そ、それがな・・・』

「早くしてくんね?」

『アクセラレータ一方通行がいんだが・・・しかも女・・・』

「ちょおっと待って貰おうかア・・・」

『お、おっ』

クッククククク・・・

「上条クウン！俺を女と間ア違えたアンですかア？」

「す、すまねえ・・・」

「びびせ・・・びびせH・・・」

『おーい拓也ー！！』

「す、すまねH・・・」

『んでお前はもしかして上条当麻か？』

「ちゃんと男だぞオ」

『合わせるか・・・』

「そうすつかア・・・」

『きんぞっ』

「おっ・・・」

と言っわけでアクセラレータ一方通行

にめってもぶらっ

「アイツも此処にいんのか!？」

「らしいなア」

「因みにどこであつんだ?」

「おれン家だア」

.....

.....

.....

..... 哀川家.....

「ただいま」

「帰つてきたかア.....」

「すみませんお邪魔させていただいております」

「いやいや、そんな」

「俺ン家だぞオ..... テメエら!!」

「「す、すみません!」」

「ンでテメエが^{アクセラレータ}一方通行な訳だな?」

「そうだがア・・・テメエはだれなんだア？」

「俺か？・・・俺は・・・」

・・・上条サイド・・・

「はあ・・・何であんなにアイツいらいらしてんのかな・・・不幸だあ・・・」

「スマン・・・俺がアイツのことをな・・・」

女にみちまってさ・・・」

「アイツのトラウマの奴だな・・・」

「それであんたはもしかして・・・」

「私か？・・・私は

「「パラレルワールドのテメエらだ！！！！」」

・・・アクセラレータ一方通行サイド・・・

「おいおいマジなんですかア？」

「じゃあねエだろ・・・」

おいおいパラレルワールドってなア・・・

オレは三下とフィアンマを倒しに行ったはずなんだが・・・

「じゃあてめエは翼があんのかア？」

そう・・・これがオレだけの・・・唯一の力のはずなんだ・・・

コイツがオレなら・・・

「アレしんでエンだがなア・・・」

バサッ・・・

「.j.f.g.g.s之.j.g.g.f.l.s良.u.o.s.y.」

「あ、あア・・・」

間違いねエコイツは本物だ・・・

・・・上条サイド・・・

「お前が俺の異次元同位体だってんなら・・・右手についてるモン

「しってんのか？」

「幻想殺し……だが私はまだ「覚醒」をしていないんだ……」

「この世界にはそんなモンがあんのか？」

「ああ……本当なら持たない力なんだしな之は……」

「もしかして……アイツは？」

「ああ、覚醒しているよ……なんで私にはアイツの背中を守れる

力が無いんだ!!」

「おい……それは違うぞ……」

「何が違っつて言うんだよ!?!……残響死滅から助けてくれたとき

だって……垣根から守ってくれたときだって……

何時だってアイツに助けて貰ってた……だから……だから」

「俺だって……最初は禁書目録インデックスを助けられないって思ったとき

何で俺には力が無いんだって思った……

何時だってそうだ……アウルレオスの時だって……」

「でもお前は何かしてたじゃねえか!?!」

「1000回失敗したら、1000回起き上がる。1000回失敗したら、1000回這い上がる！たった

それだけのことを。テメエは俺でもあんだ・・・俺が出来たことをテメエに

出来ねえはずがねえ！」

「で、でも・・・」

「うるっ・・・せえつつつてんだろ！！んなモン関係ねえ！」

「そう・・・だよな・・・」

私がグチグチ何もはじまらねえ・・・そつだよな上条当麻」

「わかってんじゃねえか上条優奈！」

・・・

・・・

・・・

・・・残響死滅サイド・・・

「ほお、上条当麻と一方通行アクセラレータが来たか・・・

ククッ・・・上条優奈は無理だったが今度こそ俺のシナリオ通りに進めるわ!!」

・・・T o b e c o n t i n u e d

第23話 「テ、テメエは・・・」(後書き)

すでにシナリオが狂ってる残響死滅に乙w

さてさて上条さん二人が揃いましたが、上条フラグは立ちません

ある意味兄弟ですw

では次回「シナリオ通りに進める？その幻想をぶち殺す！！！！」

次回もよろしくお願いします。

ではC i v e d i a m o !

第24話 「シナリオ通りに進める？その幻想をぶち殺すWW」「b y 駄猫

残響死滅サイド

「さて、これからどうおびき寄せられるかだが・・・

良い案がある奴手を挙げてくれ」

「ブチコロシたら良いんじゃない？」

「いや、其所までの案なんだが・・・」

「なら、餌をまいたらどうでしょう？」

やっともな案が・・・

「海原よ、例えばどんなモノを餌にするんだ？」

「打ち止め《ラストオーダー》ではどうでしょう？」

・・・木山君やられてましたやん・・・しかも一方通行に殺されま
したやん・・・

「其れは却下だ・・・色々あるんで・・・」

「なら妹達はどうでしょうか・・・？」

御坂さん好きですね・・・

「却下だ・・・他には?」

「此処はもう御s『ソニック・ムービング!!』げぼら!?!?」

・・・まとまらん・・・

「他には無いのか?」

「もう攫っちゃえば?」

「ま、まあ・・・良い案なんだが・・・

そのサディステイックな笑みは何なんだ?」

正直言わせて貰います・・・

この時点でもう無理じゃないかなって思っています

絶対案として成り立たない・・・

「いや、プーッしてプーッしたら・・・フフッ」

やっほり

「土御門が居れば何とかなっただろうが・・・

アイツ上条派だしな・・・つーかスタイルでもイイから少しでも

まともな奴が欲しい・・・」

「超鯉弁買ってきました」

「そう、ありがとうね・・・」

でもその後ろに居る・・・

ツンツンとアルビノ二人と美少女・・・誰かしら？」

「超優しいんですよこの白黒！」

鯉弁無くなっただけど超くれたんですよ!!！」

あ、これ終わった・・・

つかサブタイトルの時点で駄猫の考えによって

失敗つか・・・もおいいや・・・

「アハハハハハハハ」

「うお!?! って残響死滅だと!?!」

・・・なんで泣きそうなんだ?大丈夫か?」

「なんなんですかア?コイツ・・・」

オレでも同情してしまうんですがア・・・」

「うお!? 駄目だよア・・・おいイ!?!?・・・」

コイツ涙流しながら笑ってるぞオ!?

おいィ!!--駄猫どつするきなんだ!?!」

(噛ませっというか・・・いじられキャラ?)

「しるかよオ!!--」

でも可愛そうだからオア・・・

出番作ってやるつかア・・・」

(だが断る!!--w)

「あ、おばあちゃん・・・」

「止める!!--そっちに行くなア!!--」

「マジで洒落に成らんぞおい!!--」

(ああ・・・ごめん自重する・・・

流石にね・・・と言うわけで次回を本当の決戦と言つことによ

う)

「まア・・・そうしようかア・・・」

・・・

・・・

.....

）と言っわけで、昨日は腹痛で更新できなかったと言っことを報告するおw（

「嘘付けエ！？ずっとラストストーリーしてたじゃねエかよ!？」

（いいじゃんw腹痛マジだしwエルザかっこよすぎんだろっ!）

「其れは上条さんも同意するわ・・・」

（ジルの嘔ませブリやばすぎたww）

「あゝいうの上条さんは嫌いです」

（なゝにが「君がたぶらかしたんだろっ?」だよw

・・・まあ、其れはおいといて、次回予告ここでしょうっかw（

「そうしよう・・・めんどくさいことが起こらないうちに）ぼそ（

（では次回「シナリオ通りに進める?その幻想をぶち殺す!!」

（マジモン）

よろしく願ひしますw（

「今回の何だったんだア?」

（一応考えてた「ネタ」これ重要!

を消費しますたw)

「無駄な回じゃねエかよオ!!」

(ちんちん一緒にいいませう!)

「「Ci vedia mo」」

(つーわけで次回は本気の奴やりますw)

「おkなら生かしてやんよ・・・」

「ホ、ホントですか!？」

「ああ・・・体だけでな!？」

トントン

「い、嫌だ・・・く、来るな!！」

トントン

「う、うあああああ」

ズシユク

「あれエ・・・自殺とか笑えんですけどオ

せつかく生かしてやるつってんのによオ」

「おいお前オレの全盛期ン時より容赦ねエなア・・・」

「知るか。俺の身内に手エ出した時点で死あるのみだろ・・・

其れよりあいつらが危ないぞオ」

ダダダダ・・・ドン

「オオイ、上条クウン?おい優奈、上条クンしらねエかア?」

ゲシゲシ

「あの〜今踏んでいるのがそうだと上条さんは思うのですが・・・」

ゲシゲシ

「コレはちげエでしょ」

ゲシゲシ

「ちくせう・・・不幸だあああ!!」

.....

.....

.....

.....

「さてさて来ました・・・残響死滅の本拠地」

「」「誰にいつてんだ?」「」

「そうだと思いますよ!!」

「駄猫オ・・・後書きで覚えておけよ!!」

「まあいい・・・よくないけど

またあいつらなのか？

あの時はメルヘンと襲撃者数人だったよな・・・？」

「今回のねらいは幻想殺し《イメージブレイカー》と一方通行らし
い」
「

「俺たちが・・・不幸だ・・・」

「因みに代理演算は、俺がパイプを通してやってやるから好きに暴
れやがれエ」

「パ、パイプだとお前らナニしたんだ!？」

「上条さんは不潔だと思います!!！」

「ウルセエ・・・何にもしてねエ!!！」

「つかさア・・・お前どんどん七条先輩に毒されてやがんなア・・・」

「んぐ!?!・・・なら何でパイプつながってたんだ?」

「俺は一方通行の^{アクセラレータ}パラレルワールド版だっただろ?」

「なるほど・・・私の早とちりか・・・」

「さ、三下ア後で覚えておけよオ／／！！」

「ヒイイイ！？」

.....

.....

.....

・

キイイイ

「べつちやらお出ましのようだぜ」

「作戦は？」

「ガンガン行こうぜエ！！」

「違うわー！！

拓也達はあの鉄砲隊を何とかしてくれ

「おう」「あいよオ・・・」

「俺と一方通行アクセラレタであいつらの本隊を叩く」

「足ひつぱんじゃねエぞ？三下ー！」

「ならいくぞオー！」

作者の力不足により戦闘描写はボス戦の時だけにします。

「ふう何とかなつたな・・・」

「残響死滅は最初に積んだみてエだな・・・」

「そのようだなア・・・」

アイツバカじゃねエのレベル5は軍隊とも戦えるつウのー！」

「俺はレベル6だけどなア・・・」

.....

.....

.....

・
・

「おい残響死滅きてやったぜエ……」

死を届けになア!!」

「フツ貴様らが来ることは予想出来たのだよ!!」

此処まではシナリオ通りだったのだが……

何故貴様らがそこに居る!？」

「身内だから」「仲間だから」

「なら……!お前からやってやる

逝け!!」

ニユルニユルニユル

「へ!?!き、キヤアアア!!」

グシ……ピキーン

「なん……だと？」

「はぁ……アブねえ……アイツに教わらなけりゃやられると」
「だった……」

回想……

「なに？俺が優奈と戦って欲しいだと？」

「覚醒は早めにしといた方がいい……」

「ナニがあるかわからねえからな……」

「はマそう言うなら別にいいんだが……」

……
……
……

……

……

……

「早く立てよ三下がア……」

「……」

「ンだアその逃げ腰は。愉快にケツ振りやがって誘ってんのかア！
」？

「そりゃ逃げ腰にもなるわ！！」
「レックスなんて何でいんだよ！？」

回想終了

「つらかったなあ……………」

「と言うわけでお前が居たらじゃまなンでな……………」

「「シテリオテメエのその幻想をぶち壊す！」「」

ばきー！！x2

「やっぱり前回のような……………あんな感じがよかったな……………」

げぼりー！

・・・To be continued

第25話

「シナリオ通りに進める？その幻想をぶち殺す！！」

（後書き）

「おい駄猫！またよくもやってくれやがったなア！！」

ま、まっつけてくれ！一ついつといてやる・・・

近日ネギま！？の二次小説をやる・・・

「それが何の関係があんだア？

さて懺悔はおわったかア？」

ま、まてお前が主人公なんだよ！

「は、はア！！？」

まあ、それも有って今日イタイ目に遭って貰った

「なんでまた・・・てめエ原作持ってねエだろ・・・」

W i k i D A Z E

ドスバキボコ・・・

「まアこんな駄文なんだが・・・

これからもよろしくしてやってくれエ

次回「え？宝 剣！？」

よろしくな

じゃあなCi vedia m o r

第26話 「え？宝 剣!？」

前回のあらすじ

「お前がアクセラレータ一方通行か!？」

「ちげエよ……でも俺んとこ来たって言うことは此処の誰かを狙って

るつつウ事だし片付けますかア……」

「オレも混ぜてくれねエか？」

「そつちが本物のアクセラレータ一方通行だな!？」

総員位置につけ!!！」

……結果 フルボッコ

「さてさて来ました……残響死滅の本拠地」

「作戦は？」

「ガンガン行こうぜエ!!！」

……結果 上条さん(男)がまとめた

「おーい残響死滅きてやったぜエ……」

死を届けになア!!」

「フツ貴様らが来ることは予想出来たのだよ!!」

此処まではシナリオ通りだったのだが・・・

何故貴様らがそこに居る!?!」

・・・結果 シナリオぶち壊し

「「シナリオテメエのその幻想をぶち壊す!」」

ばき!! x 2

「やっぱり前回のような・・・あんな感じがよかったな・・・」

・・・結果 残響死滅のKO

「さてと・・・まとめたところ・・・

テメエらどっやって帰んだア?」

「ここに来たのが何故か分からねえからなう……」

「なら此処でもう少しいとくかア？」

「いや、迷惑だろ」

「別に迷惑じゃねエぞオ？」

「はア……金とかどうすんだよオ？」

「いや俺××億円有るから大丈夫なんだが……」

「私も二人が此処に居るの賛成だぞ？」

「其れよりコーヒー……コーヒー……」

ガサゴソガサゴソ

「其れよりってなう……」

ピンポーン

「誰だア？」

「一応のチェーン掛けとくかア……」

「すみません……」

「夜分遅くに……」

「そう思つのなら帰ってくれて思つの俺だけか？」

「アハハ・・・」

「ンでエ、何の用なンですかア？」

「ここら辺で次g・・・変なこと有りませんでしたか？」

「しらねエぞオ？」

「そうですか・・・ご協力有り難うございました」

「あいよオ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・

「誰なんですかあんたは？」

「私は・・・」

ガチャ

「コレはいつたいどういふことなんでしょうかねエ？」

哀川の前にいつたい何が・・・

•
•
•
T
O
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第26話 「え？宝 剣!？」（後書き）

次回「うっかりめエエ!！」

次回もよろしくお願いします。

ではC i v e d i a m o !

第27話 「うっかりめエエ!」 (前書き)

前回は短くてすみません。

あそこが一応「上条当麻と一方通行帰還編」のプロローグです。

一度次回「生徒会役員共」(日常編)に戻ります。

後わかりずらいので、登場人物の名を乗っけます。

第27話 「うっかりめエエ!!」

拓也

「コレはいったいどういうことなんですかねエ？」

天井の穴・・・一人が入れる位

知らない人・・・黒髪ツインテ(?)

何かを所持・・・宝石(?)の剣(?)みたいなモノ

拓也

「・・・コレはいったいどういうことなんですかねエ？」

当麻

「俺たちもびっくりしたぞ・・・」

百合子

「空から落ちてきた時はなア・・・」

優奈

「今、名前を聞こうとしてたんですよ上条さん達は」

?

「すまなかつたわね・・・」

此処に来てまで『うっかり』が発動するとは・・・」

拓也

「ンで、てめエの名前はなんなんだア？」

凜

「私の名前は遠坂凜……」

拓也

「取り敢えず名前は分かった……」

どうやって……つか何をして此処に来やがった？」

凜

「貴方たちって『魔術』って信じるかしら？」

拓也・優奈・百合子・当麻

「……ステイルか……」「……」

凜

「何で残念そうなのかは知らないけれど、知ってるみたいね……」

拓也

「あア……ンでだ……何が関係してんだア？」

当麻・優奈

「……よかった……さわらなくて……」「……」

二人はこの宝石が何か気付いたようです

凜

「私は宝石魔術というモノをつかっているの」

百合子

「ほオ・・・ステイルとは違うタイプみてエだなア・・・」

当麻

「アイツはルーンだったよな」

凜

「宝石剣は知ってるかしら？」

拓也

「なんだア？そりゃア・・・？」

凜

「簡単にいうと・・・」

拓也

「ストップだ」

凜

「なんでよ！？」

優奈

「へえ・・・盗み見つけてイライラする手口使ってくれんじゃん」

当麻

「残響死滅の後はさっき来た女の人ってか？」

拓也

「洒落になんねエよ・・・」

凜

「そう言えば見られているような・・・」

拓也

「見られてんだよ・・・」

百合子

「お客さんみたいだぞ？」

？

「時空管理局だ其奴を渡して貰おう」

凜

「嫌と言ったらどうなるのかしら？」

拓也

「つか、時空管理局ってなんだア？」

凜

「私も知らないけど・・・」

「宝石剣だけは渡せないわ！」

拓也

「また面倒事かよオ・・・」

当麻・優奈

「「はぁ・・・不幸だぁ・・・」」

百合子

「しゃアねエ・・・暴れるかア・・・」

？

「な、なにをする気だ!？」

公務執行妨害だぞ!！」

拓也

「時空管理局しらねエぞオ？」

凜・当麻・百合子・優奈

「「「「うん」「」「」

？

「そんな筈『バキッ』げぼら!？」

拓也

「踏んで縛って叩いてエ〜蹴って蹴り飛ばして吊してエ〜」

凜・当麻・百合子・優奈

「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」「」「」

？さんは見るも無惨です。

拓也

「クハハハハWW」

凜

「そ、それ以上は可愛そうよ・・・?？」

当麻

「そ、そうだぜ・・・」

百合子

「オレでも其所までしねエぞオ・・・(汗)」

優奈

「な、なあ・・・其所までにしろよ・・・な？」

拓也

「ン？・・・そうすつかア」

凜・当麻・百合子・優奈

「そうしとけ・・・」

拓也

「明日から学校なんだが・・・」

優奈

「そつだよな・・・」

拓也

「テメエらも来つかア？」

凜

「私は此処にいるわ・・・」

何が有るか分からないし・・・」

当麻

「俺らもそうするわ」

拓也

「そうかア・・・」

ならテメエは2階の一番奥の部屋で・・・

大丈夫だぞ？暇つぶし用品は揃えてある」

当麻

「センキューな」

拓也

「ンで、遠坂？凜？どっちで呼べば？」

凜

「凜でいいわよ」

拓也

「なら、凜は1階のあそこの部屋な？」

優奈と百合子も一緒だかなア？」

凜

「ちゃんと入るの？」

拓也

「25畳だが・・・不満かア？」

凜

「いえ・・・何もないわ・・・」

拓也

「そろそろ寝るかア・・・」

全員

「「「「「おやすみ」「」「」「」

・・・T o b e c o n t i n u e d

第27話 「うっかりめエエ!」(後書き)

うっか凜参上!つつても他のキャラは参加しませんが・・・

「ンでどうなったんだ?ネギま!?編」

どの時期から始めようか迷ってます・・・

どうしよう・・・

「好きにすりゃいいんじゃないか?」

ふむ・・・

次回「日常編かア・・・」

次回もよろしく願います。

ではC i v e d i a m o!

第28話 「日常編かア・・・」

んあ〜どオも哀川です

今回の投稿が遅れたのは作者の駄猫(馬)がテストで

ミスリやがったせエです

報告が終わった所でエ日常編に入りてエと思います

ではお楽しみ(?)ください

.....

.....

.....

.....

朝7:30

拓也

「久々の学校だア・・・つかメンドクセエ・・・」

優奈

「そつだな〜・・・そついやそのつちにや〜」

拓也

「うん？」

優奈

「北海道の碧陽学園とさ〜合同でなにかするらしいぜ〜」

拓也

「碧陽つつウとオ・・・あれか？」

杉崎なんちゃらが居る所かア？」

優奈

「杉崎なんちゃらって・・・」

でも久々に深夏に真冬とあえるの楽しみだぜ」

拓也

「何時なんだア？」

優奈

「確か明日だったような・・・」

拓也

「よし！・・・休もう」

優奈

「そんなに嫌か？学校つつーか行事」

拓也

「だってメンドクセエしメンドクセエしメンドクセエしウゼエしメ
ンドクセエし」

優奈

「メンドクセエかウゼエしかいってねえじゃん!？」

拓也

「ふア〜・・・眠イ・・・」

優奈

「もうすぐ学校なんだから我慢しろ・・・」

朝9:00

タカトシ

「お〜い拓也〜!」

拓也

「おう久しぶりだなア」

タカトシ

「正確に言つと7日ぐらいな・・・」

拓也

「土日の二日だろ?」

タカトシ

「・・・スマン・・・」

優奈

「おはやう津田」

タカトシ

「おはよう上条」

優奈

「どうしたんだ？拓也」

拓也

「なんでだア？」

優奈

「なんか暗くねえか？」

拓也

「コイツがいきなり7日ぶりとかいうんだよ……」

優奈

「大丈夫か？津田……」

タカトシ

「あんまり心配しないで……心がいたいよ……」

昼休み

拓也

「キタキタキタキタ缶コーヒー……」

優奈

「キャラ変わってんぞ・・・」

拓也

「さらに」B O S「だぜエ!!」

最っ高にハイって奴だぜエ!!」

優奈

「(イライラ)そろそろ黙らねえか？」

拓也

「ヒャッハアアアッアア!!」

優奈

「(ブチ)そのふざけた幻想《頭の中》をブチ殺す!!」

拓也

「げぼらっは!?!」

優奈

「フツ・・・悪は滅した」

放課後

シノ

「明日は碧陽学園と生徒会で交流会をする」

アリア

「碧陽学園ってたしか・・・」

優奈

「そろそろ私が居た所だぞ」

スズ

「アンタと会うためってのも有るのかもね」

シノ

「生徒会顧問も来るらしいぞ」

拓也

（確か・・・マギルさんだったよな・・・）

優奈

「へえ・・・あの人もくるんだ・・・」

タカトシ

「なら明日の分も今日にしておかなければいけませんね」

拓也

「明日疲れるだろうなア・・・」

タカトシ

「何に？」

拓也・優奈

「「ッ」「ッ」「ッ」」

スズ

「あんた達休まないでよ・・・」

タカトシ

「二人でさえ大変なのに・・・」

拓也・優奈・タカトシ・スズ

「ハアアア・・・」

第28話 「日常編かア・・・」(後書き)

更新遅れてすみません・・・

テストがコンチクショウだったので

やり直しに時間が掛かりまして・・・

ネギま！？での哀川君の立ち位置は

「ネギ君(爆)の弟で落ちこぼれ」にするつもりです

ま、超能力を持っていたら、魔術使えませんしねw

と言っわけで次回は

「オレのハーレム!!」「ウゼエ・・・」「だよな・・・」「

です

次回もよろしくお願いします。

ではC i v e d i a m o !

第29話 「オレのハーレム!!」「ウゼエ……」「だよな……」「前編

交流日当日

拓也

「行きたくねエなア……」

凜

「どうしたのよ?」

拓也

「今日、碧陽学園と生徒会で交流其れも朝から……」

しかもツッコミ役ツライぜエ……」

凜

「ツッコミって……」

優奈

「ツッコミ役しんどいんだよ……」

それもいつもの3倍とかになるからな……」

拓也

「あと……」

拓也・優奈

「「ハーレム野郎がいるしな!!」「」

凜 「・・・ハーレム野郎？」

拓也

「口を開けばハーレムハーレム・・・」

優奈

「私は好きな奴いんのに告白されるしよあ・・・」

拓也・優奈

「「はあゝ・・・」」

凜

「あら・・・そう・・・がんばってね・・・(汗)」

拓也

「しょうがない今日一日は俺らの学校に来て貰おうか・・・(黒笑)」

「

優奈

「其れは良い案だな(黒笑)」

凜

「え・・・ちよっ・・・待っ!？」

.....

.....

.....

・
・

凜

「もうお嫁に行けないわ……」

拓也

「なら俺が貰ってやろうかア？（ニヤリ）」

優奈

「（ピキピキ）良い度胸だなア……アアイカアワクウウン！」

拓也

「え！？ちょ！？おま！？……」

「ギャアア！！不幸だアアア！！」

凜

「え……私には好きな人がいるじゃない……//」

「なのに何で？？……」

AM 8:00

タカトシ

「おはよー……どうしたんだ？拓也」

優奈

「ちよつとばっかO・H A・N A・S H Iしただけだぞ？」

タカトシ

「なんか違うんじゃないかな・・・」

拓也

「お前の思ってるとおりだぞオ・・・ガク」

タカトシ

「拓也！？おい・・・拓也ああ！？」

たくや は めのまえ が まつくら になった

AM 9 : 3 0

拓也

「っは！？此処はア！？」

シノ

「大丈夫か？哀川・・・」

アリア

「さっきまで気絶してたのよ？」

タカトシ

「お前が覚えてないなら其れが一番だよ・・・」

スズ

「もうすぐ来ますよ」

優奈

「・・・（ズーン）やり過ぎたかな・・・」

ホントに一体何があったんだろか・・・

はア・・・

AM9:45

?

「此処ですかねえ会長・・・」

?

「パンフレットの地図通りなら此処よ」

?

「取り敢えず入ろうよっ!」

真冬

「お邪魔します」

拓也

「邪魔すんなら帰ってエ・・・」

?

「あいよあ・・・って何で新喜劇なの!??」

拓也

「しらねエよ・・・」

真冬

「優奈先輩!??」

優奈

「おう」

深夏

「久しぶりだな・・・顔会わすの」

シノ

「済まないが・・・先ず自己紹介して貰っていいかな？」

知弦

「すみません・・・私は生徒会書記の紅葉 知弦と言います」

・・・自己紹介中・・・

拓也

「連れてきたわイが・・・」

空気だなア・・・凜さんよオ・・・」

凜

「気にしてるんだから言わないで欲しいわね・・・」

優奈

「んじゃあ二人共頑張ってるのか」

深夏

「おう！」

優奈が生徒会役員とは思わなかったケドな」

真冬

「私も思いませんでした」

・・・自己紹介（哀川を除く）終了

拓也

「んつと・・・」

俺ン名前は哀川拓也だア

副会長をやってる・・・メンドクセエけどな・・・

まア今日一日よろしく頼む」

鍵

「よろしくな！」

にこやかに笑うンじゃねエよ・・・

鍵

「なんで女子なのに俺っていつて「アゝテガスベッタ」ぐべら！
？」

拓也・鍵を除く全員

「棒読み！？」

優奈

「まあ……トラウマいじったもんな……」

タカトシ

「そういえば間違えられるの嫌だもんねアイツ」

くりむ

「どうしよう〜知弦……」

知弦

「は〜いよちよち泣かないで〜」

スズ・タカトシ・シノ

「子守!?!」

拓也

「うは……カオスになってきたなア……」

「と言うわけで続きは次回!」

第29話 「オレのハーレム!!」「ウゼエ……」「だよな……」「前編(後

ネギま編一話目で幼少期終わらそうとしてるからおわらね

では次回「オレのハーレム!!」「ウゼエ……」「だよな……」
後編

次回もよろしくお願いします。

ではC i v e d i a m o !

知弦

「よろしく頼むわね」

くりむ

「私をあな『ハイハイワロスワロス』ムキー！！」

鍵

「よ、よろしくお願ひしますです・・・ハイ」

拓也

「ンじゃア行くぞオ・・・」

.....

.....

.....

.....

.....

拓也

「さてさてと……此処が1年の教室棟だア」

深夏

「へえ……綺麗なんだな」

真冬

「勉強はしやすそうですね……」

知弦

「どついつ風にして綺麗さを保ってるのかしら？」

拓也

「それは……」

説明中

……と言つ訳

だア」

知弦

「へえ……内にも取り入れようかしら……」

拓也

「まア……役に立てたンならいいんだが……」

知弦

「でも意外だったわね・・・貴方面倒くさいの嫌って

言ってなかったかしら？」

拓也

「公私混合はしねエよ」

知弦

「へえ・・・貴方のこと気にいったわ」

拓也

「そら良かった」

深夏

「あの知弦さんとまともに話せてるぞ！」

真冬

「す、凄いです・・・」

拓也

「其所の4人は何か質問ねエのかア？」

ねエなら楽なンだが・・・」

真冬

「そう言えば哀川君って」

拓也

「言いくいだる哀川ってキア・・・」

拓也でいいぞオ？」

真冬

「あ、そうですか……」

鍵

「俺のハーレム『うぜエ……黙れや』済みません」

拓也

「ンでなんだア？椎名」

真冬

「私のコトも真冬でイイですよ？」

拓也君とは気が合いそうですし……

それでネットゲでもしかして『一方通行』ってなのってませんか？」

拓也

「ン……？ちよつと待てよ……」

もしかして、もしかしてだが『瑠璃色の墮天使』かア？」

真冬・拓也

「やっぱりか……」

拓也

「あん時は世話になったなア！」

真冬

「「こちらこそ！」

深夏

「あの真冬が男と……それも会って間も無い男と話してるぞ……

」

くりむ

「あなどれないね哀川拓也……」

知弦

「流石ねあつくん」

知弦を除く全員

「あつくん!？」

知弦

「哀川・アクセラレータ一方通行 頭文字あ あつくんよ」

拓也

「どこぞのウサギ耳さんみたいなネーミングセンスだな……」

知弦

「私はI なんて作ってないわよ」

拓也

「この作品が危なくなるから止めてくれ……」

くりむ

「そう言えばあの箱なに？」

拓也

「ン？・・・げ！！！？？？」

真冬

「ど、どうしたんですか！？」

深夏

「拓也（許可をもらってます）があそこまで動揺するとは・・・

何がある！？」

拓也

「先に言うておく此処はもと女子校だア・・・」

5人移動中

全員

「・・」

拓也

「区切りがつきそうにねエな・・・」

凜

「そうね・・・」

拓也

「また役目無かったなア・・・」

凜

「早く日常編終わらないかしら・・・」

第30話 「オレのハーレム!!」「ウゼエ・・・」「だよな・・・」後編(後

と言うわけで次回「フラグメーカーは旗男《上条》の役目だア!!」

次回もよろしくお願いします。

ではC i v e d i a m o !

はぁ・・・

学校の授業面白い(?)だがねみ・・・

第31話 「フラグメーカーは旗男へとうま」の役目だア！！前編」(前書き)

やっとネギま編完成しましたw

拓也

「こっち疎かにすんじゃないぞ？」

もちろんw

では本編どぞ！

第31話 「フラグメーカーは旗男へとうま」の役目だア!!!前編

深夏

「なあなあ」

拓也

「ン？」

深夏

「結構前から思ってたんだが」

拓也

「おう」

深夏

「この学校変なモノ結構おいてないか？」

さっきの・・・あの箱？みたいに」

拓也

「まア・・・此処の生徒会がアレだからなア・・・」

凜

「びっくりしたわよ！

アレ作つたの会長？」

拓也

「いや、副会長の方」

凜
「そっちの方がびっくりね……」

鍵
「あの人……俺と同じ感じがするぜ!」

拓也
「下ネタおおいしな……」

くりむ
「あんたも疲れてるのね……」

拓也
「ああ……主にツッコみなア……」

知弦
「あつくんは何で生徒会にはいったの?」

拓也
「ああ……それはな?」

俺遅刻 役員共邂逅 勧誘 考える 条件出す おk

「だな簡単に言つと」

知弦
「へえ……キーくんみたいに

ハーレム目当てではないのね……クスクス」

拓也

「ハーレム目当てってなァ・・・」

あの中にお前らレベルの美人いたかア？」

拓也・鍵を除く全員

「／／／／／／」

鍵

「俺のハーレムメンバーを口説くな！！」

拓也

「口説いてねェ！本当のコトを言ったままでア！」

真冬

「何気にフラグメイカーですね／／／」

拓也

「ンなコトねェ筈だ！！」

それにフラグメーカーは旗男とじまの役目だア！！」

プルルル・・・

拓也

「当麻？」

当麻

『何か今不穏なコト言わなかったか！？』

拓也

「ああうぜエ……」

当麻

『話は終わって』『ブチ』』

真冬

「今のは何ですか!？」

拓也

「ン? 旗男ハジメからだか？」

深夏

「旗男ハジメつて……なあ……」

拓也

「ならアイツの武勇伝を話そう」

先ずドラゴンの光線並の威力を女の子を守る為に右手一本で防ぎ
きつた」

深夏

「お〜! 熱血な展開じゃねえか!!」

真冬

「流石に嘘ですよね……?」

拓也

「ンにゃ、マジだが?」

「お、おう……」

深夏

「其れって確か……」

ミク

「拓也くん！久しぶり！！」

拓也

「おうミクじゃねエか……」

ミク

「この人達は？」

拓也

「こいつらか？碧陽学園生徒会の役員共だア」

ミク

「へえ……よろしくお願ひしますね？」

拓也

「もう授業終わったのか？」

ミク

「うん、今昼休みだよ」

拓也

「へエ……二二から飯にすつかア？」

深夏

「確かに腹減ってきたな・・・」

真冬

「私も賛成です」

くりむ

「お菓子ってあるの？（キラキラ）」

拓也

「お、おう」

くりむ

「じゃ行くう！！」

知弦

「私も賛成ね」

鍵

「其れにしても此処レベル高くねえか？」

拓也

「だから言っただけじゃねえか此処はもと女子校だアってな」

鍵

「あ、ああそうだったな（今飛鳥らしき女の子が・・・）」

拓也

「飛鳥つてのが誰を指すのかわ知ンねエが・・・」

『松原飛鳥』つて言う女子生徒ならいるぞ？」

？

「あ、拓也じゃないって・・・鍵もいるのね・・・」

鍵

「あ、飛鳥なのか？本当に!!」

飛鳥

「そうよ・・・でもねあの頃のコトはもう気にしてないわ・・・」

鍵

「そうか・・・ん？あれ？ちよ〜と待て・・・」

お前好きな人出来たか!？」

飛鳥

「最初はそんなでも無かったんだけどね・・・」

慰めて貰ってる内にね・・・自分でも最低だとは・・・」

拓也

「STOPしませうね飛鳥さんやア・・・」

あんまり自分を卑下するモノでもねエゼ？な？」

鍵

「やはりテメエか!!!!」

拓也

「何がだよ!!!!!!!!」

凜

「朴念神ねやつぱり・・・」

真冬

「それでフラグメーカーとは・・・」

深夏

「侮れねえな・・・」

第31話 「フラグメーカーは旗男へとうま」の役目だア！！前編」（後書き）

次回にもまだ続きますw

次回「フラグメーカーは旗男へ上条」の役目だア！！後編」

次回もよろしくお願いします。

ではC i v e d i a m o !

明日体育大会とか鬱だ・・・

第32話 フラグメーカーは旗男へ上条の役目だア!!後編

拓也

「なア・・・僕、人参てなんだア？」

凜

「朴念神よ!!！」

真冬

「なんか内なんかよりボケが飽和していますね・・・」

深夏

「4人だしな・・・」

拓也

「ンじゃア行くぞオ・・・飯が食えなくなる・・・」

鍵

「なんでだ？」

拓也

「結構人気なんだよ・・・此処の学食・・・」

知弦

「へえ・・・少し楽しみね・・・」

くりむ

「早く行こうよ!!！」

なんか皆さん顔が期待でいっぱいになってるなあ……

ねこ太

「はろろくんw」

拓也

「何しに来やがったア!!」

ねこ太

「嫌だなw一つ伝言しに来ただけだおw」

拓也

「果てしなくウゼエよオ!!!!」

真冬

「この人は誰なんですか？」

ねこ太

「神（駄猫）の化身だおw」

深夏

「痛いわ!!……イイ病院あるぞ？」

ねこ太

「真面目に心配しないでw」

知弦

「この子……イイ犬になりそうね……」

ねこ太

「ゾクゾクつと来たぞ・・・おい・・・

んじゃ、伝言だけw飯食ったら生徒会室に来いってさw」

拓也

「了解・・・分かったから早くどっか逃げ」

ねこ太

「ひでえし、字がちげえw・・・んじゃ伝えたぞ!!」

では・・・忍!」

ぼしゅ・・・

くりむ

「何だったのかしらね・・・アレ」

拓也

「気にすんな・・・

ほら行くぞオ!!」

・・・食堂なう

拓也

「ほら此処だア」

凜

「取り敢えず席とつといたわよ」

拓也

「居なかつたのその所為かア・・・」

くりむ

「ひろい」

知弦

「ホントね・・・凄いわね・・・」

深夏

「フードファイターの血が騒ぐぜ!！」

真冬

「お姉ちゃんは一体なんなの!？」

深夏

「ピンクの悪魔？」

凜

「だ〜れがあかいあくまじゃあ!！」

拓也

「誰も言っつてねえよ!！」

知弦

「ボケが完全に飽和してるわね・・・」

・・・ピンポンパーンポーン

ねこ太

『お昼の放送!桜才放送オ!!!』

拓也

「あ・・・またやるのかア・・・」

ねこ太

『今日のパートナーはこちら!』

セラ

『よろしくお願いします』

拓也

「・・・なんでアンタが此処にいんだよ!!」

違う所だろオ!!世界の壁こえてんじゃねエ!!」

ねこ太

『最初はお便りのコーナーから・・・』

えっと?「タクヤの好みはどういうタイプなのでしょう?」

名指しかよ!?!えと出したのは・・・剣の英霊さん・・・』

拓也・凜・ねこ太

『「おいイイイ!!」』

セラ

『全員集合ですね(笑)』

ねこ太

『(笑)じゃねええええ!!』

もういいや・・・カイトさんで慣れた・・・

えっと本人に聞きたいと思います・・・

えっとピピピピピピでっつと』

プルルルル

拓也

「知らん!!」

ブチ

ねこ太

『知らないようです・・・』

あ、そうそう今日は碧陽学園生徒会の皆さんがこの学校に来ています

美男美女だからって声掛けに行っては駄目ですよ

あ、意外と時間食った・・・

巻で行きます

次のコーナー!!!学園五七五!!」

鍵

「内でもやったような・・・」

くりむ

「やったわよ・・・ネタが足りなくなっただから」

凜

「駄猫があんた達の小説から取ったからよ・・・」

真冬

深夏

「食った食った」

鍵

「腹さすってやるつか？」

真冬

「気持ち悪いですよ・・・杉崎先輩・・・」

凜

「半径50メートル以内に居ないでくれるかしら？」

拓也

「ククク・・・ザマア」

くりむ

「そう言えば生徒会室にもどれって言ってなかった？」

拓也

「そうだったなア」

凜
「少し話し時でしょうか」

少年・少女談話中

拓也

「ついたなア……」

コンコン

シノ

「入れ」

拓也

「来たぞオ……」

優奈

「帰ってきたな……会議を始めるらしいぞ？合同の」

タカトシ

「……どうせ空気ですよ……」

スズ

「早く行くわよ!!」

拓也

「何処でもカオスだな・・・」

優奈

「凜からメールで聞いたんだけど・・・」

拓也

「ン？」

優奈

「マタ・・・フラグ・・・タテタンダツテナアア!!」

拓也

「ちょ!洒落なンねエよ!!」

ギヤアアアアアアアアアアアア

.....

ねこ太

「ん?まだまだ続くぞ?日常編W」

第32話 フラグメーカーは旗男へ上条の役目だア!!後編(後書き)

ヒッシャーw

拓也

「どうしたんだア？」

いやぁ・・・ネギま!?!の方なんですけど

アンケート答えて貰えた!!ww

拓也

「へエ・・・良かったじゃねエか」

応!!w

あとpv50000超えた!!!!!!

拓也

「・・・嘘だろオ!?!?!?!」

やった・・・やったお・・・(泣)

拓也

「今回だけは言ってる・・・」

良かったなア・・・」

うん・・・マジで!!

こんな小説ですが、完結まで突っ走りますので

よろしく願いします!!!

拓也

「あア・・・第一目標超えたなア・・・」

うむ・・・次は目指せ100000PV!!

拓也

「頑張れよオ」

次回「そくだ！北海道に行こう!!」

次回もよろしく願いします!

ではC i v e d i a m o !

芸術鑑賞って・・・微妙に遠い所やし・・・

第33話 「そつだー！北海道に行けー！」 (前書き)

あゝ微妙に空いてしまった・・・

第33話 「そつだ！北海道に行くー！ー！」

あゝ哀川です

日常編が終わったら、ネギま！？の世界に行く原因の

フィアンマ戦になるようだア

一応、コレだけはいつとけて駄猫にいわれたんで報告しとくぜエ

では、本編いっくいくぜエ！！

・・・・・・・・・・・・・・・・キャラ違エ・・・

シノ
「会議にはいる」

拓也
「コレをするのはなんでなんだア？」

アリア
「今回こちらに来て貰ったから次は行くらしいわ」

優奈
「ほう・・・楽しみだな」

くりむ
「ええ、いいわよ！」

鍵
「北海道に来るって言っても、特にどういつ「ト」はないですよ」

・・・後、哀川来るなら飛鳥連れてこい・・・

林檎と会わせる」

拓也
「アイツがイイつつたらなア」

深夏

「そう言えば、うち何か行事あったか？」

真冬

「無かったと思うよ・・・お姉ちゃん」

知弦

「学園祭も冬だしね」

シノ

「と言うことは我々が行くのも冬がイイと言うことかな？」

知弦

「そうですね、・・・」

シノ・アリア・スズ・知弦を除く全員

(ついでに行けん！！)

拓也

「コッチはコッチでなんか話すかア」

優奈

「そっしよっし」

鍵

「スマン・・・一つ質問なんだが・・・」

拓也

「ン？」

真冬

「私が落ち込んだときのようなアレは何なんですか？拓也君」

拓也

「アレは津田タカトシ

基本的には真面目な性格の常識人なライトなM体質で、童貞だな
ア
」

鍵

「童貞はお前もだろう！！！！！」

優奈

「……………／／」

拓也

「……………ソウデスネ」

鍵

「今の間は！？そして上条さん頬を染めていますよ！？

……………あれ？マジ？」

全員

「……………」

拓也

「よ、よオし次の話題は！？」

真冬

「ね、ネットゲとかって好きなんですか？」

深夏

「狩り仲間だったモンな？」

優奈

「拓也はゲームならほとんどするぞ？」

鍵

「H2O^{ボン}」

拓也

「エロゲだなア……」

ガシ！！

拓也・鍵

「同士！！」

優奈

「アイツのPCぐるいぞ……スパコンが5台並の演算能力だからな……」

しかもセキュリティ高いしな……」

深夏

「もしかして手作りか？」

優奈

「……恐ろしいだろ？」

真冬

「一方通行の名は伊達じゃないですね……」

拓也

「だからァ……そうそう」

鍵

「ほうほう……」は……なるほど」

拓也

「そっぴやさァ……会議になってないしよォ……」

お前らの会長空気じゃねェかァ？」

くりむ

「言わないで……ね？凜」

凜

「うんうん……主役には分からないのよ」

拓也

「ネギま！？編ならガチヒロインなのにな……」

凜

「うん……駄猫を後で……うふふ」

知弦

「終わったわよ」

第33話 「そつだ！北海道に行く！」「（後書き）」

凜

「私の扱い酷くないかしら？」

す、すみません！！

拓也

「自業自得」

其れですましてくれんな！！

このあとフルぼっこに会いましたw

特に連絡は無いので

次回「う、うわアアツアア！！」

次回もよろしくお願いします。

ではC i v e d i a m o !

明日も学校かよ・・・

第34話 「う、うわアアアア!!」

鍵

「トランプは嫌だ・・・トランプは嫌だアアア!!」

深夏

「会長さんが・・・会長さんがアアアア!!」

真冬

「ポーカー怖いババ抜き怖い!!」

知弦

「ウフフフフフフフフフ・・・」

拓也

「おい!!可笑しく成ったぞオ!!」

優奈

「こええぞ!!」

凜

「なにが此処まで・・・」

飛鳥

「お邪魔するわ・・・よ?」

拓也

「どつしよつ!?!なんか変なんだア!!」

凜
「助けて!!」

飛鳥
「あ、ああ……ンン!!」

鍵!!林檎ちゃんがお前の「ト」『ふぁっきん』だつてさ

鍵
「ずうづうん……」

拓也
「一人どうにか成つたなア……やり方むごいけど」

凜
「少し静かに成つたわね……やり方むごいけど」

飛鳥
「う、うそだぞ〜鍵!!」

鍵
「また、おまえいらんこと教えただらう!!」

飛鳥
「……また後で来るわ!!」

タッタッタッタ

拓也
「キャラ崩れてンなア……」

凜
「杉崎君どうしてこうなったのかしら？」

鍵
「えと・・・それは・・・」

・・・皆さんは生徒会の一存を読んでください・・・
と言うわけなんです」

拓也
「トラウマスイッチねエ・・・おしまったか・・・」

鍵
「戻すには何か気を紛らわせるしか・・・」

拓也
「例えば？」

凜
「耳もとで好きだと言つとか？」

優奈
「アワアワ・・・」

拓也
「おk・・・やってみよう」

真冬

「トランプ怖い・・・」

拓也

「好きだ(ボソ)」

真冬

「ボン!!!/!/!/!/!/」

ボタン

拓也

「一丁上がり!」

凜

「鬼畜ね・・・」

鍵

「どうやったたらフラグを建てられるんだ!」

凜

「其所かよ!!」

拓也

「次いつてみよオ!!」

凜

「違うことにしなさい・・・ハア・・・」

拓也

「おk・・・やってみよう」

テクテクテク

拓也

「深夏ウ……鍵がなくなっていていてエ……」

鍵

「おい!!……うがアアア!!」

ポコバキゴキ

凜

「鬼畜過ぎるわよ!!」

拓也

「次次イ!!」

凜

「もういいわ……」

拓也

「イイ犬が倒れてますよ……」

凜

「うわ……」

優奈

「其れはだめだろ……」

知弦

「本当ね・・・」

ビシバシ！！

拓也

「一件落着つてなア・・・ククッ」

鍵

「ち、畜生・・・ガク」

第34話 「う、うわアッアア!」(後書き)

あゝ何か筆が進まん・・・ネギま!?!の今回の話編集しようかな・・・

拓也

「頭が悪いからなア・・・お前」

ま、いいかw取り敢えずはw

不評なら消そう!

拓也

「時間の無駄だったってことになるぞオ?」

読者あつての小説だかなw

次回「またな・・・」

上条さんアクセラさんそろそろとあるの世界にかえりますw

次回もよろしくお願いします。

ではC i v e d i a m o !

第35話 「またな・・・前編」(前書き)

いや〜更新遅れてすみません・・・
学校の残りがあって・・・メンドクセエ・・・

第35話 「またな・・・前編」

翌日

拓也

「ふア〜・・・昨日遊びすぎた・・・」

優奈

「おきろ〜つてもう起きてんじゃん・・・」

拓也

「そんな珍しいモノを見るような目止めてくんねエかア？」

心外だぜエ・・・

優奈

「珍しいモノ見るようになって私今珍しいモノ見たし・・・」

コイツ最近毒舌ってやがるぞオ・・・おい！

ガタガタガタガ・・・

当麻

「不幸だあああああ！！！」

百合子

「ギョアンねエンでしたア……そこ行き止まりだぜエ……」

当麻

「俺が悪かったです！はい！上条さんが全て悪いので

その左手の釘ばつとをどうにかしてください……！」

百合子

「コレは釘ばつとじゃねエ……エスカ ボルグだアア……！」

当麻

「ちょ！？洒落になんねえよ……！」

拓也

「下がってるせエ……」

優奈

「吹っ飛ばして……ようか？」

拓也

「いや、俺が殺るぜエ……久々にストレス発散ってなア……」

凜

「……ん……五月蠅いわよ……」

拓也

「オーケエ沈めてくる」

トントントン

・・・・・・・・ドゴンー！・・・・・・・・

拓也

「ただいまアッてな」

優奈

「早っ!？」

凜

「お休み・・・・・・・・ZZZZZZ」

拓也

「俺ン部屋でねンじゃねエよ・・・ハア・・・」

優奈

「アハハ・・・さてと・・・朝飯の準備してくる」

拓也

「あいよオ・・・」

凜

「ン・・・士・・・う・・・」

拓也

「……そういやコイツも異世界から来たんだよなア……」

そう言いながら拓也はすこし頭をなでた

拓也

「心細いよなア……お前が帰ることが出来無エなら……」

俺がお前の居場所になってやる……そしてお前を守ってやるぜ
エ……

コレが大切なモン守るための『一流の悪党』のルールだからな・

もう一流の悪党じゃねエただの甘ちゃんだけどなア……」

凜

（起きれないわよ！こんな空気で……それにしてもこんなに思
つてくれてたなんて

知らなかった……私はもうあっちの世界に戻る気はもうとう無
いけどね）

拓也

「さて……と……宿題終わらせよオット」「

優奈

「朝飯できたぞ」

拓也

「ういイ・・・起きろオ凜！」

凜

「うん／＼／」

拓也

「行くぞオ」

当麻

「起きろ〜百合子・・・二度寝したんだから」

百合子

「ん」

拓也

「腹減ったア……」

凜

「そうね……拓也……一つ話有るんだけど後で時間とれるかしら？」

拓也

「良いぜエ……ンじゃア……飯食った後で俺の部屋でなア」

凜

「其れともう一つ……当麻達……元の世界に返せるようになっ
たわ」

拓也

「まじかア……其れについても後でなア」

拓也

「ンで・・・なんだア？」

凜

「私はこの世界に残ることにしたわ・・・

理由は二つ

一つは・・・研究環境がいいことね・・・

もう一つは・・・気に入ったからよ此処の生活がね（ホントはア
ンタが好きに成っちゃったから

なんて言えないわ／＼／＼」

拓也

「なら・・・これからもよろしくなア」

凜
「..」

第35話 「またな・・・前編」(後書き)

どうも、今日補修を受けた駄猫ですW

拓也

「勉強しろよ・・・」

今日はしんどかったんだよ!!・・・結構リアルにね・・・

拓也

「まア・・・更新したのは褒めてやんよ」

上からだなW・・・でもアンガトなWW

じゃ、次回「またな・・・後編」

次回もよろしくお願いします。

ではC i v e d i a m o !

第36話 「またな・・・後編」

拓也

「見送りっていつからだっけかア？」

優奈

「ん？確か10時からだったぞ」

拓也

「まだ時間があるな・・・少し話しがあるんだがア・・・」

優奈

「なんだ？」

拓也

「当麻達帰れる様になったぞ・・・」

優奈

「まじか!？」

拓也

「凜が宝石剣使ってやるらしい」

優奈

「当麻は幻想殺し持って無かったか？」

拓也

「神秘のレベルが違うらしいぜエ・・・」

何しろ世界の違うトコロに飛ばすんだからなあ……」

優奈

「当麻には説明したのか？」

当麻

「今、聞いた……やっとか……」

拓也

「そつだア……やっただぞ」

当麻

「でも帰ったらビリビリに殺されるんだろうな……」

不幸だあ……」

百合子

「オレも今聞いた……なるほどな……コイツの右手以上の神秘を掛けるコトによって

のこり押しか……」

拓也

「よつやく帰られるってのに二人とも微妙な顔してやがンじゃねエ
！」

当麻

「そつなんだが……」

百合子

「打ち止めが迷惑かけてねエよな・・・」

拓也

「取り敢えず・・・テメエらの意見を聞く・・・帰りたいか？」

当麻

「・・・ああ」

百合子

「おう」

拓也

「なら凜呼ぶから待っててくれ」

拓也

「おい凜！起きてるかア？」

凜

「ええ・・・其れでどうなったのかしら？」

拓也

「アイツら元の世界に帰るらしいから・・・凜を呼びに来たんだよ」

凜

「用意するから待っていてくれるかしら？」

拓也

「あいよオ」

・・・10分後

拓也

「出来たかア？」

凜

「ええ・・・下におりまじょうか」

拓也

「ああ……」

トントントン……ガチャ

拓也

「始めるぞオ!!」

優奈・当麻・百合子

「うひゃあ!？」

拓也

「なに驚いてんだア？」

凜

「あんたが大きい声を出したからでしょう……」

拓也

「そか……すまねエ……」

優奈

「用意は万端だぞ」

拓也

「あとは……」

凜

「宝石剣は用意したから、もう良いわよ」

拓也

「そうかア」

優奈

「寂しくなるな……」

当麻

「そつだな……」

百合子

「此処での生活は向こうみたいになってないからなア……」

拓也

「……そろそろ送るぞオ」

当麻

百合子

「ああ」「了オ解」

凜

「行くわよ……」

ピカアアン!!

拓也

「行ったようだなア……」

優奈

「そう……みたいだな……」

凜

「あんた達今から見送りでしょ！早く行ってきなさい」

拓也

「凜は俺達の母親かア？」

優奈

「ちよつと言えてるかも……」

凜

「いらぬこと言っていないで……早く行ってこい！」

拓也

「了解……行ってくるぜ」

優奈

「行ってきます」

凜

「・・・中々疲れたわ・・・魔力がこっさり持って行かれた・・・」

拓也

「おい!!」

シノ

「やっと来たか・・・」

アリア

「おそいよー哀川くん」

スズ

「アンタ遅すぎるわ」

タカトシ

「まあ・・・しょうが無いんじゃないかな・・・拓也にも理由があったんだろ？」

拓也

「ン・・・まアな・・・」

優奈

「まだきてないのか？」

タカトシ

「うん」

シノ

「来たみたいだぞ」

鍵

「すみません・・・見送りなんて」

シノ

「いやいや、今度は君たちの所に行くからな桜野会長」

くりむ

「ええ」

深夏

「また今度な拓也、優奈」

真冬

「ネットゲで合いましょうね拓也くん」

拓也

「おう！またネットゲでなア、深夏はまた今度」

優奈

「じゃあな」

知弦

「あつくんまたね？」

拓也

「あア、またなア」

・・・北海道行きの飛行機にご乗車の方は・・・

くりむ

「また、あいましょう！」

シノ

「ああ、またあおう」

拓也

「皆またなア・・・」

優奈

「まったな」

鍵・深夏

「またな！」

真冬

「またです！」

第36話 「またな・・・後編」(後書き)

今回で帰還編は終わりです！

次回から原作に戻って、そこからフィアンマ編にはいりたいと思います

では次回も会いましょう

ではC i v e d i a m o !

第37話 「久々の本編 レッツGO！」（前書き）

あゝやつと原作・・・
自分の所為なんだけどね・・・

拓也

「ちったア自重しやがれやア・・・この駄作者がア」

・・・学校でもよく言われるわゝ
自重しろやつて・・・俺つてばバカだからな・・・
バカテスの明久なみに・・・

拓也

「ざまアねエなア・・・」

うむ・・・洒落になってないんだよねゝ
バカテスの明久とは気があうような気がする・・・
あと、杉崎ともW

拓也

「これゾンの歩ともだろオ・・・ほとんど変態じゃ無エかよ」

友達に他称さわやかムツツリーニもいるぜW W

拓也

「・・・むつつりは自慢出来無エぞ・・・」

では本編哀川くんの桜才戦記はじまります

第37話 「久々の本編 レッツGO！」

タカトシ

「寝過ごしたー!!」

コトミ

「まだ時間有るよ？」

タカトシ

「生徒会の仕事があるんだよ・・・」

パンだけで！」

コトミ

「まってタカ兄!!」

タカトシ

「ん？」

なにか用があるのかな？
だとしたら少し待とうか

コトミ

「男がパン啜えて登校って邪道じゃない？」

・・・そんなことかい・・・

タカトシ

「いや・・・ホントに急いでるから」

同時刻

拓也

「寝過ごしちゃったア!!」

優奈

「寝過ごしたあ!!」

凜

「おはよう二人とも・・・まだ時間あるわよ？」

拓也

「今日生徒会の仕事があんだよオ」

優奈

「ちくせう・・・でも・・・まだだ、まだ終わりじゃない!」

凜

「それ・・・フラグよね？」

ですよねエ・・・

しかも死亡フラグっていう・・・

拓也

「・・・早く行くぞオ！！
パンだけ貰うわア！！！」

優奈

「私も！！」

結局この三人は遅れました・・・

拓也

「はアい！今日も始まりましたア！！シノさんの相談室！！」

優奈

「今日のゲストはあ！」

タカトシ

「七条アリアさんですー!!」

アリア

「よろしく〜」

シノ

「・・・何をしているんだ？」

拓也

「マナー化を防ぐ為にテレビでよくある始め方してみたんだが」

優奈

「結構面白かったぞ？」

タカトシ

「・・・やってしまった・・・」

シノ

「・・・まあいい・・・」

改まって相談とはなんだ？」

アリア

「実は・・・この学校に気になる子がいるの・・・」

全員

「・・・!!?」

シノ

「なっ何を言っているんだアリア！
我が校の校則を忘れたか!？」

タカトシ

「会長・・・「校内」恋愛は禁止ですが、場所を弁えた付き合い方
なら問題ないんじゃない？」

シノ

「津田・・・」

私は耳が性感帯なんだから耳元で話すな」

津田

「ごじょごじょ・・・」

アリア

「？」

拓也

「なんか久しぶりだけど疲れるよなア・・・」

優奈

「私もだ・・・」

アリア

「でも私の気持ちに中々気づいてくれないの・・・」

シノ

「（そうだな・・・アリアは私の大切な友人・・・
会長としてではなく・・・一人の友人としてアドバイスを送りたい

拓也

「何組だア？」

アリア

「何組でも無いんじゃない？」

優奈

「え？どんな奴だ？」

アリア

「毛深いよ」

タカトシ

「ナニが！？」

ニヤー

アリア

「最近住み着いたノラなんだ」

でも警戒心つよくて・・・」

タカトシ

「わ〜微笑ましい」

シノ

「有り難う津田・・・」

タカトシ

「急になんです?」

シノ

「私はこの通り融通が利かない石頭だ・・・

あのとき・・・君の助言が無ければ頭ごなしに否定することしか出来なかっただろう・・・

だからこれからもその柔軟な・・・

亀頭を生かして支えていつてほしい」

タカタシ・優奈・拓也

「勝手に言葉をつくるな!」

第37話 「久々の本編 レッツGO！」（後書き）

どうも、駄猫です

総合評価100超えました！

咲夜

「良かったじゃない・・・それで・・・私はこれから後書きに来るのね？」

ええ・・・紅一点が欲しかったのですw

咲夜

「w うざいわね・・・」

すみません!!

ついクセで・・・

因みに咲夜さんにはいけるトコまで一緒に後書きしてもらいます

咲夜

「・・・なんで私なのかしら？」

俺・・・咲夜さんのファンなんです!!

咲夜

「・・・気持ち悪いわ・・・」

そこまでですか・・・

咲夜

「私に本編出場の予定は無いのよね？」

いえ……ねこ太君と一緒にラジオして貰う可能性が……

咲夜

「まあ……出番が無いよりはいいわね……」

あはは(汗)

咲夜

「今回スズちゃん出番一言だったわね……」

原作に忠実ですから

拓也に咲夜さんはわたさん!!

咲夜

「気持ち悪いわね……メイド秘技「殺人ドール」!」

やられてたまるか!!偽符「二重結界」

咲夜

「なんで貴方が博霊の巫女の技を使えるのかしら?……

いえ……偽だったわね……」

はい……やられてたまるかなのです

咲夜

「そのしゃべり方イライラするわね……幻世「ザ・ワールド」!」

え!?ちょ!?!?……

咲夜

「そして時は動き出す」

グサグサグサグサ・・・

咲夜

「さて・・・掃除が完了したわね・・・

駄猫は使えないから私が次回予告をするわ

次回「取り敢えず一巻が終わるのは何時？」

・・・このタイトル・・・

駄猫の所為の気がするわね・・・

ではC i v e d i a m o
「

第38話 「取り敢えず一巻が終わるのは何時？」（前書き）

どうも、駄猫なのです

拓也

「はア・・・一巻終わるのは一体何時になる予定だア？」

取り敢えず早く終わらせる予定なのです

拓也

「今回はコッチも色々飛ばすみてェだな・・・」

夏休みまでですけどね

今回は海に行こうと思つのです

拓也

「まア頑張りやがれ」

第38話 「取り敢えず一巻が終わるのは何時？」

さて、これから君達は夏休み迄飛ぶのを我慢しなければならぬ。
・
さあついてこれるか？

・・・さて、現実逃避は止めて校長の有難なぐい話をきくかア・・・
何故此処まで現実逃避をしなければならなくなったかア・・・
それはな・・・40分も話してやがるンだぜエ？

駄猫の入学式の時の校長の話より長エ・・・
すでに3人ほど被害を受けていやがる・・・熱中症だろオナ
俺はベクトル変えてるから暑く無エンだが・・・みているコツチも
暑くなつちまう

ちよつと面白そうだなアと思って切つてみたそしたら

ジユウウ・・・

拓也

「ンギヤアあああ!？」

優奈

「どつした!？」

拓也

「ついつい反射をきつちまってなア・・・肌が・・・文字通り焼け
た」

優奈

「バカだろ・・・」

うん・・・自分でも馬鹿すぎると思った
今思えばあんな時の自分は唯のバカだったなあ・・・
そういうしている内に終わったよオダ・・・
今から生徒会室に避難だぜエ

アリア

「はー早く帰って身体洗いたいなあ」

スズ

「七条先輩は潔癖ですね」

アリア

「そうかなあ」

タカトシ

「綺麗好きは良いことだと思いますよ」

アリア

「そうだよねっ！ア ル洗浄は素敵だよねっ！」

・・・あの人また馬鹿なこといってやがるなあ・・・

駄猫：下ネタって書いたですよッ・・・でも・・・でも・・・でも・・・ア

ナ 洗浄ってどうなのですか!?

・・・七条先輩皆に変な目で見られてるぜエ？
おつタカトシが話を変えようとしてるな・・・

タカトシ

「・・・進学校ってだけあって夏休みの宿題おおいな・・・」

シノ

「これくらいなら、5日もあれば終わらせるだろうっ?」

アリア

「私はお稽古があるから一週間ぐらいかなあ」

スズ・優奈

「私はもう終わらせましたノ終わらせたぞ」

・・・うっはア・・・スゲエ・・・
皆さんヤバイほど早エえ・・・

タカトシ

「拓也さんは未だ終わってないよね?ね?」

・・・実はな

拓也

「俺貰った時間に終わらせたぞオ?」

そう終わらせてたんだよ・・・(ドヤ

タカトシ

「・・・神は俺を見放したッ！」

シノ

「そんなことはさておき・・・」

タカトシが「そんなこと!？」って叫んでたけど俺は優しいから放っておくコトにする

優奈

「そついや生徒会って登校すんのか？」

皆同じ感じにスルー決め込んだなア

シノ

「みんなには夏休み期間も数日登校して貰うことになる」

スズ

「その際必要なモノあります？」

シノ

「ほとんど雑務だから特にないな」

拓也

「じゃア手ぶらでイインだな？」

シノ

「いや、服は着てこい」

チラ・・・

タカトシ

「グラビア用語の方じゃねえよ」

スズと優奈も一緒にタカトシ見たな・・・

シノ

「其れとこの日は各自開けておいてくれ海水浴が有るから」

タカトシ

「海水浴？」

シノ

「親睦を深めるコトを目的とした生徒会の恒例イベントだ
まあ事務的なモノだから気軽に参加してくれ」

拓也

「なア・・・」

シノ

「む？なんだ？」

拓也

「凜連れてってイイかア？家に一人じゃアなア？」

優奈

「私からもお願いだ」

シノ

「（この前いたあの黒髪の子か・・・）フム・・・いいぞ？」

拓也

「センキューなア」

優奈

「ありがとう」

第38話 「取り敢えず一巻が終わるのは何時？」（後書き）

よっしゃ〜次回で一巻終わるのです!!

咲夜

「やっとなのね？」

やっとなのです!!

咲夜

「・・・それでそのしゃべり方どうにか成らないのかしら？
前みたいに変のしゃべり方もどうかと思っけどね・・・」

前の方がましなのですか？

咲夜

「そうね・・・まだマシね・・・」

つちえ〜PAD長のk

グサグサグサグサグサ

・・・

咲夜

「身体のことを言うのは良くないわね・・・

さて次回「これは日帰りですか？」

そろそろお嬢様の所に行かなくては・・・

ではCi vedia mo 「

ピクピク

イタイのです・・・ちくせつ底上げのくせ

グサグサグサグサグサ

・・・バタッ

第39話 「これは日帰りですか？」

海なう

シノ

「海へやって来たぞ!!」

アリア

「シノちゃん赤いビキニきまってるねー」

シノ

「今日の為に買ってきたのだ・・・あの日が近いから」

アリア

「いつ来ても大丈夫だね」

拓也

「・・・そオっすねエ」

タカトシ

「おい!諦めてんじゃねえ!？」

ナルコ

「ポケ〜・・・」

シノ

「引率兼ドライバーの横島先生引率らしく何か一言を」

ナルコ

「あゝ・・・そうね・・・」

みんなあんまりハメを外しすぎないようにねハメるのは良いけど」

優奈

「どっちもだめだろ・・・」

シノ

「みんな沖まで競争しないか？」

アリア

「よし」

タカトシ

「いいですよ」

拓也

「うい」

凜

「私もおっけーよ」

優奈

「OKだぜ」

スズ

「私、足のつかない場所では泳がない夕子なので遠慮します」

(((((ビニールプール))))))

スズ

「誰だ！ビニールプールを連想した奴は！！」

拓也

「スマン……」

優奈

「……」

タカトシ

「あ、やばい」

ザッパーン

アリア

「ひゃーっ」

タカトシ

(漫画だと、水着が波に攫われるシチュってよくあるよな……)

チラ

アリア

「きゃっ……」

水が膾にはいっちゃったよ……

今の波は凄かったね」

タカトシ

「妄想を絶した」

シノ

「海水浴場に来る度に思うのだ・・・」

拓也

「ン？」

シノ

「巨大なサメが人を襲う映画」

拓也

「アレかア・・・怖エよな・・・」

シノ

「でも、もしあれが・・・」

巨大なたこやイカだったら18禁になってしみそうだな・・・と」

拓也

「説教改めO・H・A・N・A・S・H・Iしよかア？」

スズ

「何か飲む？私がおこってあげるわよ」

優奈

「マジ？センキュー」

凜

「へえ・・・有り難う」

店の前

店員

「何にしますか？」

優奈

「コーラ」

凜

「ラムネ」

スズ

「オレンジジュース」

店員

「（優奈に向かって）300円です」

スズ

「……………」

優奈

「大丈夫か？」

スズ

「まあこれぐらいで腹を立てるほど子供じゃないわ」

優奈

「そうだな……余力を入れると壊れるぞ？」

アリア

「あ、優奈ちゃん凜ちゃん」

優奈

「どうしたんだ？」

凜

「どうしたのかしら？」

ナンパA

「へえ……可愛いじゃん……」

「俺たちと一緒に遊ばない？」

アリア

「少しいい……」

拓也

「おいスズ、七条先輩、凜、優奈ア」

ナンパB

「テメエなんなんだ？」

「この子達は今から俺と遊ぶの」

拓也

「？いやがつてるよオにしか見えねエンだが？」

ナンパA

「五月蠅い！！！」

おおう・・・いきなり殴りかけられたら・・・
つついカウンターいれちまうじゃん

バキ！！

拓也

「あ・・・スマン手が勝手に・・・w」

ナンパB

「真吾お！！なにしゃがるっ」

拓也

「・・・野次馬集まってきてンじゃん」

ヒョイヒョイヒョイ

優奈

「そろそろ戻りたいんだが・・・早く決めてくれ」

アリア

「へっ・・・哀川君ってあんなに強かったんだ」

スズ

「文武両道？ではないわね・・・」

凜

「なんで反射的にカウンターをいれるのかしら」
バキ

拓也

「もどろオカア」

ナルコ

「あちい・・・ビールのみてえ・・・」

シノ

「海たのしかったな」

拓也

「そオだなア」

うつらうつら

優奈

「スズ大丈夫？」

スズ

「平気・・・」

シノ

「まあ無理もない私もくたくただ・・・
早く帰ろう」

アリア

「シノちゃん横島先生がもう寝ちゃってる」

シノ

「なら早く起こして……」

ビール……ビール……ビール……ビール……
どっただけだよオ!!

シノ

「宿を探すか……」

優奈

「そつだな……」

凜

「同意するわ」

「ここは何処だ？」

？

第39話 「これは日帰りですか？」（後書き）

今日は休みなのです

咲夜

「アンタ学校なかったらニート街道まっしぐらね・・・」

ふははは

どうなのですか？この体たらく！！

咲夜

「・・・今日は妹様を連れてきたわ・・・

せいぜい足掻きなさい」

フラン

「ここが咲夜が言ってた遊び場？」

咲夜

「そうですよ・・・あの男が玩具です」

げ！？

フラン

「へえ・・・簡単に

コワレナイデネ！」

ちよー！？其れはないのですー！！

ここはしょうが無い・・・

「どうか嘆かないで。」

世界があなたを許さなくても、私はあなたを許します。

どうか嘆かないで。

あなたが世界を許さなくても、私はあなたを許します。

だから教えてください。

あなたはどうしたら、私を許してくれますか？」

固有結界「ザンゲキノハジマリ」

逝きやがれなのです！！

自分もあと100回位死なないといけないのですがね・・・

では次回「女女男女女幼男」

第40話 「いいえ、一泊二日です」(前書き)

「うちもーしんなのですー!!」

第40話 「いいえ、一泊二日です」

引率者の失態で一泊するハメになった生徒会一行
ちなみに体裁もあるのでここでは姉弟ということになっている

アリア

「お姉ちゃんお風呂24時間利用出来るって」

スズ

「ホント一部屋でもとれて良かったわね・・・」

お・に・い・ちゃ・ん・た・ち

拓也

「ゴメンな・・・」

タカトシ

「ごめんねお兄ちゃんでごめんね」

優奈

「部屋ついたぞ」

シノ

「それではそれぞれ各々の持ち物を整理しようか」

シノ

「しまった……
ケータイの電源が切れている……家に連絡しようと思ったのに・
」

凜

「私持つてるわよ」

シノ

「すまない」

拓也

「なア……タカトシ……その手に持っている……」

タカトシ

「……気にしないでくれ」

優奈

「マジかよ……お前……半径85cmに近づかないでくれ」

凜

「なにして……る……」
「めんなさいね……」
半径3mに入らないでくれる？」

拓也

「用意するのはイインだかなア……」

コ ドームはどうかと……」

タカトシ

「妹めツツツツツッ!!」

シノ

「……」

取り敢えず怒られた

アリア

「シノちゃん

ゴムを携帯するのは悪い事じゃないよ・・・生でアナ セック
は危険なもの」

タカトシ

「そーゆー道具じゃねえよ!!」

拓也

「本当は性交時、勃起した陰茎に被せ膈内で射精しても精液を中に溜め膈内に流れ出さないよ

うにすることで性感染症の予防や避妊の目的で使用されるんだア

「近藤君」、「ゴム」、「スキン」、「サック」、「今度生む」

「家族計画」など

の俗称・隠語があるンだけエ・・・

ココテストに出るから覚えとけよオ」

凜

「でるかぁ!!」

タカトシ

「あの・・・家に連絡する前に・・・

男と外泊って大丈夫ですか？同じ部屋だし」

アリア

「そうだねー、津田君と哀川くんは安全な人だケド」

シノ

「そこを親にアピールする必要があるな」

アリア

「津田君は二次コン」

タカトシ

「ほかの案で」

シノ

「津田はBL」

タカトシ

「もうちょっとがんばって考えて」

凜・優奈

「拓也は私の彼氏で!!」

拓也

「うおお!?!」

シノ

「いや、私の彼氏で良いんじゃないか?」

拓也

「ちったア津田のを考えてやれよ」

タカトシ

「味方は拓也だけだ!!」

優奈・スズ・シノ・凜・アリア

「BLだッ!!」

拓也

「違うよな……?タカトシ……」

タカトシ

「ちげええ!!」

拓也

「はア・・・良い気持ちだア・・・」

タカトシ

「だね」

・・・カポーン・・・

シノ

「ではそろそろ床につくとしようか」

アリア

「さんせー」

タカトシ・拓也

「じゃあ俺達離れて寝ますね」

シノ

「そんなことせんでも君たちを信用しているぞ」

アリア

「そうだよ」

拓也

「センキューなア」

タカトシ

「ありがとうごじごじします」

拓也・タカトシ

「でも・・・」

俺達はいつの間にかとなりを陣取っているこの人を信用出来ませ
ん タカトシ

コイツを信用できねエ 拓也
なんか脱いでるし」

スズ

「横島先生・・・そこには私が」

ちなみに寝る順は

「ア凜拓優シスタ」

？

「……は……ないよ……だ……な……」

第40話 「いいえ、一泊二日です」（後書き）

因みにあと少しで『神の如き者』の持つ奇跡の象徴である『聖なる
右』

がINするのです

咲夜

「はあ・・・あなたそう言えば下書きしないわよね」

はい

プロットすら立てないのですw

というか立て方わからぬ・・・です

咲夜

「そう・・・で、妹様はどうしたのかしら？」

たぶん100回ぐらい死ぬ思いしてるのです

因みに僕もしたのです・・・前回から二日かけて・・・

咲夜

「・・・噂をすれば・・・ね」

フラン

「雛見沢・・・怖い・・・症候群・・・

梨花・・・レナ・・・魅音・・・詩音・・・沙都子・・・

怖い・・・」

あらら・・・ココまで来ますか・・・

咲夜

「・・・あなたも一緒の目にあつたのよね？」

ああ、そのことですか・・・

テレビで見てたから・・・後は痛みを我慢すれば良いのですよ
圭一が出てこなつたのですね〜

咲夜

「・・・」

これ次回までに見てきてほしいのです

咲夜

「グロそうね・・・」

まあいいわ・・・

では次回「女女男女女幼男」・・・

前回はこう言つてなかつたかしら？」

ま、まあ・・・いいじゃんw

グサグサグサ・・・

咲夜

「ではC i v e d i a m o
「

七夕記念 哀川くんと愉快な仲間達戦記(前書き)

この話は哀川くんシリーズ両方についてですので
ご注意を

七夕記念 哀川さんと愉快な仲間達戦記

拓也視点

あゝどうもオ

駄猫がとちくるって短編で七夕記念しやがりました
取り敢えず今回のゲストはア

桜才戦記より

天草シノ、七条アリア、津田タカトシ、萩村スズ、遠坂凜

ネギま！？戦記より

ミサカ、エヴァンジェリン、茶々丸、長谷川千雨、猫田友

共通で

俺こと哀川拓也、上条優奈

まア、だからといって何でも無いのだがこの話は両方にうろたわれる
片方しか知らない奴もみれる
よオにするらしいぜエ

因みに俺は司会者役だぜエ

拓也

「じゃア・・・取り敢えず乾杯！！！」

全員

「乾杯！」

拓也

「さて、どこに向かうとするかねエ・・・
まずネギま！？戦記のほ才行こうかア」

さて、駄猫が出られない理由ってのがあってなア・・・

猫田友が一応アイツの分身らしい、詳しいことは聞いてねエがな

拓也

「邪魔すんぜエ」

友

「『邪魔すんなら帰れ』『このリア充め』」

拓也

「あいよオ・・・って言い過ぎだろオが

吉本 喜劇でももつと優しいわ！！」

エヴァ

「やめんか・・・酒が不味くなる」

千雨

「未成年が飲むもんじゃねえだろ・・・」

茶々丸

「マスターは一応600歳を超えているので大丈夫です」

エヴァ

「一応とは何だ！！このポケロボ！！巻いてやる巻いてやるウウ！！」

茶々丸

「ああ／＼激しすぎます／＼」

拓也

「・・・ミサカどうやって収集つける？」

ミサカ

「さあ？とミサカはとぼけた振りをします」

拓也

「振りじゃねエか！！」

友

「『そんなにツツコンでしんどくない？』 『僕様ちゃんならしんどいよ』

『嘘だけど』 『学校ではポケキャラなんだよ』 『下ネタだけどね』

「

拓也

「『一々』 『つけんじゃねエ！どこかなんたらボックスの大嘘憑きと似ていてうぜエ！』」

友

「『ねらってるんだよ』 『独特なほうが受けイイでしょ』 『どう思う？ミサカちゃん』」

ミサカ

「私的には、

全裸には萌えががないですね。服は脱がしても靴下は脱がしてはいけません。

たとえば太陽が西から昇ることがあろうとも絶対絶対これは萌え業

界の鉄則ですね。

ホモサピエンスと動物の違いは何ですか？そう、衣服の着用です。つまりヒトは衣服があつて初めてヒトなのです。

それを全部脱がすことでしか欲情できない貴様らはヒト以下ですね。

動物と同じですよ。制服系の御三家と言えは何ですか？

答えてみてください。

そうですね。制服、体操服、スクール水着ですね。

なおセーラーかブレザーかの好みの違いは制服にカテゴライズするものとしません。

勿論、ブルマーかスパッツかの違いも同様です。

スク水も紺か白かの違いはあれどカテゴリーは同じ扱いです。

どうですか？これだけでも甘美な響きがするでしょう？

では貴方たち2人がこれらの内の一つずつが好みであつたと仮定しましょう。

拓也、貴方は制服です。猫田先生、貴方は体操服です。

頭に思い描け、時間は3秒です。描けましたか？

妄想くらい自在に出来てください、気合が足りませんやり直してください。

では貴方たちの望む衣装が登場するHビデオがここにありません、あると思ってください、

あると信じてください気合を入れなさい。

返事は押忍かサーイエッサーです。

馬鹿者それでも軍人ですか？よおし描けたようですね次に進むみます。

それらの萌え衣装が、

貴様らの馬鹿げた欲情に従い一糸纏わぬ姿にひん剥かれたと思つてみてください。

ですが、貴方たちよく考えてください。

全部脱いだらもうそれはコスプレHじゃないですよ？

最近そういう詐欺紛いなAVが増えているが実に嘆かわしいです。服を全部剥いたらもうそれは文明人ではない、動物です。

全裸にしか欲情できない貴方たちは犬、猫ですね。
失せてください。ゲットバックヒアー！とミサカは固有結界してみます」

拓也

「なア・・・なんでアイツにパスしたんだア？」

友

「『さすがの僕様ちゃんでもさ』『激しく後悔しているよ』『』」

・・・さて、次の所に行こうか

拓也

「やって来ましたア！桜才戦記！！」

凜

「なんでそんなにうれしそうなの？」

優奈

「さっきの見たらわかるぜ・・・私は激しく後悔した
知らないでイイ一面をみた感じだな・・・パンドラの箱？みたい
なもんだな」

・・・どちらかというところまではっちやけられると
もオどうでもいいよオに感じるぜエ・・・駄猫でさえやっちまった
っていつてたしな
それに比べてココはまだ良い感じだな・・・
タカトシは普通だし

タカトシ

「普通いつていわないで！！」

スズはちっこいし

スズ

「あんだとコラア！！」

会長は・・・まアいいか

シノ

「つく・・・なんだこの快感！！」

・・・

七条先輩はまだ常識人（笑）だし

アリア

「あらあら」

凜はツッコミだし、ツンデレだし、なんかつつかりだし

凜

「これは血なのよ・・・先代もその先代も・・・」

優奈はいろんな世界一緒だし

優奈

「そっいや、二つは一緒だもんな」

拓也

「そっいや・・・ほかの作者さんの見た駄猫がよオ

「東方かきたいな」とかバカなこと言ってるやがったぜエ・・・」

優奈

「東方つていえばさ・・・

とあるひぐらしの漫画でさ、圭一がな

か、簡単に言うなー！！

あの技は自分でも簡単には使えない奥義中の秘奥義だぞ！

どのくらい秘奥義つかとうと、使えば自分の命が絶命するた

め古代中国では極奥義と恐れられ、

武道家が死を賭して使う最後の究極奥義だったのだ！！

つて言ってる割には飛燕、割りと何回も使ってたよな？

そこで出てきたのが残機制ではないかという説だ。

人の命は1つと言われているが、その反面、猫には7つの命があることを認めるように、

そもそも日本文化には残機制を理解した古典が少なくない。

そもそも残機制は古来のシューティングの基本だったんだ。何？

今でもそんなのは当たり前？

違あああうッ！！

真の残機制とは、死亡時に決められた復活地点まで戻ってリプレイのことなのだ！

死んだその場で復活なのは一見残機制に見えて実はそれはバイタリティ制と変わりない！

このシューティングゲームとして当り前かつ重要なシステムが、皮肉にもシューティング界のビッグタイトルにて崩壊するとは誰が予見したであろうか！

かつてシューティング界に金字塔を打ち立てたあのグラディウス！！

あのゲームは死亡するとパワーアップが全てゼロに戻り、

しかも決められた復活地点まで戻されての再開になったため、高次元ステージともなると、

復活してはすぐ死亡、また同じ場所にまき戻されて死亡を延々と繰り返し、

残機数が何機あっても無意味じゃないかー！

これはハマリだー！！とハマリなる言葉すらも生み出したのだ！

これに対して続編である沙羅 蛇は、何と当時のシューティングとしては斬新な、

その場復活という概念を生み出したのだ！

これならお子様でも安心さ！

どんなステージもボスも残機数とコンティニューの50円玉さえあれば誰だって力技で

クリアーできる！！

でもこの時点でゲームの神聖性は失われたのだ！

何度繰り返ししても勝てない敵、ボス、ステージ！！

それについて打ち勝った時の爽快感はまさに『ひぐらし』！

抗えぬ昭和58年の運命を打ち破った時の爽快感は、闘い 挽歌を2年以上も攻略し続け、

ついにクリアした時の爽快感にも似る！！

今時のゲームにこれほどの長期にわたって攻略意欲をそそられる

ゲームがあるだろうか？

いやないッ！！ それはなぜか？ 力技で誰でもすぐにエンディングが見られてしまうからだ！！

どんな無様なプレイであろうとも、一度クリアしたゲームは魅力が薄れてしまう。

そうして軟弱なプレイヤーはそのゲームの真の攻略を目指すこともなく作品に飽きてしまうのだ！

結局、この軟弱な時代を生み出したのは、他ならぬ軟弱なゲームたちだったのだ！！

コ ミはそのミスを認めた！

その証拠に、グラディ スシリーズはその後の正当後継作ではその場復活を廃止して

再びハマリシステムを復活させている！！

いやでも東方はその場復活でいいんです。

だってロイヤルフレアで死ぬ度にステージの最初に戻されてた日にゃ、

いつんなつたら妹さまに会えるんだー！！

未だ自力じゃ紅魔郷と妖々夢のエキストラのラスボスに会ったことないんですけどー！！

お願いですZ Nさん、エキストラステージでもコンティニューさせてください

力技でもいいから妹さまやゆかりんに会いたいですうううう！！

というか世の中の人って何でみんなこうも簡単にエキストラをひよひよい解けるんすかああ！！ 足りないのは愛か動体視力

かりビドーかああ！！

あーもう次の東方オンリーでは撃つと動く人とお人形使いと貧血魔女の三角関係

サウンドノベルを書きたいいいいい、もちろん最後は惨劇でWて

へ！

どうつすか八咫桜さんBTさあぁん！！！！　って言ってたんだ
が……

どうなんだ？」

拓也

「……お前もか！！！」

優奈

「なにがだ？」

……おい駄猫……これ以上やったらいろんな意味でこるぞオ

拓也

「わからねエンだったら別にいい」

優奈

「気になるぜ……」

拓也

「会長はゲームとかあんまりしなさそオだよなア」

シノ

「そうだな、私はあまりしないな……」

拓也

「してそうなの……タカトシ、優奈、凜ぐらいじゃね？」

タカトシ

「だろうね」

拓也

「そつこつ言ってるうちに夕日しずんだな・・・」

因みにパーティー開始は16時だぜエ

駄猫視点

え？友じゃないのかつて？

そつやねく敢えて言うなら何の能力もない平凡な少年ですw

・・・七夕が誕生日の人おめでとうございます！

今日が誕生日のひとはつと

夢喰いメリーの藤原夢路さん お誕生日おめでとう！！
インフィニット・ストラトス

ISの篠ノ之箒さん お誕生日おめでとう！！

TO LOVEる -とらぶる- のララ・サタリン・デビルークさん
ん お誕生日おめでとう！！

らき すたの柊かがみさん お誕生日おめでとう！！

らき すたの柊つかささん お誕生日おめでとう！！

遊 戯 王の海馬モクバさん お誕生日おめでとう！！

・・・ネギま!？のキャラは？生徒会役員共のキャラは？
残念・・・俺にはしらべきれませんでした・・・

と、言うわけでggggdでしたが今回は・・・
っとその前に・・・

拓也視点

拓也

「へエ・・・意外と星って明るいなア・・・」

優奈

「そつだな」

拓也

「あ、そついや優奈はもオ短冊かいたかア？」

みんなエヴァのお酒を飲んで落ちてるぜエ

優奈

「……………ん？ああ……………書いたぞ」

拓也

「ほオ……………どんなコト書いたンダア？俺に教えてみ？」

優奈

「え、嫌だよ／＼／＼、別に拓也とずっと一緒にいたいなんて書いてないんだからな！！／＼／」

拓也

「……………これが萌えか……………（ブハッ）」

優奈

「え！？ちよっ！？拓也！？」

拓也

「時が見えるよララア……………」

優奈

「誰だよ！！……………折角二人きりだったのに……………不幸だなあ……………」

拓也

「……………我が生涯に一片の悔いはねエ！！（ハハ）（b）鼻血だしながら」

駄猫視点

まあ最後の最後までg d g dでしたなあ（、 - -、）
まあ、番外編なんであんまし気にしないでください（、、）
では次回（、、）

グサッ

ゲフ・・・何故・・・何故咲夜さんがここに!?

咲夜

「私の出番が無かったからよ・・・
では次回もよろしく願いますわ・・・

駄猫・・・ちよつとこつちに来なさい
「

七夕記念 哀川くと愉快な仲間達戦記(後書き)

はあはあ・・・死にそうになった・・・

あれならまだ魔砲のほうがいいですね・・・

ゲフッ

・・・お休み・・・咲夜っしゅ・・・

第41話 「女女男女女幼男」

おはよう、こんにちは、こんばんは哀川だぜエ

因みに寝れてねエンだぜエ・・・

超眠いんだぜ・・・

ついつい変なしゃべり方するぐらい眠いんだZE

・・・おっとスマンついつい普通の魔砲使いみたくなつたぞオ・・・
え？何故眠れないかってエ？

タイトル&前回の寝る並び方を見ればわかんたるオが・・・

隣が凜と優奈なんだぜエ？両方さア・・・美人じゃん？

色々むりじゃね？因みに両腕にひつつかれて俺の（ピーー）がアア
ア！！

・・・寝れないぞオオオ！！

おっとすまねエなア取り乱したぜエ
じゃア、今の状況を説明するぞオ？

タカトシにスズが抱きついてるぜW

スズ

（まくら・・・どこ？・・・あれかな・・・）

タカトシ

「……………萩村？」

スズ

「ッハツキヤアアア！！／／／」

シノ

「……………近親相姦はいけないぞ……………」

凜

「ン……………近づいて来ないでね」

優奈

「……………ロリコン……………いやペドか……………」

拓也

「おいおい……………そりゃねエゼエ？」

タカトシ

「いやいやいやいや！！そんな！？」

従業員

「ちよつとテメエ達黙りましょうか」

全員

「スミマセンでした」

・・・結局謝らせられました　まる
作文かよオ・・・

・・・お休み・・・サクヤツシユ
サクヤツシユって誰？

まア、いいかア・・・ZZZZZZZZ

朝になりました　まる
おはようサクヤツシユ

優奈

「おはよう!」

スズ

「……あーもー……寝癖が直らないなあ」

シノ

「私もだ……」

スズ

(あれが通常モードだったのか)

俺は二度寝を始めるぜエ

Z Z Z Z Z Z

シノ

「哀川!!」

「君もそろそろ起きないか!!」

拓也

「うーん・・・後5分ンンン」

シノ

「津田はもう起きたぞ・・・」

「往生際が悪い・・・5分で何ができる?」

アリア

「朝勃ちの処理」

シノ

「ならば仕方ない」

拓也

「ン!!そろそろ起きるぜエ!!」

- ガーッ -

アリア

「ハプニングもあったけど楽しかったねえ」

シノ

「そうだな・・・初参加の哀川はどうだった？」

拓也

「zzzz」

優奈

「疲れて寝てんだよな・・・ジャナキヤ私以外の女二・・・（ボソツ）」

シノ

「しょ、しょうがないな／＼」

- ビクッ -

シノ

「ん！？なんだ？今のは」

凜

「今のはジャーキングと言って身体に負担のかかる寝方をすると起きる現象よ」

シノ

「そっなのか？夢精したのかと思っ」

拓也

「イってねエエエ！！」

優奈

「あ、起きた」

一卷終了

第41話 「女女男女女幼男」(後書き)

お疲れ様でした!!

咲夜

「良かったわね・・・ようやく終わって」

いや、マジで本当にそうなのです!!

咲夜

「次は二巻ね」

頑張るのです!!

咲夜

「はぁ・・・口だけにはしないようにね

では次回・・・ようやくフィアンマ編よろしくお願ひしますわ」

では

駄猫・咲夜

「ではC i v e d i a m o」

繋ぎ兼祝 81000PV & 11000ユニーク!

どうもオ拓也でエス

繋ぎつつウ訳で今回から単発ネタを数話するぜエ

まず一発目を始めるぜエ

- 碧陽戦記 -

拓也

「おい！クソ餓鬼イ今日はナニすンだア？」

くりむ

「クソ餓鬼なんかじゃないもん！！」

拓也

「俺から見りゃアよオクソ餓鬼なンだよオ」

鍵

「俺のハーレムに悪口言うなッ」

拓也

「ハイハイワロスワロスWハーレム良かったねエ」

深夏

「なあ拓也あ・・・お前つてなんか裏の主人公っぽいよな・・・」

まア「とある魔術の禁書目録」じゃア裏の主人公つて設定だしなア・

・

新約とある魔術の禁書目録よろしくなア

ンン！！でもさア・・・

拓也

「それ言ったらテメエは表の主人公だろオが・・・
つか何でいきなりそんな話になったンだア？」

深夏

「いや・・・なんか急に思いついた」

拓也

「そオかよオ」

真冬

「所謂電波ですね」

拓也

「紅葉は喋ンねエしよオ」

知弦

「・・・あ、ちょっと勉強に集中していたわ」

拓也

「カオス過ぎるぜエ・・・」

誰かツッコミの飽和をどオにかしてくれエ！！」

- パワプロ戦記 -

拓也

「はア・・・今回は始まってそそそ試合じゃねェか・・・」

あおい

「ナニ言ってるの？」

矢部

「今日は変でやんすね・・・」

咲夜

「駄猫の所為で私まで……」

みずき

「二人とも今日おかしいよ？大丈夫」

駄猫

「大丈夫だ……問題無い」

拓也

「テムエ!!!」

咲夜

「アンタねえ!!!」

駄猫

「試合始まるおww」

聖

「頑張るぞ!!」

1・拓也 外野

2・咲夜 外野

3・ザコプロ 外野

4・駄猫 一塁

5・矢部 二塁

6・あおい 遊撃

7・みずき 三塁

8・聖 捕手

9 . パワプロ 投手

友沢

「さあ！受け手見る！俺のスライダー！！」

拓也

「（あれ〜言っちゃったぜエ？コイツ・・・）」

・グアアイン！！・

実況

「ホームランです！！」

・わあああああ・

拓也

「（言ってたじゃん・・・）」

友沢

「クソツ！！」

二番 レフト 十六夜

友沢

「今度こそ！！」

咲夜

「バカなのかしら？」

友沢

「何だと!!……と見せかけて!!」

咲夜

「はぁ……」

・グアツキイイイン・

友沢

「……………」

実況

「2本連続ホームラン!!」

ザコプロ

「俺この死合いに勝ったら告白するんだ……」

友沢

「畜生オウウウ!!」

・バキッ・

ザコプロ

「グボア!……………」

・パタン・

・ざわ…………ざわ…………

監督

「タンカもってこい!!」

アナウンス

「ピッチャー変わりました上条、上条！」

当麻

「一体ココは何処なんですかぁ！！！」

拓也・咲夜

「（アイツも犠牲者か・・・）」

駄猫

「いつくぜえええ！！！」

・ブオンブオン・

上条

「不幸だアアア！！！」

・バシユン・

実況

「1、1、165km/時です！！！」

拓也

「アイツのh・・・」

・ブオン・

繋ぎ兼祝81000PV&11000ユニーク！（後書き）

繋ぎですw

数話だけやらせていただきます

本編を楽しみにしていただいてる方申し訳ありません

第42話 「フィアンマ編プロローグ」(前書き)

もう、なんか考えてたシナリオA L Lぶっ飛ばししちゃいます

いきなりフィアンマ編

これ以上のばすのは色々どうかと思いました まる

第42話 「フィアンマ編プロローグ」

幻想殺し、一方通行の両名が元の世界に戻った

彼らが戻ったとき一人の男がこの世界に入ってしまった

そう、「神の右席」最後の一人右席のフィアンマが入って来てしまったのだ

彼は入ってきた時に幻想殺しがこの世界にもあることを知った

フィアンマ・・・その男は「この」世界で・・・

拓也

「はア・・・なんでこオなっちまったンだろオな・・・」

凜

「ごめん……ごめんなさい……」

優奈

「……テメエみたいなヒーローが駆けつけてくれたら!!」

「こんな間違いなんかは起こらなかったんだ!!」

拓也

「自分自身^{テメエ}じゃ張れるモノを自分^{テメエ}で選んでやる!!」

優奈

「嫌だよ……拓也……貴方とずっと一緒に居たいよ……」

拓也

「・・・そオだな

俺も・・・ずっと一緒に居たかった・・・」

拓也

「コイツには - 反射 - もナニも通じねエ

・・・だからどうした？俺のこの力は自分の大切なモンテメエを守るために使っつて決めた

ンだよ・・・」

拓也

「フィアンマ……ここから先は一方通行だ……」

とつとと元の居場所^{世界}に引き返しやがれエ!!!!!!!!!!」

凜

「好きだよ……」

優奈

「愛してる……」

拓也

「俺は……」

？

「フム……貴様はセイギノミカタでは無いようだな……」

拓也

「絶対に無駄なんかじゃねえんだからよオ……！」

第42話 「ファイアンマ編プロローグ」(後書き)

ハイ、プロローグでした・・・

言葉だけですが・・・

まあ、あんな感じですよ

咲夜

「のばすのはやめたのね」

うむ・・・

もう書くことにした！

更新速度は半端無く遅くなりますがね・・・

咲夜

「・・・残念なヤツね・・・」

では次回もよろしく願いします！

第43話 「平和な時間」

拓也

「はア・・・旅行楽しかったがよオ・・・
ものっそい疲れたなア・・・」

優奈

「でもたのしかったよな」

凜

「いい人ばかりだったしね」

ついさつき帰ってきたばっかなんだぜエ・・・
早く寝たい・・・

凜

「・・・なにかしら・・・」

拓也

「どつたア？」

凜

「・・・いえ・・・怪しい雰囲気を感じたような気がしたのよ・・・
」

拓也

「ふウン・・・」

優奈

「早く飯にしようぜ」

・・・能天気でいいよなア・・・
ホントによオ・・・

拓也

「後で散策すつかア・・・」

凜

「・・・もしかして・・・」

そのころ・・・

当麻

「帰ってきたんだよな・・・」

禁書目録

「・・・当麻？・・・当麻ああ！！」

当麻

「そついや・・・フィアンマは？」

禁書目録

「なんかいなくなったらしいよ・・・」

ほかの神の右席が騒いでる」

当麻

「もしかして・・・」

元に戻って・・・

拓也

「さて・・・飯食ったから行ってくるわアそこら辺」

凜

「よろしく頼むわね」

優奈

「早く帰ってこいよ」

さて……

これは……さっきは疲れてたからあんまり感じなかったがかなり大量の変な気ではまかれてんなア……
アイツらが言ってたフィ……何とかかア……

拓也

「さて……どうしたモンかねエ……」

可能性としては

凜の次元移動を”うっかり”ミスしてしまったっていうのが一番高い確率のдарオな

ンで、次に高いのが

自身でこっちに転移してきた……

ぐれエかア……

どちらにしろ……相手が相手なンだろオなア

メンドクセエが……尻ぬぐいは身内でしなきゃなア……

このときの俺はまだ知らなかった……

神の右席……それがどういうモノを示しているのかを

このときの俺はまだ知ることが出来なかった・・・

大切なモノを自分自身で守ることの大変さをテメエ

このときの俺はまだ知り得なかった・・・

大切なモノと居た時間の大切さを

このときの俺はまだ分かっていなかった・・・

大切なモノを抱え切れていなかったことを・・・

そしてその大切なモノを泣かしてしまったんだ・・・

自分の力不足の所為で・・・

第43話 「平和な時間」(後書き)

最終パートで二つの話に分けようと思います

理由はどう袁川くんが倒されたかと言つのを書きたいがためです

まあ最終パートで後書き使うか、

おまけとして作るかのどちらかですがw

さあ・・・平和な時間はもう終わる・・・

拓也よ・・・大切なモノを守る為勝利を勝ち取れ・・・

次回・・・「邂逅」

第44話 「邂逅」

拓也

「はア……誰もいねエのかよオ……
なら……早く帰って風呂に入るかア……」

- トントン -

拓也

「ンア？誰だア？」

紅い髪の神父

「すまないが……こちら辺の地理をおしえてくれないか？」

拓也

「あ、あア……えと交番に行ったほオがよくねエかア？」

紅い髪の神父

「あ、そうだな」

- テクテク -

拓也

「……今の誰だったんだろオか……」

拓也

「何も無かったぜエ」

凜

「そう・・・ありがとうね」

拓也は見逃していた・・・主に眠いという理由で

あの、紅い髪の子が神父こそがフィアンマなのだ・・・

拓也は殺気慣れしていたため余計に気づかなかったのだろう・・・

あそこにいたのが”唯”の少年なら・・・

- 翌朝 -

- プルルルル・・・プルルルル・・・ -

拓也

「ンだア？えエと・・・メイコ先輩からかア・・・

ハイもしもしイ」

メイコ

『悪いんだけどね仕事手伝ってくれない？
紅い髪神父がなんたらかんたらだつて』

拓也

「いや・・・アンタにや彼氏いんでしょ・・・」

そう彼女には拓也と同年の”鈴木 翔”という彼氏が居るのだ
・・・リア充爆発しやがれエ・・・
因みにカイト先輩には彼女がいるぜエ・・・
意外と周りにリア充多いぜエ・・・

駄猫

(そう言うてメエもリア充ですけどね・・・)

拓也

「・・・なんか激しく不本意な言葉が聞こえたよオナ」

メイコ

『いいじゃない・・・早く行くわよ！』

拓也

「・・・もしかして・・・ふら」

メイコ
『コロスゾ？』

拓也
「すみませんでしたアアアアア！！」

・・・うん・・・ねこ太でも・・・アイツは止めとこう
涼宮さんの憂鬱の谷口みたいなヤツだしなあ・・・
取り敢えず慰めよう・・・それが良い・・・

拓也
「ンで何処集合ですかア？」

メイコ
『駅前で路上ライブしてるから飛び入りしなさい』

拓也
「なにその無茶ぶりはア！？えエ！？
俺にはムリですよオ」

メイコ
『よろしく〜』

拓也
「虐めかッ！？」

- 駅前 -

ミク

「……………」

拓也

「はア？入れって此処に？ふざけてやがる・・・
しょうがねエ・・・俺の歌を聴けエエエ！！」

ミク

「え？拓也くん？」

拓也

「……………ツ……………ツ」

観衆

『……………ツスゲエ！！』

拓也

「（何時？・・・仕事・・・）……………」

第44話 「邂逅」(後書き)

どうも〜駄猫です〜

歌詞が書けなくなったのはキツイですw

さて・・・次回「仕事・・・相手は音使い!?!」

次回もよろしく願います

では!

第45話 「仕事・・・相手は音使い!？」

どうもオ・・・

ちつと疲れてる哀川拓也だア・・・

え？何故かってエ？・・・ライブだよ・・・ライブ
路上ライブ！

ンでだア・・・初めて知った事実が

1・メイコさんは幼なじみが居る・・・フツメンらしい・・・デー
トするらしい・・・鈍感だとか

2・ミクはこつち側だった

3・今回の相手は音使い・・・

でもさア・・・音使いつつたら、アイツしか出てこねエンだが・・・

え〜と何だっけ？

アレだよアレ・・・アイツ・・・

そうそう！残響殲滅だ！！

駄猫

(残響死滅だよ)

なんか聞こえたが無視で

それでだア

音使いはオマエなら対応できるだろうって

まア反射出来るからなア・・・

ンで俺事哀川拓也は何をしているでしょオカ？

答えは

ライブスタジオで待機なう

こんなに話してたのは暇つぶし以外の何者でもねエな

ミク

「拓也君・・・どうする？」

拓也

「俺が聞きてエンだが・・・」

前回の予想が外れてたのには驚いたなア・・・
相手が気づいてくれないだけっていう・・・だから不機嫌だったの
かア？

全然わかんねエぜ・・・

拓也

「お・・・来たみてエだな・・・何持ってやがるかわかるかア？」

ミク

「マイクみたいだよ・・・」

拓也

「音使い・・・もしかしてコレだけで判定したとかねエよなア・・・
分からないだけに怖いぜエ・・・」

ミク

「そうだね・・・」

拓也

「どうしたモンかねエ・・・？」

「いっそのこと動いてくれると有り難いんだがなア・・・
でも、もしFTのララバイだったら殺人おきるしなア・・・」

拓也

「マジでどうしたモンかねエ・・・」

ミク

「いっそのこと動かせるっていつのはどうかな？」

拓也

「周りに被害がでるだろよ・・・」

ミク

「つむ・・・なら他に案あるの？」

拓也

「俺特攻でもしよか？」

ミク

「・・・それが良いかもしれないね・・・お願いできる？」

拓也

「オツケエ・・・了解したぜエ」

と言うわけで特攻することになった俺だア
どうしようか・・・

いきなり黒い翼で吹き飛ばすか……

拓也

「哀川……いつきまアす！」

・ズン・

男A

「なん……げぶらー！」

・バサッ・

拓也

「ハロオ……さて、テメエはどんなことをしようとしていたのかなア？」

答えてくれると嬉しいぜエ……」

男A

「誰が答えるか!!……でも貴様運が良かったな……俺の剣製の初めての相手だ……殺してやるよ……」

拓也

「(剣製……赤髪……ラフな服装……衛宮……士郎……違う……それはない……よく二次小説で見る転生者かア……)へエ……できんのかア?」

男A

「(一方通行が居るのは予想外だが……アイツには魔術が効いた筈……この勝負貰ったも同然……あとはあの後ろの美少女を……グへへ)」

拓也

「はア……やっぱ三下かア……雑魚はさっさと帰ってくれねエかア?」

男A

「クヒヤヒヤヒヤ……俺を倒せると?……なら死ね!」

拓也

「馬鹿は馬鹿だなア……」

-ガキン-

男A

「なんだと!?なら・・・エクスカリバー!!!!!!」

拓也

「ハイハイワロスワロス・・・」

ウザインで・・・早く消えてくれねエかア?」

男A

「くそ!!!なら!!!!!!」

「 I am the bone of my sword . (体は 剣で 出来ている) 」

「 Steel is my body , and fire is my blood (心は硝子) 」

「 I have created over a thousand
and brades . (幾たびの戦場を越えて不敗)

Unaware of loss . (ただ一度の敗走もなく、
)

Nor aware of gain (ただ一度の勝利もな

し」

「 Withstood pain to create weapons. (担い手はここに孤り。)

waiting for one's arrival (剣の丘で鉄を鍛つ) 」

「 I have no regrets. This is only path (ならば、我が生涯に意味は不要ず) 」

「 My whole life was (この体は、) “ unlimited blade works ” (無限の剣で出来ていた) 「 unlimited blade works! 」

- ゲワツ -

拓也

「だから？って言うてるだろオが」

- ガン!!! -

- シュンシュン -

拓也

「借りモンの心で勝てると思うな糞虫が！

エ
せめて生かしてやろうと思ったが・・・あの男を汚すのは許せね
エ
・・・

B a d n i g h t !
「

-
グ
チ
ャ
-

インターネット
コミュニケーション

第45話 「仕事・・・相手は音使い!？」 (後書き)

さて・・・合宿おわった!!!

辛かった・・・でも・・・楽しかったかな

あと更新できたのが激しく嬉しかった!!

今日寝てないしねw

これからが本当の夏休み・・・

堪能してやる!!!!!!

記念駄弁回

駄猫

「はいどうも！駄猫なのです！」

拓也

「ン、どオも哀川拓也だア」

優奈

「なんか・・・ありえねえな・・・どうも上条優奈だ」

咲夜

「・・・おかしいわね・・・目の錯覚かしら・・・？」

お久しぶりね・・・十六夜咲夜よ」

駄猫

「今日、桜才戦記のアクセスの所をみたのですが・・・

PV100,188アクセス・・・あれ？おかしいな」

ユニーク12,885人・・・あはは目の錯覚だよわ」

みたいなコトになってたんですよ・・・今回は色々まとめて紹介
させていただきます」

咲夜

「次は東方戦記のアクセス解析よ

PV13 / 747アクセスね・・・まあ妥当じゃないかしら？

ユニーク2 / 643人・・・結構増えるわね・・・」

拓也

「次はネギま！？戦記行くぜエ

PV102 / 819アクセス・・・一体何があったんだろオナア・・・

ユニーク16 / 904人・・・本当に何があったんだろオナア・・・」

優奈

「何回みても変わらない数値にビックリしたよなあ」

拓也

「本当になア・・・」

駄猫

「本当にビックリしたよw」

咲夜

「あり得ないと思ってた所まで来てしまったわね・・・

駄猫は最初の目標は5万いったらいいなあ。とか言ってやってたしね」

駄猫

「ん・・・そうなんですよね・・・」

めっちゃビックリしましたよww目標は超えたし……」

優奈

「それで、これからはどうすんだ？」

駄猫

「夏休み終わったら取り敢えず桜才戦記を進めるよ

まあ、あと一週間で夏休み終わるけどねww……はあしんどい」

拓也

「ンじゃ、進め方を>||<で教えてくれ」

駄猫

「こんな感じかな

夏休み中

東方戦記>ネギま！？戦記>桜才戦記

夏休み終了後

桜才戦記>ネギま！？戦記||東方戦記」

咲夜

「桜才戦記を進めるのね」

拓也

「そうですねw

9月中にはフィアンマ終わらせませすw

咲夜

「そうなの」

優奈

「ま、取り敢えずガンバレよ」

駄猫

「あいなw

では、次回「次の仕事相手も路上歌姫」です

よろしくお願いします！」

全員

「また見てね！！」

第46話 「始まった一つのモノガタリ」(前書き)

- プロジェクト ファインマ - 始動しました。

ここから先10月までは桜才戦記の一方通行です。

時々吉井明久戦記は書きますが他のものは二週間に一回更新になる予定です。

では、本格的にフィアンマ編・・・始まります。

第46話 「始まった一つのモノガタリ」

どうもオ・・・

かなり切れてた哀川拓也だぜエ

でもそのことについて聞かれてるんだぜエ

ミク

「ねえ・・・あの男って誰なの？」

拓也

「ん〜、まア色々あってなア」

ミク

「その色々を聞いてるんだけどな〜」

拓也

「実際に会ったことはねエからなア・・・」

ミク

「なら・・・」

・ズドオオン・

拓也・ミク

「!?!」

青タイツ

「・・・此処か？」

拓也

「・・・テメエ誰だア？」

ランサー

「あ？オレかオレは最速のサーヴァント『ランサー』だ」

拓也

「ッ!?!」

ミク

「どうしたの!?!拓也君!」

ランサー

「此処に上条優奈が居るって”マスター”に言われたんだが・・・
テメエ知ってるようだな・・・死にたくねえならばきやがれ・・・
無闇に殺生はしたかねえんでな」

ミク

「優奈ちゃんって……確か」

拓也

「ミク喋るなア」

ミク

「!?!」

はア……まさかクーフリーンが出てくるとはなア……
つつウ事ア、優奈を狙って来てるのは魔術師かア……

拓也

「そっちこそ引いてくんねエかア？考えてエコトがあんでなア……

」

ランサー

「何、戯れ言言ってやがる……

口で言ってもわからねえなら殺るしかねえな……」

拓也

「ハイハイ……たく面倒なコトに巻き込みやがってよオ……」

- バサツ -

拓也

「最初からクライマックスだア・・・テメエはついてこれるかア？」

ランサー

「ほざくな餓鬼が！」

ミク視点

ミク

「す、すこい・・・」

さっきは冷や汗が出るような声だった・・・

あの青タイツの変態？も強いけど・・・拓也君が其れを押ししてる・・・

・

何が起こってるか分からない・・・
唯言えるのはスゴイと言うこと・・・
空中で煌めく火花・・・
キンキンッつと言う金属音・・・
・・・嫌でも見とれちゃうね・・・

拓也

「いいねいいねエ！最ツ高だねエ！！」

ランサー

「オラオラ！テメエもやんじゃねエか！！」

拓也

「でもオレ、マイクで戦ってんだよオナア・・・」

ランサー

「！？」

拓也

「早すぎて分からなかっただろオ」

ランサー

「・・・規格外すぎんだろ」

ミク

「・・・拓也君程の強さの人をバグキャラって言うんだね・・・」

本当にビックリだね・・・

相手槍なのにマイクって・・・

私、流石に引くよ？本当にビックリだよ・・・

拓也視点

拓也

「武器がマイクしか無かったからなあ……」

ランサー

「……さて、そろそろ終わらせろっつウ命令が来てんで……」

これで最後だ……

・突^{ゲイ}き穿^{ホルケ}つ……死^{ホルケ}翔の槍――！！！！」

拓也

「……何の為に翼出してたと思う？」

オレも必殺技つかう為だよォ……グガガガガ1d j w s h」

・バサ……ズドドドドドドドドド

ランサー

「ゲイボルグが相殺される・・・だと!？」

拓也

「j k s d l 1 0 a j f 此 j o s a f g i o d 1 4 5 終 j d s j f

a o

ランサー

「ツク！」

拓也

「つつ痛エ・・・流石に演算狂わせるのはキツイぜ・・・
・・・ンで、消えそうになってるランサーくん・・・テメエのマ
スターは誰だア？」

ランサー

「ツケ・・・オレが言っわけねエだろ」

拓也

「だろオな・・・
アイルランドの光の御子・・・良い勝負だったぜ」

ランサー

「よく言っぜ・・・まったくよ・・・」

- サアアアア -

ミク

「……拓也君今……アイルランドの光の御子って……」

拓也

「ン？ゲイボルグつつたらクーフリーンだろオが」

ミク

「……本当に君は規格外っていうかバグキャラって言うか」

拓也

「……ンでケガはねエか？」

ミク

「それは拓也君に言いたいよ全く……」

拓也

「そらすまなかつたなア」

ミク

「……惚れた弱みなのかな……あんな笑顔見せられたら何も言えないや……」

拓也

「……もう何も居ないみてエだし……帰エるぞ」

ミク

「……はあ……家まで送ってってよね」

拓也

「分かりましたよお姫様」

ファイアンマ

「・・・あのとぎの男がイマジンブレイカー幻想殺しのガーディアン守護者か・・・」

第46話 「始まった一つのモノガタリ」(後書き)

咲夜

「ひさしぶりに此処にきたわね」

駄猫

「今日からは毎日くることになりますよw」

リアルがアレな時以外ですがww」

咲夜

「私としては仕事は多い方がいいのだけれど」

駄猫

「そう・・・ですね・・・」

他の小説には出る予定はないですしね・・・

東方戦記に出る十六夜咲夜は此処の咲夜さんではありませんしw」

咲夜

「・・・まあいいのだけど」

駄猫

「基本はコッチメインに動かすようになるので仕事は出来ますよ・・・
・多分」

咲夜

「最後多分って言ったわよね・・・」

駄猫

「取り敢えず頑張ります！」

咲夜

「はあ、そうして頂戴」

駄猫

「では次回もよろしくお願いします」

咲夜

「見ないと中国みたいに串刺しにするわよ」

駄猫

「や、やめれ……もし本当にしたら止められる気がしないから・
・・」

咲夜

「大丈夫よ……アナタ以外にする気はないから」

駄猫

「ちょ、ちょっとまで……さっきのは

僕を串刺しにするわよってこと？」

咲夜

「当たり前じゃない」

駄猫

「ええええええ……」

第47話 「さて・・・と」

拓也

「一体誰なんたるオナア・・・ランサー」

はア・・・

この分じゃ全員でてくるよなア・・・
特にバーサーカーは面倒だろオナア・・・十二回も殺せねエ・・・

拓也

「はア・・・魔術師なのは分かってンだがよオ・・・」

凜

「おかえりなさい・・・遅かったわね」

拓也

「いや、ランサーに絡まれて」

凜

「・・・え？」

拓也

「だからランサーだって」

凜

「・・・なんでこの世界にサーヴァントが？」

拓也

「取り敢えず魔術師が優奈狙ってきてるよオだなア・・・」

凜

「・・・もしかしてまた私の『うっかり』の所為？」

拓也

「ありえるから何とも言えねエなア・・・マジで」

・・・宝石剣でアイツら送ったときに

凜がうっかりして・・・魔術師が来ちまったってことも・・・

拓也

「ま、取り敢えず対策は出来てっから何とかなンだろ」

凜

「・・・ごめんね・・・迷惑かけて・・・」

拓也

「誰も迷惑だなんておもってねエよ・・・思ってたら一緒にいねエしよオ・・・」

凜

「・・・ありがとう・・・」

次の日・・・

拓也

「ンで、学校だぜエ」

タカトシ

「なにを言ってるの？」

優奈

「電波だからほっといてやれ」

凜

「そつするのが賢明よ」

拓也

「ひでエぞ？ テメエ達」

うん．．．流石のオレでも凹むぜ全くよオ．．．
オレは唯打たれ強いだけで曲がらないことはねエンだからよオ．．．

ミク

「あ、拓也君」

拓也

「あ、ミクじゃねエか．．．どうしたんだア？」

ミク

「メイコ姉さんがコレ渡せって」

．．．？なんだこりやア．．．？
全く検討がつかねエンだが．．．
一体なんなんだア？

- パカ -

拓也

「なんぞ？ コレ．．．CDにラジカセ？」

「――」

優奈

「拓也……ノリノリだな……」

タカトシ

「うまいね」

凜

「……（仕事って暗部組織だったのね……）」

拓也

「……黒歴史だわア……」

凜

「うまくて良いじゃない」

優奈

「確かにな……」

タカトシ

「プロみたいだな……」

拓也

「ヤバイわア……恥ずかしいわア……」

あと、メイコさんぶっ飛ばす……絶対になア……」

凜

「・・・今アナタの形相凄いわよ・・・」

優奈

「ある意味顔芸だな・・・」

タカトシ

「本当にね」

拓也

「タカトシしゃべり少なくねエかア？」

・・・駄猫・・・手抜いてやがる？

駄猫

(いえ、彼この章では出番ないのででしたのです)

・・・残念だなア・・・

拓也

「・・・ンで、どじする？」

凜

「・・・取り敢えず授業受けましょうよ・・・」

タカトシ

「ほんとだ！こんな時間じゃん！」

優奈

「先に行くぜ」

拓也

「ういー」

今回までに倒したサーヴァント

ランサー

第47話 「さて・・・と」(後書き)

咲夜

「ちゃんと連続で更新したわね」

駄猫

「怖いですもん・・・串刺し」

咲夜

「残念ね・・・」

駄猫

「こえええ・・・」

咲夜

「・・・さて、次回は？」

駄猫

「Fateの原作してる人はわかると思いますが・・・

学校です・・・甘ったるいです・・・

まあ、自分の出来る限り頑張ります！」

咲夜

「・・・本当に甘いわね・・・自分に」

駄猫

「明日は学校休みなら二更新かな？」

咲夜

「まあ、頑張りなさい」

駄猫

「・・・じゃ、では次回もよろしくお願いします!」

咲夜

「見ないと中国みたいに串刺しにするわよ」

駄猫

「・・・優しくしてね?」

咲夜

「気持ち悪いわよ?」

駄猫

「づぐっ」

咲夜

「では・・・」

第48話 「……オレにかまわず先に行け……」

別にタイトルは後書き以外関係ありません

拓也

「……いつてエなんなんだろオ……」

凜

「もしかしたらライダーの結界かも知れないわ……」

拓也

「たしか命を吸う結界だったかア？」

凜

「ええ……」

拓也

「結界の発生位置分かるかア？」

凜

「一応ね……」

優奈

「おーい、お前ら何話してんだ？」

拓也

「ンでもねェよ」

優奈

「・・・そうかよ」

拓也

「オレの分の弁当忘れたから購買行ってくるぜ」

凜

「了解よ」

優奈

「・・・分かった」

- 裏庭 -

はア・・・ライダーだったらトリッキーだったかア？

釘と魔眼で戦う筈・・・ならもう目つぶって反射オンリーで戦うかア？

まア最悪翼つかうかア・・・

アレめっちゃん具合悪くなるからなァ・・・

拓也

「おおい・・・ライダーさん・・・いるンだろオ？」

ライダー

「・・・何故分かったんですか？」

拓也

「うお！？マジでいやがったァ・・・ビックリしたぜェ」

ライダー

「・・・まあ、良いでしょう・・・」

上条優奈を引き渡しなさい・・・さもなくば・・・殺しますよ？」

拓也

「ン・・・ランサーから通じて聞けるとかねェの？」

まァ、いいや・・・アイツは誰にもわたさねェ・・・

其れが例え神様でも・・・奪おうとするなら悪魔でも神でも殺してみせる・・・」

ライダー

「交渉は決裂のようですね・・・」

イマジンプレイカー ガーディアン
幻想殺しの守護者・・・覚悟してください」

拓也

イマジンプレイカー ガーディアン
「幻想殺しの守護者？」

まァ、覚悟はそっちがすんだなァ・・・ライダーさん・・・？」

まず最初は目をつぶらなくてもいいかァ・・・

取り敢えずは反射もしくはベクトル変換で行くとすつかア・・・

ライダー

「死になさいッ!」

・ジャリリリリリリ!・

拓也

「ところがどっこい」

・ギン・

拓也

「残念でしたア・・・オレには飛び道具はきかねェよ」

ライダー

「ならば・・・!」

・ヒュン・

おお・・・消えるコトできんだなア・・・

そついや最初も消えてたなア・・・あア、うっかりうっかり

拓也

「ンじゃ・・・コッチもいくぜエ・・・」

光その他諸々・・・全部使ってステルス、ステルスウ・・・

ライダー

「っ!?!?」

拓也

「ステルスできんのが自分だけだと思っちなよオ」

ライダー

「後ろ!?!」

拓也

「残念前でしたア!」

「ゲシッ!」

ライダー

「つぐ……」

拓也

「……ン?アレ?お前本気だせてないなア……英雄がこの程度
の善ねエモン……」

ライダー

「……桜が人質にされてるんです……だからアナタには……」

拓也

「なるほど……負けてデータ取ってこいってコトなア……
ンで凜の妹が何でコッチに来てンだア?」

ライダー

「……何故か急に吸われたそうです……」

「……凜エエエ……」

拓也

「取り敢えず、オレントコ来い……
桜って言うヤツは助けてやっから……」

ライダー

「……あなたは士郎に似ていますね……」

拓也

「オレにはあのセイギノミカタはできねエ……
オレに出来るのは周りを守ることと自分を守ることだけだ……」

今回までに倒したサーヴァント

ランサー

話し合い中

ライダー

第48話 「……オレにかまわず先に行け……」(後書き)

拓也

「……アレなんだア？」

咲夜

「串刺しですよ？」

拓也

「……なんか書いてあるなア……」

駄猫くくお・れ・に・か・ま・わ・ず・さ・き・に・い・け

拓也

「……」

「ッサ」

咲夜

「……ダイニングメッセージでは無いはずよ」

拓也

「……思い切りハリネズミなんだが……」

駄猫

「……っ……ハアハア……」

セフセフ……なんとか生きて帰ってこれた……
危なかった……川見えた……」

拓也

「まア、毎日更新できなかったしなア……」

駄猫

「でもやり過ぎじゃね？」

咲夜

「……楽しかったんだもの……」

拓也

「……Sだったんだな……」

駄猫

「……もういいや今度仕返する……」

では次回……話し合いで解決しようね……」

拓也

「では！またなア！」

咲夜

「見ないと中国みたいに串刺しにするわよ」

駄猫

「……痛い……」

第49話 「話し合いで解決しようね」

続いているので

前回のあらすじっ!?

優奈超直感発動!?

偶然ライダーさん見つけた!?

凜エエエエ

では今回も 哀川くんの桜才戦記 始まります

拓也

「ンで、どうすンだア?」

ライダー

「私は桜が助かれば・・・」

拓也

「うーん・・・凜に頼むかア・・・」

ライダー

「凜も居るのですか!？」

拓也

「・・・いるぜエ・・・後耳つぶれそうだったぜエ・・・」

「ズン!」

ライダー

「・・・桜を・・・」

拓也

「あきらめてンじゃねエよ・・・馬鹿やろオ・・・」

ライダー

「!？」

拓也

「はア・・・穏やかじゃねエなア・・・」

作戦に失敗すりゃ切り捨てかい？

アーチャーくん」

アーチャー

「ふむ、何故貴様が私の名前を知っているのかが些か疑問だが
足手まといは切り捨てた方が効率的だ」

拓也

「・・・お前・・・答えを得ていねエ道の錬鉄のか・・・
ならそう言う答えが返ってくるわなア・・・」

アーチャー

「何を言っている・・・？」

拓也

「はア・・・まあいいか・・・
お前は自分の過去に・・・いや生前か・・・
後悔しているのか？セイギノミカタをしたことに・・・」

アーチャー

「・・・なるほどな・・・凜がこの世界にいるのは知っていたが
フム・・・パスが繋がって居るようだが・・・魔力を通すモノで
は無いようだな・・・」

拓也

「オレはよオ・・・アーチャー・・・
エミヤシロウを識っているし、視っている・・・
どんな生前を生きたか・・・
例えばそうだな・・・
間桐桜が黒くなったことを識っている
遠坂凜がエミヤシロウに託したモノを識っている

セイバーがどんな思いをしていたか識っている
ギルガメツシュが黄金馬鹿だと言うことも識ってるし、
アイツの剣が唯一無二だと言うことも識っている
固有結界が発動したことも識っている・・・
何故かってエ？・・・オレ自身がそう言う存在だからだ・・・」

アーチャー

「ッ!？」

・・・なるほどな・・・貴様はエミヤシロウの過去を辿ったのか
」

拓也

「間違つてはいない・・・

ある意味憑依とも言えるな・・・

初めてその感覚に陥ったのは凜が来て家に泊めたときに見た夢だ・
」

アーチャー

「・・・フム・・・ということは貴様は私を識っているのかね？」

拓也

「ああ・・・

だがオレはセイギノミカタを目指す気はねエ・・・

オレが出来るのは身の回りと自分を守るコト・・・」

アーチャー

「フム・・・貴様はセイギノミカタでは無いようだな・・・」

拓也

「どっちかっつウと悪党だからなア・・・

自分の命と身内の命さえ無事なら良いんだからなア……」

アーチャー

「……だが貴様は識っているはずだ……」

「其れがどれだけ無駄な行為だと言っことか……」

拓也

「……」

アーチャー

「独りで戦うコトが出来るのは強者のみだ……」

貴様やかつての私のような守り手では無く独りで戦う強者のみだ・

・

それでも貴様が……」

拓也

「それでもよオ……アーチャー……」

オレは後悔しねエ……例え其れが茨の道だとしても……

オレは自分に嘘をつきたくねエ……

自分自身^{テメエ}じゃ張れるモノを自分^{テメエ}で選んでやる!!」

アーチャー

「……ならばその理想を抱いて溺死しろ！」

投影開始 - トレース・オン - 」

拓也

「行くぞ！アーチャー！」

- ギン -

アーチャー

「フム・・・貴様はセイギノミカタでは無いがいずれすり切れる・・・

・
矛盾と気持ちの摩擦でな・・・」

- ガン -

拓也

「だとしてもッ！」

- バサツ -

アーチャー

「もう分かってるんだろう・・・
今していることが無駄だったということが！」

- ギンギン・・・ガン！ -

- ズザザ -

拓也

「・・・知るかよ・・・」

オレが今までして・・・守ってきたオレの大切なモノ・・・

アイツ達の笑顔の為にやってきたんだ・・・

自分のしてきたことは・・・無駄なかじゃねエ・・・

アイツ達が笑顔でいれるなら・・・

絶対に無駄なかじゃねエンだからよオ！！！！

「ウオオオオオオオオオオ!!」

「アーチャー」

「ハアアアアアアアア」

「ガギン!!!」

拓也

「・・・オレの勝ちだアーチャー・・・」

「アーチャー」

「・・・ああ・・・そうだな・・・そして私の負けだ・・・」

拓也

「フン・・・テメエいい顔してンじゃねエか・・・」

「アーチャー」

「君は皮肉染みた笑顔をしているな・・・」

拓也

「うるせエ・・・」

「ライダー」

「・・・守護者・・・」

「アナタ本当に人間ですか？英雄じゃないんですか？」

「アーチャー」

「翼も生えているし・・・」

拓也

「さアな……」

アーチャー

「っちい！ロー・ファイアス熾天覆つ七つの円環！！」

・ギンギンギンギンギンギン・

・ズドオオオン！・

ギルガメッシュ

「流石贗作者……とでも言つべきか？」

拓也

「っち……気イ抜いてた所為で気付かなかつたぜ……」

ライダー

「すみませんアーチャー……」

アーチャー

「……今はアイツをどうにかしなければ……」

今回までに倒したサーヴァント

ランサー、ライダー、アーチャー

第49話 「話し合いで解決しようね」(後書き)

駄猫

「なんとか更新！」

咲夜

「それにしても……タイトル関係なさ過ぎでしょう？」

駄猫

「なのはさん式おはなしだよ……」

魔王式O・H A・N A・S H Iとも言っらしい……

アーチャーに勝ったけど辛い状態だね……」

咲夜

「そっね……」

駄猫

「R P G式なら

拓也

HP 15000 / 45000 MP 0 / 0

ライダー

HP 12000 / 25000 MP 8000 / 8000

アーチャー

HP 8000 / 30000 MP 9500 / 10000

て感じだね・・・ンでギルガメッシュは

ギルガメッシュ

HP 80000 / 80000 MP 100000 / 100000

だね

咲夜

「うわ・・・酷いわね・・・」

駄猫

「なんせラスボスだしね」

咲夜

「本当に頑張っただけいわね・・・」

駄猫

「実はフィアンマ・・・もうすぐでんだぜb」

咲夜

「・・・どういう意味でかしら？」

駄猫

「うん・・・裏面的な意味で・・・番外としてだけど」

咲夜

「・・・まあ、いいわ」

駄猫

「では次回「ウゼエ丸・・・じゃなかったきんぴか王ウゼエ・・・」

」

次回も見てね！」

咲夜

「見ないと中国みたいに串刺しにするわよ」

駄猫

「今回は八本刺されてます（笑）」

第50話 「ウゼエ丸……じゃなかったきんぴか王ウゼエ……」

続いているので

前回のあらすじっ!?

アーチャー漢らしい!?

ライダー空気!?

拓也……実は……!?

きんぴか王……体力多すぎ!?

では今回も 哀川くんの桜才戦記 始まります

「流石贗作者……とでも言うべきか？」

拓也

「つち……気イ抜いてた所為で気付かなかったぜ……」

ライダー

「すみませんアーチャー……」

アーチャー

「……今はアイツをどうにかしなければ……」

拓也

「……ハア……」

ライダー

「連戦はキツイですね……」

アーチャー

「アイツは何時も本当にめんどくさい時に来てくれるな……」

ギルガメツシュ

「流石我だ！！！」

拓也・ライダー・アーチャー

「「「はあ」「」」

ギルガメツシュ

「……さて……貴様達にはココで死んで貰うつもりなんだが・

・
まずは上条優奈の場所を……」

拓也

「吐くわきゃねエだろ……このきんぴか！

こっちはイライラしてンだよオ……まずはライダー来て……」

ライダー

「うっ……」

拓也

「次にアーチャーとガチでタイマンはって……」

アーチャー

「……なんでさ……」

拓也

「今きんぴか王とかやってれねェンだよ……もう殺す……

殺して解して並べて揃えて晒してやる……

もうソレは……

壊して、壊したものを更に壊して、壊して更に壊したものをもう
一度壊すよオに……

あア・・・一回だけチャンスをやる・・・引きやガレ・・・

それでもやるってんなら、俺の方はお前の命が続く限り相手になるぜ？

痛みを感じる暇もなく解体れんあいしてやるよ

自分から殺してくれって望むような低能相手に仏心を出すほど俺は優しくない

その場合、栄あるオレの新わざ実験台だ

殺してバラして並べて揃えて晒してヤンよ

ライダー

「が、守護者の後ろに変なオーラが・・・」

アーチャー

「っ、疲れて居るんだな・・・」

ギルガメッシュ

「思い上がったな！雑種ウウウ！！！」

拓也

「うるせエ・・・ジグザグすんぞ・・・」

ギルガメッシュ

「じごくぢごく？」

拓也

「もう五月蠅い！」

ギルガメツシュ

「ぬお!？」

拓也

「避けんな！」

ギルガメツシュ

「このようなああああ!？」

ライダー・アーチャー

(絶対怒らせないようにしよう・・・絶対に)

拓也

「ケツ雑魚いのにコツチくんじゃねエよ・・・三下がッ」

凜

「・・・だ、大丈夫なのって・・・アーチャー!？」

拓也

「ん・・・来てたぜエコツチに」

凜

「ってことは・・・」

拓也

「敵じゃねエかな」

アーチャー

「……凜のうっかりは直っていないのかね？」

拓也

「ああ……」

ライダー

「本当に凜が居るのですね……」

拓也

「信じてなかったのかよ」

ライダー

「いえ、真実でも信じがたいんですが……」

拓也

「はア……」

「まア、ソレは良いとして、桜を助けに行くってことでオツケーかア？」

凜

「……え？」

拓也

「こいつ達の主に捕まってンだってよオ……」

今回までに倒したサーヴァント

ランサー、ライダー、アーチャー、ギルガメッシュ

第50話 「ウゼエ丸……じゃなかったきんぴか王ウゼエ……」(後書き)

駄猫

「はあい……刺されまくった駄猫です」

咲夜

「刺しまくったメイドの咲夜よ」

駄猫

「何も針千本みたくナイフ千本はないでしょ……」

咲夜

「嘘ついたら……千本でしょ？」

駄猫

「まあ、ギャグ補正で直ったから良いんだけど……」

咲夜

「また投げるわよ？」

駄猫

「止めてください」

咲夜

「はあ……それにしても……」

拓也……切れたわね……完全に……」

駄猫

「ジグザグは痛いから……」

咲夜

「痛いじゃ済まないでしょう……」

駄猫

「では次回「勉強すんならやっぱりクルガ！」
次回も見てね！」

咲夜

「見ないと中国みたいに串刺しにするわよ」

駄猫

「ハンドボールやだあ……」

おっと・・・体温が・・・そうか、なら外伝だ！ 第一回

- I S -

拓也

「・・・エエエエ・・・」

ココ何処だよオ・・・でっかい高いモノがア・・・

頭いてエ・・・頭痛がア・・・あと、凜エ・・・宝石剣で頭叩く
なよオ・・・

思わず世界とんじまったじゃねエかよオ・・・」

？

「貴様・・・誰だ？吐かないと警察に突き出すぞ？」

拓也

「畜生・・・不幸だア・・・」

急に飛ばされて来たところでクールビューティに脅されているっ
てどオなんだア？」

？

「・・・ハア・・・それで貴様は誰だ？」

拓也

「・・・うん・・・哀川拓也・・・つつつても知らねエだろオし
なア・・・」

戸籍もココにはねエからなア・・・もう一方通行でいいぜエ」

？

「・・・思い切り偽名だろうが・・・哀川拓也だな？・・・調べて

もらっ

拓也

「だから戸籍ねエと言ってるだろが・・・
もオやだ・・・帰りたい・・・我が家に帰りたい・・・」

？

「・・・貴様はこの世界に存在しないんだが・・・」

拓也

「話聞いてくれよオオオオオオオオオオオ！！」

千冬

「・・・すまなかつたな・・・」

拓也

「いや・・・もう別に良いんだが・・・疲れたよオ・・・コンチクシヨ・・・」

千冬

「・・・すまなかつた・・・」

?

「ちいいいちやああああん!!」

千冬

「(いらっ)」

・ガシ・

千冬

「たあばあねえ・・・空気を読め!」

束?

「いたいいたい!!」

拓也

「・・・えエと・・・オレは・・・どうしたら良いんだア?」

束?

「消えればいい・・・いたいたい・・・痛いよちゅちゃん！
あれ？どんだん気持ちよく・・・」

拓也

「・・・ええええええええ・・・
・・・それとこの機械はなんなんですかア？」

情報？なんじゃこりゃ・・・
頭に響くウウ！！痛いってばよオ・・・

束？・千冬

「「！？」」

拓也

「うおお・・・
な、なんじゃこりゃアアアアアア！？」

千冬

「・・・まさかもう一人乗れるとはな・・・」

束？

「・・・君・・・名前は？」

拓也

「ン・・・一方」

千冬

「偽名は止める」

拓也

「つちエ・・・哀川拓也だア」

束

「私は束だよ・・・拓也ならたつくんだね！」

拓也

「・・・この感じなんだア？機械つてスゲエ・・・」

束

「ISっていうんだよ！本当は例外を除いて女しか乗れないんだけど・・・」

たつくんに興味がわいたんだよ！」

拓也

「・・・ISかア・・・スゲエ・・・
オレでもスゲエって思う程スゲエぞオ・・・
ちよつと待て・・・」

よし、解除できた・・・」

束

「たつくんはこの世界のモノじゃ無いんだよね？」

拓也

「あア・・・ンでその・・・
空気になってる千冬さん・・・どうするんだア？」

千冬

「……空気とは……言ってくれたなア……拓也ア……！」

拓也

「すみませんって！」

束

「しょうがないよちゅちゃんにたつくん駄目なのは駄猫だよ！」

拓也

「束さん……メタは止めましようねエ……」

ンでオレは……ある意味……守護者だったなア……

オレの世界は表は平和だった……

オレが居た裏の世界は魔術師やら何やらが一杯居たぜエ」

束

「ならたつくんも魔術つかえるの!？」

拓也

「オレは超能力をつかえるぜエ……」

そうだ……その石オレに向かって本気で投げしてくれ……千冬さん」

千冬

「……大丈夫なのか?……まあいい……行くぞ！」

・びゅお!!・

・クイイイン・

束

「すごい！ベクトルが変わってるよー！すごい！すごいよー！」

千冬

「まさかこういう能力だったとは・・・」

拓也

「んで・・・飛べるぞ・・・」

千冬

「ISも使わずに？」

束

「解剖したい・・・」

拓也

「おそろしいわッ！

ンじゃ・・・アンタ達だけ特別だゼエ？」

「バサ」

束

「天使みたい・・・」

千冬

「・・・すごいな・・・コレは・・・」

拓也

「ククク・・・そう言ってもらえると有り難エよ・・・」

オレの自慢だしなア・・・コレでも昔は黒かったンだぜエ？」

束

「みてみたかったかも」

千冬

「それにしても綺麗だな・・・」

拓也

「変えられるぞ？」

くかきこけけくきかここかくき・・・」

- バサツ -

束

「格好いいよ！たつくん！」

千冬

「お前は人間なのか？・・・まるで天使だぞ？」

拓也

「ン、オレは昔、幻想殺しの守護者っていわれたりしてたからなア・・・」

「あア・・・答え出す前にコツチにくるとかねエわア・・・告白されたのにそのままとか本当にないわア・・・」

-

おっと・・・体温が・・・そうか、なら外伝だ！ 第一回（後書き）

駄猫

「頭痛がア・・・頭痛がア・・・」

咲夜

「ムリしないようにって言われてたじゃない・・・
今回ばかりは流石にナイフ刺さないわよ・・・
まさか・・・38 から下がらないとは思わなかったわ・・・」

駄猫

「まア、明日には更新出来ると思いますよオ」

咲夜

「・・・はあ
次回は前回に言ったとおり「勉強すんならやっぱりクルガ！」よ
またよろしく頼むわ」

駄猫

「バ アリン噛んで直すかア・・・」

第51話 「勉強すんならやっぱりクルガ！」

あのとき三下から変なモノをはぎ取ったんだが・・・
これは一体なんなんだア？螺旋状の筒の剣？
・・・宝具ならアイツと一緒に消えんだろ・・・
まアいいか・・・

拓也

「ああ・・・授業面倒だぜエ・・・」

ん？あの後どうなったのかってエ？

- 回想INしたお -

凜

「え・・・？嘘でしょう？」

拓也

「動揺も分かんだがよ・・・」

まア・・・オレが助けに行くから心配すんな・・・」

凜

「・・・そうね・・・拓也が行ってくれるなら・・・大丈夫よね・・・」

ライダー

「信頼しあっているんですね」

アーチャー

「フム……女の子らし」

・ガギン・

アーチャー

「何をする!？」

凜

「余計なコト言おうとしたからよ!」

拓也

「短気は損気だから……落ち着こつぜ」

凜

「……分かったわよ……」

・ギラッ・

アーチャー

「なんでさ……」

・回想オフラインしたお・

因みにそれぞれ色々なトコに行っているようだよ
それにしても・・・アイツラ凜の魔力が上がってるからって・・・
同時に契約するってどうよ・・・

拓也

「そう言えばさア・・・引越したよなア・・・」

タカトシ

「なにがだい？」

スズ

「生徒会室よ」

優奈

「3階から2階って・・・微妙すぎねえか？」

全員

「・・・」

拓也

「さて・・・と・・・次は何の時間だ？」

優奈

「確かテニスだぞ」

拓也

「mjk・・・じゃねエマジかア・・・」

タカトシ

「テニス苦手なの？」

拓也

「球技の中じゃ・・・一番苦手だア・・・」

ムツミ

「拓也君にも苦手なのってあるんだー」

拓也

「人間なもの」

- テニス場 -

バカA

「聞いたぜ！哀川！！」

テニス苦手なんだってなあ！！！！オレと勝負しやがれ！！！！！！」

拓也

「何なの？バカなの？死ぬの？てか死ぬよ・・・メンドクセエ・・・」

「

バカA

「行くぜえ！」

拓也

「・・・燕返し」

バカA

「なん・・・だと・・・？」

女子軍団

『キヤー！！哀川クウウン！！！！』

拓也

「15 - 0 だなア・・・」

バカA

「畜生！！」

拓也

「糞落とし」

バカA

「つくそ！」

拓也

「30 - 0」

バカA

「ならお前がサブしろ！」

拓也

「お前・・・ルールしらねえだろ・・・

まアいい・・・」

- バシユン！ジジジジジジジ！スン -

男子テニス部軍団

『ツイストサーブ!?!』

拓也

「ハア・・・You still have lots more
to work on・・・」

バカA

「苦手なの嘘だったのか!?!」

拓也

「嘘じゃねエ・・・」

テニスより野球とかのが出来るしなア」

バカA

「なん・・・だと」

優奈

「流石拓也だな・・・」

凜

「天才っていうか・・・なんていうか・・・」

ムツミ

「すごいね!拓也くん!」

タカトシ

「もう・・・アレだね・・・」

平等な不平等、平等な不平等だね・・・」

今回までに倒したサーヴァント

ランサー、ライダー、アーチャー、ギルガメッシュ

第51話 「勉強すんならやっぱりクル ガ！」（後書き）

駄猫

「クル ガ最高ですね・・・宿題がはかどる・・・
あと、ちゃんと療養していたので絶好調ですよ！」

咲夜

「なら良いんだけど・・・
これからは身体に気をつけなさいよ？」

駄猫

「・・・咲夜姉さんが優しいよ・・・
と言うわけで、更新は毎日に戻します・・・
では次回・・・」「・・・何でお前やねん！！！」次回も見てね！」

咲夜

「見ないと中国みたいに串刺しにするわよ」

駄猫

「病気には気をつけようね！」

第52話 「なんなんですかア・・・一体よオ」

- 放課後 -

優奈

「さて・・・そろそろ教えて貰おうか・・・何を隠してるんだ？」

拓也

「・・・あア・・・」

ハイ、今問い詰められてるぜエ・・・

うん・・・秘密にしようと思ってたんだがよオ・・・

いきなりばれるってどオなんだア？

隠し事は幼なじみには効かないってコトかア？

まア首つっこまれちまったら守るしかねエンだが・・・

さて・・・本当にどうしよオか・・・

凜

「・・・もう良いんじゃない？話してあげたら」

拓也

「はア・・・そうすつかア・・・」

優奈

「・・・で、どういうコトだ？」

拓也

「んーから説明すんのかア？」

優奈

「頼む」

凜

「え〜と眼鏡眼鏡」

拓也

「・・・なんでやねん・・・」

凜

「説明するときにはやっぱりつけないと」

拓也

「そう言うキャラ設定みたいなモノ要りません・・・ハア・・・

一気に力抜けたぜ全くよオ・・・ンじゃ、話すぜエ？」

本当に力が抜けちまったよ・・・

全くアイツは天然なのか、マジメなのか・・・

あ、そうか、うっかりn

- ガギン -

凜

「要らないことは考え無いようにするのね」

拓也

「へエイ・・・」

優奈

「・・・待ってるんだが・・・」

拓也

「おっとすまねエ・・・」

「先ず第一にお前を狙ってる敵がいる・・・」

「正確にはお前の右手に宿っている幻想殺しだな」

優奈

「・・・当麻が言ってたフィアンマとか言うヤツか？」

拓也

「分からねエ・・・情報が少なすぎるからなア・・・」

「全く情報屋でもいねエかなア・・・こちら辺によオ・・・」

「んじゃ、次にいくぞオ・・・」

優奈

「おっ」

拓也

「その連中はサーヴァントつつつて分かるかア？」

優奈

「凜の世界の英霊だっけか？」

拓也

「そうそう」

「んで、その英霊と既に数度にわたって交戦している」

優奈

「生き残ってるつつうことは英雄倒したってことだよなあ・・・」

「おいおい・・・ドンだけ規格外なんだよ・・・どこぞのマックス」

パワー冷蔵庫ですら

勝てないんじゃないか？」

凜

「激しく同意するわ・・・」

拓也

「オレの戦闘力は軽く53万超えてんのかア？」

優奈

「超えてるんじゃないか？」

凜

「超えてるでしょうね」

・・・其処までなのか？オレ・・・
もしかして孫さんにも勝てんのかア？・・・ありえねエ・・・
全くどうなっているンやら・・・なア？駄猫オ？

駄猫

（其処でまさかのボクですかい・・・
設定強すぎだけど他の世界が束になって戦いに来たら負けるんじ
やないかな？）

束にならなきゃオレに勝てねエってドンだけだよ・・・

駄猫

（あ・・・一人・・・君でも勝のが難しいn）

- プツン -

つち・・・いらねエ所できりやがって・・・
メンドクセエなア・・・本当によオ・・・

拓也

「えつとオ・・・今倒したのが・・・」

凜

「アーチャー、ライダー、ランサー、ギルガメッシュ^{きんぴか}ね」

優奈

「きんぴか？」

凜

「ええ、そうよ・・・」

・・・てか・・・

拓也

「何時の間に眼鏡かけてンだア・・・」

・スチャ・

凜

「良くないかしら・・・説明に眼鏡・・・伊達だけど」

拓也

「そう考えるお前が分からねエ・・・」

優奈

「取り敢えず・・・サーヴァントがいるし巻き込みたくなかった・・・と・・・?」

拓也

「イグザクトリィ・・・その通りだぜ」

優奈

「何で今英語を使ったかはおいといて・・・
巫山戯ンな・・・ドンだけ心配させたら気が済むんだ？拓也・・・
私はな・・・お前に内緒事されるのが嫌いだ・・・大嫌いだ・・・
と言っわけで・・・」

一 発 殴 ら せ る ！

拓也

「何でだよ!?!」

優奈

「殴りたくなつたんだよ・・・」

凜

「おい・・・優奈さん・・・しゃべり方、てかキャラ変わってるわよ」

優奈

「知るか・・・拓也が泣くまで殴るのをやめないツツ!」

・又ツ・

アーチャー

「凜……右前方から魔力だ」

ライダー

「どうしますか？凜……」

凜

「二人とも……喧嘩所じゃなくなったわよ……」

優奈

「……テメエ達誰だ？」

拓也

「後で教える……コイツ……強いな……」

アーチャー

「君は野菜人か何かか？」

拓也

「さアな……ンで誰が来るンだ？」

ライダー

「セイバー……のようですね……」

凜

「バースーカーじゃ無かったことに喜ぶところなのかしら……」

拓也

「さア？」

ちよっと某憂鬱の涼宮さんの古泉ふもつふくんみたく首をかしげて

みた

優奈

「・・・」 -バキ-

拓也

「痛エ!?!」

ちゃつとした思春期のお茶目じゃねエか・・・見逃してくれよ・・・

アーチャー

「来たぞ!」

セイバー

「・・・戦いたくはないので一応聞きます・・・
守護者よ・・・幻想殺しを渡すつもりはないか?」

拓也

「さらさらねエな・・・メンドクセエコト聞くなよ・・・ンで、
メエは・・・」

凜

「セイバー・・・アナタ誇りはどうしたの?」

セイバー

「私は・・・礼呪の所為でうまくつごけないのですよ・・・凜・・・」

拓也

「礼呪?」

アーチャー

「我々英霊がS」

優奈

「そげぶ」

・ピキイイイイン・

セイバー

「・・・礼呪が無くなった？」

拓也

「お手柄じゃねエか・・・でも存在は消せねエンだな・・・」

優奈

「そら・・・な・・・」

凜

「でもお手柄よ！優奈！」

優奈

「そ、そうか？」

拓也

「確かに戦う理由が無くなったしなア・・・
ンで其処のセイバーさん・・・アンタはどうすんだ？」

セイバー

「従う必要が無くなったのなら別です

桜が囚われていて、かつさらに礼呪があつたので動けなかったの
ですよ

でも・・・もう大丈夫なようですね・・・」

拓也

「ん～・・・オレって魔力あんのかア？」

凜

「見た感じは無いのよね・・・」

優奈

「まあ、最強の絶対能力者だしな・・・」

拓也

「残念だなア・・・お・・・！」

アーチャー

「どうかしたのかね？」

拓也

「ちよっと待ってる」

- 30分後 -

拓也

「ほい……勝利すべき黄金の剣」

カリバーン

型月組

「……!?!?」「」「」

拓也

「他にもよオ……」

「コレにコレにコレだろ？後コレにコレでさらにコレ……ンで持
つてコレ」

アーチャー

「ちよつと待つてくれ……トレース・オン……」

「全て遠き理想郷……約束された勝利の剣……干将・莫耶……
射殺す百頭……」

「破戒すべき全ての符……乖離剣エア……右齒嚙咬と左齒嚙咬
……
……一体どうやって集めたんだ？君は……」

拓也

「ン？拾っただけなんだが……」

「ソレで……もしかしてなんだが……宝具でテメエ達現界でき
んじゃねエのかって」

「思っつてなア……相当な魔力なんだろ？」

アーチャー

「あ、ああ……」

優奈

「トレジャーハンターにでもなったらどうだ？」

凜

「激しく同意するわ・・・」

セイバー

「取り敢えずやってみますね？」

ン？結果としては成功だったんだが・・・

駄菓子菓子！あ、間違った・・・だが、しかし！

何故かオレがマスターになってしまった・・・え？誰のって？

セイバーのだよ・・・しかも何故か知らンが能力強化されてALL

Sだって・・・

可笑しいだろ？笑うなら笑えよ・・・

なんなんですかア・・・一体よオ・・・

?

「もうそろそろオレが出なきゃならねえかな？」

アサシン

「つく……」

キャスター

「っちい……」

バーサーカー

「……」

今回までに倒したサーヴァント

ランサー、ライダー、アーチャー、ギルガメッシュ、セイバー

倒されてしまったサーヴァント

アサシン、キャスター、バーサーカー

第52話 「なんなんですかア……一体よオ」（後書き）

駄猫

「明日から三日に一回更新です……文化祭……祭りです
ハッスルします」

咲夜

「程々にしときなさい……」

駄猫

「わかってますよ……
唯初めての文化祭なもんで……テンションのインフレが」

咲夜

「子供ね……」

レミリア

「私は子供じゃないわよ！」

駄猫

「……」

咲夜

「……」

レミリア

「……何よ……」

駄猫

「お疲れ様でした」

咲夜

「ええ、お疲れ様」

レミリア

「え？ナニコレコワイ……」

えくとカンペが……何々？

では次回……

「……レプリカの世界って……モロパクリじゃねエか！」次回も見てね！

……これでよかったのかしら……？

まあいいわ……見なかったらグンニグルよ！」

駄猫

「ナイフよりヒドイ……」

第53話 「……レプリカの世界って……モロパクリじゃねェか！」(前書

遅れに遅れてすみません！

はぁ……がんばろっと……

第53話 「・・・レプリカの世界って・・・モロパクリじゃねェか！」

・・・タイトルから分かるように

今回は残念だぜエ？別にいいのかア？

まア、読者さん達テメエ達が良いンなら別にいいンだがよオ・・・
ンじゃ、行くぜエ？

拓也

「ニヤロウ・・・みすったなア・・・」

優奈

「ン？どうしたんだ？」

拓也

「いや・・・オレの家パンパンだろオ？」

優奈

「うん・・・そうだな・・・飽和状態だし食費が凄いな・・・
特にセイバーの食力が凄すぎてビックリだぞ？・・・どうすんだ
？」

拓也

「しょうがねエから・・・改築すつかア・・・
どうせなら・・・三千院家みたいな巨大な家にすつかア？」

どうしようかな・・・マジで・・・

優奈

「改築する程の金・・・あんのか？」

拓也

「舐めんな・・・

オレは色々やってんだよ・・・

株然り、裏の仕事然り、漫画家然り、投資家然り、声優然り」

優奈

「・・・」

「なんの話してたの？」

優奈

「拓也はスゴイってコトだ・・・」

タカトシ

「スゴイのは元々じゃない？」

スズ

「概ね同意ね」

優奈

「いや・・・な？」

コイツのすごいトコはよ・・・

株、裏内職の仕事、漫画家、投資家、声優を全部こなしてるってこと
なんだ」

全員

「・・・え？」

優奈

「だから

株、裏内職の仕事、漫画家、投資家、声優を全部こなしてるってこと
なんだって」

タカトシ

「ちよっと待って・・・」

- 回想 昨日のアニメ -

会長

「だから！貴様は何故ここにいるんだ！」

拓也の声優しているキャラ

「いや、会長のピンチは見逃せ無くって」

会長

「ピンチなんかじゃ」

拓也の声優しているキャラ

「まア先にその変態共をどっにかしよっ」

- 回想終了 -

・・・昨日声妹と聞いた・・・アニメの中で・・・」

スズ

「・・・

- 回想開始 -

夢喰い

「・・・夢路」

武装明晰夢

「メリー・・・大丈夫だ・・・」

- 回想終了 -

私も聞いたわね」

凜

「ガンバリすぎじゃない？」

優奈

「止めないだろうな・・・止めたとしても」

タカトシ

「何の為にそこまで？」

優奈

「・・・私たち親いないだろ？」

その上最近は居候とかも泊めだして・・・余計に頑張ってるだと思っ」

凜

「私も頑張らないといけないわね・・・」

優奈

「うん・・・」

スズ

「・・・アイツ・・・何時ねてるの？」

・ニユッ

全員

「……!？」

拓也

「アイツつてなア……酷くねエかア？」

オレの睡眠時間は大体3時間位だぜ……コーヒーは必需品だぜ

エ

優奈

「寝ろ！バカ！」

拓也

「バカつて酷くねエかア？」

スズ

「イチャイチャしないで……」

そう言えば最近変な噂を聞くんだけど……」

タカトシ

「え〜と……確か自分と同じものがもう一人いるってやつ？」

凜

「……どっいつコト？」

スズ

「なんて言えばいいのかしら……レプリカが出るって噂で

見た人は体調が悪くなつて最悪死ぬって噂よ」

拓也

「……」

どういうことだ？

レプリカだったらテイ

どうなってやがんだア？

・・・訳わからん・・・

ズのジ・ア

スのアレじゃねエか・・・

第53話 「・・・レプリカの世界って・・・モロバクリじゃねェか！」（後書

連続投稿しますので・・・次の話へ・・・

次回「神の右席・聖なる右」

よろしくお願ひします・・・では！

第54話 「神の右席・聖なる右」

一体レプリカってどういうコトなんだろうか・・・
世界がかかっているような気がしてしょうがねエ・・・

・ブオン・

生徒H

「アレなにかしら？」

生徒Y

「・・・嫌な予感がする」

生徒K

「閉鎖空間の時と同じ嫌な感じなんだが・・・」

生徒I

「・・・機関に連絡したんですが分からないそうです」

生徒M

「怖いよ〜Kくん〜」

・・・嫌な予感しかしねエ・・・
うち・・・遂に魔術師さんですかア・・・ラスボスなんだろうがメ
ンドクセエ・・・

フィアンマ

「さて・・・オレ様は神の如き者だ・・・
ココの世界は「歪んでいる」・・・よってコレより断罪を始める・・・
オレ様の行動が絶対的な善の到来を意味するものであるから・・・
コレは正義による鉄槌だ」

拓也

「……………はア……………タカトシにスズは誘導しながら逃げる
優奈、凜はアイツ達に声かけてこい……………」

タカトシ

「拓也はどつするつもりなんだ？」

拓也

「ン？まア……………かるウく人助けかねエ……………」

スズ

「……………ムリしないようにね」

拓也

「オレを心配するとはなア……………ククク
まア、その気持ちはちゃんを受け取らせて貰うぜエ……………」

スズ

「人が心配してるつてのに……………」

拓也

「ククク……………すまねエなア……………
さア……………さっさと逃げな……………アブねエぞ……………」

タカトシ

「萩村！行くよ！拓也……………またね！」

拓也

「またなア」

・タツタツタツタ

拓也

「さて……オレも行くかねエ……」

・ッダ

アリア

「拓也くん……何処へいくの？」

拓也

「ちつとばっか人助けだ」

シノ

「君が決めたことなら何もいわんが……帰ってきてくれよ？」

拓也

「モチロンだ……またなア」

ミク

「拓也くん！」

拓也

「ン？おオ・・・よオ・・・」

ミク

「頑張つて！」

拓也

「センキュー・・・受け取らせて貰う・・・またな！」

ミク

「ちゃんと帰ってきてね！また！」

拓也

「今度は誰かと思ったらお前らか・・・」

メイコ

「行くんでしょ？・・・はあ・・・無謀なことするわね・・・」

拓也

「最悪死ンでも止めっから大丈夫だぜエ」

メイコ

「アタシはいつも通り命令するわ・・・生きるのをあきらめないで・・・」

カイト

「ガンバレよ〜アイス喰いながらまっとくから・・・また放送しような」

リン

「拓也さん頑張ってくださいー！」

レン

「頑張ってくださいね・・・アナタはオレの目標でもあるんですから」

拓也

「めっちゃ今日言われるなア・・・まアいいか・・・またな！」

優奈

「そろつたぞ……拓也」

拓也

「そオだなア……」

さて……とオレはテムエ達の世話してんだから……オレの命令を聞け……

こつから先は……多分果てしない死闘になるだろオなア……でも……絶対に死ぬな！

生きることをあきらめるな！仲間を助ける！コレは命令だ！ンじゃ……行くぜエ……場所はソラだ……！」

アーチャー

「私とライダーのマスターはリンなんだがね……今度こそ守って見せる……と決めているのでな……」

ライダー

「サクラは無事でしょうか……？」

アーチャー

「分らんが助けよう……セイギノミカタだからじゃなく……」

『桜』の味方だからな……オレは……」

凜

「私と優奈は拓也について行くわ」

拓也

「あと、セイバーはライダー班についてくれ……」

セイバー

「分かりました……タクヤ」

拓也

「よし……行くぞ！」

全員

「応！」

拓也

「フィアンマ……^{テメエ}は自分の『正義』を貫いたつもりなんだからオナ……」

「ならオレは……^{テメエ}自分の『悪』を貫いてやる……そして^{テメエ}の野望を潰す！」

ファイアンマ

「桜・・・だったか？お前は聖杯だからな、殺すことはしない・・・
安心しろ」

桜

「タ・・・スケ・・・テ・・・『先輩』・・・」

ファイアンマ

「幻想殺しの守護者・・・来るなら来い・・・
お前が来るまではこの世界は潰せないからなあ・・・なんせお前
がこの世界の主人公だからな・・・」

絶夢お前は桜をみはつとけ」

絶夢

「ハイハイ分かったよ・・・」

それにしてもオレと同じようなことしてるとはな……」

ファイアンマ

「この世界が気に喰わないんでな」

絶夢

「足下掬われんなよ？オレと同じになるからな」

ファイアンマ

「お前に言われなくても分かってる！早く行ってこい！」

絶夢

「へへへ」

・ガチャツ……バタン・

ファイアンマ

「楽しみだ、楽しみだ、楽しみだ！！」

早くこい……早くこい……貴様を殺す迄世界は終わらんからな……

例え粉々に世界をしたとしてもな……」

第54話 「神の右席・聖なる右」(後書き)

駄猫

「おお十月前に終わるかも！」

咲夜

「先に弁解しなさい・・・」

駄猫

「あ・・・そうですね・・・活動に書いたように
学校でちよつと色々あつて・・・

まあ反省はしましたのでそこら辺は大丈夫です

まあ、何をしたかと言うと授業中に弄つてまして・・・

あるモノを・・・ソレで、まあなんとというか・・・

モノは没収でPCは使えない状況でww

え〜と・・・待っていただいていた方には申し訳ありません

心から謝罪します・・・

何でオレあんなバカなことしたんだろうとか

色々考えて謹慎した一週間でした

自分が餓鬼だったし、バカだったんですよ・・・

甘く見ていたつうこともありました・・・

本当に申し訳ありませんでした」

咲夜

「バカもココまでくれば偉大ね」

駄猫

「本当にすみマセンでした・・・」

咲夜

「まあ・・・今日二本更新したのは頑張ったわね」

駄猫

「一週間のブランクあったんで色々ありますが・・・取り敢えず書きました・・・考えてたヤツを・・・後、完全に明日から文化祭モードです・・・28日が次回更新かな？」

咲夜

「・・・宣言したとおりにしなさいよ？」

駄猫

「・・・明日更新するかもです」

咲夜

「・・・まさかのそっち方向に修正するとわね」

駄猫

「勉強だけではつまりますからねw」

咲夜

「文化祭の用意は？」

駄猫

「大丈夫・・・簡単な設計かつ便利なのを考えましたからw」

咲夜

「そつ・・・なら楽しみにしてるわ・・・明日更新するか・・・ね」

駄猫

「あいw

次回・・・「最強で居る意味」

よろしくお願いします！では！

咲夜

「見ないと串刺しよ」

第55話 「最強で居る意味」(前書き)

駄猫

「……………」

咲夜

「ふう」

拓也

「いい顔してやがんなァ……………」

第55話 「最強で居る意味」

拓也サイド

拓也

「はア……思い切りアレだよなア……？」

優奈

「窓の無いビルって目立つな……ものすごい……」

凜

「……まあ、見つかったんだしいいじゃない？」

拓也

「モチベーションが……」

優奈・拓也

「「なあ？」」「」

凜

「あゝもう！グダグダ言っていないで行くわよ！」

拓也

「まア……こっから先は危険だし……気を引き締め直すかア……」

優奈

「そうだな」

凜

「ソレで良し！」

拓也

「そういう凜もすっかり発動させんなよ？」

凜

「発動させたくてさせてるんじゃないわよ！」

優奈

「アレは殆ど呪いだしな……」

アーチャーサイド

アーチャー

「向こうは本拠地をみつけたらしいな……」

セイバー

「こっちも早く見つけなくては……」

ライダー

「サクラ……心配です……」

アーチャー

「心配するのもいいが……」

向こうから白黒のへんな男がやってきて居るぞ?」

・ヒュ~~~~~・……ズドン・

絶夢

「お……敵発見か?」

アーチャー

「……君は誰だね?」

絶夢

「ンあ?俺は絶夢……兄弟の陰にして……モノガタリを壊そうとして失敗したバカだ」

セイバー

「……敵……のようですね」

絶夢

「お?まあお前らがサクラって」

ライダー

「死ねえ!」

セイバー・アーチャー

「「ええ!?!」」

なんでさ!?!いきなり攻撃とかバカなのか!?!
桜が関わってるからっていきなりは無いだろう!?!
某戦隊系とか仮面騎乗手とかでも話は全部聞くだろう!?!?

絶夢

「うおっと……なんだよ!全部話させてくれたっていいだろう!」

ライダー

「全部話させるのは所詮フィクションだけだ……それより……
ハヤクサクラヲ返せ!」

セイバー

「ライダーのしゃべり方が変です!ものすごく可笑しいです!って
いうか怖いです!

どうしましょう!?!?シロウ!?!」

アーチャー

「俺だつて怖いんだよ、セイバー……
あんなの……俺の知ってるライダーじゃない……」

絶夢

「っちょ!?!?聞いてないぞ……ライダーって他のサーヴァントよ
り弱いはずだぞ!?!」

てかコイツ既にバーサーカーじゃねえか!?!?!?」

ライダー

「アハハハハハ!サケルナ!アト死ネ!」

絶夢

「ンギヤアアアア!？」

・・・なんでさ・・・

拓也サイド

拓也

「・・・なんか今ものすごいシリアスには絶対に合わない何かを感じたんだが・・・」

優奈

「・・・取り敢えず畏れも無いみたいだし・・・」

凜

「すみましようか」

アーチャーサイド

アーチャー

「・・・まさか取り乱していない時の貴様がこんなに強いなんてな・
・・・」

絶夢

「こちとら一応ラスボスだったモンでな・・・」

セイバー

「つく・・・バーサーカーライダーさえ居れば・・・」

絶夢

「読み方がちがくねえか？まあいい・・・よくはねえが、まあいい」

アーチャー

「もしかして・・・貴様が他のサーヴァントを潰したのか？」

絶夢

「ん？ああ、違う違う・・・他のを倒したのはあの赤髪」

セイバー

「と、いうことは・・・タクヤが危ない!？」

絶夢

「んゝ取り敢えず・・・ココを通りたいんなら・・・俺を倒していきな!」

アーチャー

「・・・ソレ負けフラグじゃなかったか？」

セイバー

「・・・気にしたら負けでしょう・・・」

絶夢

「・・・んじゃ・・・本気で行かせて貰いましょうかと・・・」

ズズズズズ

・・・なんだ？あのバケモノは・・・黒い鎧をきているのか？絶夢・
・・・なのか？

絶夢

「さゝて・・・軽く終わらせて貰いましょうかとお!」

ガギン

セイバー

「っく」

アーチャー

「我が骨子はねじれ狂う・・・偽・螺旋剣?!」

絶夢

- きかねえよ! -

アーチャー

「なに!？」

セイバー

「なら・・・風王鉄槌!」

絶夢

- 痛くも痒くもねえ! -

セイバー

「つく」

アーチャー

「赤原獵犬!」

絶夢

- ソレでおわりか?・・・ならこつちからだ・・・ユメヲタツホノオ! -

アーチャー

「熾天覆う七つの円環!」

- ガンガンガンガンガン・・・バリッ! -

アーチャー

「こつちい!」

絶夢

- 兄弟はもつと凄かったのになあ・・・夢の無い世界 -

アーチャー・セイバー

「ガアアアアア」

絶夢

「お前ら相手にあの身体になるのは勿体なかったか・・・

なあ兄弟・・・俺が生きてるならお前もいきてるだろ？・・・早く来いよ！」

拓也サイド

拓也

「・・・礼祝が・・・」

凜

「消えていく・・・」

優奈

「……………つづつことは……………」

……………はあ……………またうしなっちゃまったのかア……………
また俺は……………」

拓也

「アイツ達が足止めしてくれてたってことだ……………もう部屋は間近だ……………行くぞオ！」

・ガチャン・

ファイアンマ

「よお……………主人公」

拓也

「ンだア？ラスボスウ・・・」

ファイアンマ

「俺様の正義はテメエを殺せば叶う・・・聖杯も使うがな・・・」

凜

「・・・桜のことね？」

ファイアンマ

「ああ」

優奈

「・・・凜・・・私たちがココにいても邪魔になるだけだ・・・探しに行くぞ！」

拓也

「センキュー・・・優奈・・・」

「ってなわけで・・・ファイアンマだっけかア？」

「俺はアイツ達を守れば俺の悪は突き通したことになる」

「俺が最強で居る意味の達成にもなる・・・さあ行くぞ・・・グロ

テスクヤロオ！」

ファイアンマ

「・・・来いよ！主人公！」

拓也

「ウガアアアアア！」

「ヴァサ・・・」

ファイアンマ

「知ってるか？俺が右手を振るうだけで・・・」

- ガン -

拓也

「ッグ・・・何だよ・・・チートすぎんだろ・・・振ったら当たるとかよオ」

ファイアンマ

「なんせ俺様だから・・・」

・・・マジでチートすぎンゼエ・・・全くよオ・・・俺に勝てる課題を用意しろよ・・・
・・・どオしよオかねエ・・・？

拓也

「でも未だ完全じゃねエンだろ？なんせ幻想殺しが必要なんだからなア？」

ちよつとでも強気発言してねエと俺が潰れちまうな・・・
いつからだろう・・・恐れを知ったのは・・・
一方通行の時かア？いや、ちがうなア・・・自分を認めたときかア？
・・・はア・・・生きて帰ってエなア・・・

ファイアンマ

「貴様さえ殺せば手に入るんだ・・・さっさと死んで貰おうか」

- バキッ -

拓也

「ガッ」

はア・・・畜生・・・今更なんだよ・・・
死んでも止めるってきめたんだろ・・・

フィアンマ

「何とかしてみろよ！」

- バキイ! -

拓也

「ガハッ」

いてエ・・・いてエよ・・・
でももうこんな痛いのは逃げたいよ・・・
もう頑張らなくて良くないか？もう逃げてもいいんじゃないか？
・・・駄目だ・・・俺じゃなくなっちゃう・・・
某シンジくんだって言ってたじゃねエか・・・

拓也

「オラア！」

フィアンマ

「効かんよ！」

はア・・・なんでこオなっちゃまったんだろオな・・・
昔みたく何も背負わず生きたいなア・・・
友達と無邪気に遊んでたときに戻りたいなあ・・・
おれは・・・おれは・・・

フィアンマ

「フン……主人公と言ってもこんなモノか……」

優奈サイド

……あの白黒の女の子……

優奈

「凜！あの子じゃないのか!?!」

凜

「さ……くらっ?」

黒桜

「おねえちゃん……もう駄目なんだよ……殺して……お願い……」

……え?今なんて言った?……殺して?巫山戯んな!

優奈

「・・・巫山戯んな・・・殺してだあ？」

舐め腐ってんじゃねえぞ？

凜・・・テムエもそうだ・・・何故妹に死んで欲しくないの一言
もいえねえんだ？

ばっかばかしい・・・」

凜

「・・・だって・・・」

優奈

「だってもかってもねえよ・・・理由なんていらねえだろうが！
まずは・・・テムエ達のろいのその巫山戯た幻想をぶち殺す！」

・ピキイイイン・

桜

「・・・あれ？何で元に戻れたの？」

凜

「ごめん・・・ごめんなさい・・・桜・・・」

優奈

「はあ・・・最初から諦めてんじゃねえよ・・・」

凜

「でも・・・なんで？」

優奈

「はっい、問題です・・・幻想殺しの能力は？」

凜

「……異能を無差別に……ああ！」

優奈

「はぁ……分かったか？バカモノ」

- ヒュー……ズドン -

三人

「!?!」

拓也

「ちつくしょう……」

拓也サイド

俺は決めてたじゃねエか……

何弱気になってんだア？……馬鹿らしい……

俺はヒーローじゃねえしチンピラでもねえ……なら……何だ？

俺は悪党だろ！自分自身で張れるモノは自分で選んでやる！

ファイアンマ？関係ねエ……

俺がやりたいのは……守りたいのは……

ファイアンマ

「オラ！」

・ドギャン・

おっと落ちてるなあ……おれってば……

下にいるのはと……見つけたのか……まア信じてはいたんだが……

まあ反射はしとくか……

・ズドン・

拓也

「ちつくしょう……痛エ……」

優奈

「え？何でそんなにボロボロなんだ？拓也は無敵だろ？最強なんだから？」

凜

「優奈！」

優奈

「それ以上ボロボロになったら死んじゃうよ……

嫌だよ……拓也……貴方とずっと一緒に居たいよ……」

拓也

「……そオ……だな

俺も……ずっと一緒に居たかった……テメエ達と
大丈夫だ……ちゃんと戻るから……
ファイアンマには - 反射 - もナニも通じねエ
……だからどうした？俺のこの力は自分の大切なモンを守るた
めに使うつて決めた
ンだよ……」

ボロボロだった翼が元にもどって……戻って……あれ？なん
で白いの？

戻つてねエエエエ！！

まア……良い……やつてやる……やつてやるよオ！

拓也

「ファイアンマ……ここから先は一方通行だ……
とつと元の居場所世界に引き返しやがれエ！！！！！」

ファイアンマ

「翼が白くなつただけで何ができる！」

拓也

「しらねエよ！でも俺は未だ立っている……テメエを殴るぐらい
は出来る！」

当麻と優奈の十八番だが……

ファイアンマ……世界をぶちこわす？俺様が正義？

まずは、そのふざけた幻想をぶち殺す……ッ！」

ファイアンマ

「効かん……グバア！」

拓也

「効く……!?ならココが好機だなア！」

- バキバキバキ -

フィアンマ

「つぐ……お前はやはり本物の主人公だったか……
まあいい……俺様には戻るところが」

絶夢

「フン」

- グハッ -

絶夢

「おとなしく逝け……おい……主人公……俺らはもう消え
る……

「つだけいつといてやる……諦めるな……絶望におちるな……
じゃあな」

拓也

「……ンだア？あの真つ黒……まアフィアンマ掃除してくれて
有り難かったがなア」

優奈

「拓也！」

凜

「拓也ッ！」

拓也

第55話 「最強で居る意味」(後書き)

駄猫

「次回はいあんま編さいしゅーかい・・・
色々飛んで三巻に突入!？」

拓也

「お〜い・・・ナイフささってんぞ」

駄猫

「そこはするーでb」

咲夜

「カタカナにする所だけが消えたみたいね」

拓也

「餓鬼みたいだなア・・・」

駄猫

「餓鬼いうなし・・・」

因みに昨日、一昨日と帰ったのおそかったのでこーしんできませんでしたw」

咲夜

「少しは見直したのに・・・」

拓也

「・・・今回の長さ・・・」

全員

「「「」」」」」

駄猫

「次回もよろしく願いします・・・では！」

咲夜

「見ないと中国みたいに串刺しよ」

拓也

「スルーすんな・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9340s/>

哀川くんの桜才戦記

2011年10月5日21時02分発行